北海道大学大学院 消化器外科学分野 I
～教室年報：2014年～

Department of Gastroenterological Surgery I
Hokkaido University Graduate School of Medicine
Annual Report 2014

北海道大学大学院
消化器外科学分野Ⅰ
教授　武冨　紹信

巻頭言

昨年に引き続き２冊目の教室年報の発行の時期を迎えました。

大学の使命といわれる「臨床」「研究」「教育」を少しでも充実させ、これまでの90余年の伝統の上にあぐらをかかず「世界一の外科教室」を目指して活動してきた１年間の記録です。原稿をめくりながら、この１年間、皆様の期待に応えられる活動をしてきたのか？世の中の批判に耐えられるのか？若手のやる気に応えるやりがいを提供できたか？など反省ばかりしております。人間は打たれなければ強くなりません。私の人生訓の一つに「人間つらい時が伸びている時」という言葉があります。「最近楽だな」「楽しいな」と思ったときは堕落がはじまっていると考え、自分を戒めるようにしています。この年報を手に取っていただいた教室関係者、同門の先輩方、全国の諸先輩方におかれましては、是非忌憚のないご意見・ご批判をいただき、我々を叱咤激励していただきたいと考えております。

今年の大河ドラマは「花燃ゆ」です。明治維新を生き抜いた吉田松陰の妹・文を主人公として、多くの松下村塾々生たちとともに激動の長州藩の運命に翻弄されながらも、松陰の志を新しい時代へと引き継いでいく話です。低視聴率が話題となっているようですが、私は明治維新の頃の話が好きで松陰の半生を追うことができるこのドラマを毎週楽しみにしています。吉田松陰の言葉は、言葉を超えた説得力をもって今に引き継がれています。松陰が塾生たちにいつも問いかけていたのは、「君（きみ）の志（こころざし）は何ですか？」。この言葉は以前にもまして私の心に迫ってくるものがありました。私が赴任して４年半が経過しましたが、これまでに40人の素晴らしい資質をもった若手医師が教室に入局してくれています。私を含め関連施設を含めた全教室員には、彼らを一人前の外科医に育てあげる義務があります。「君の志は何ですか？」と問いかけつつ、10年後、20年後に彼らが道内、全国、世界のいろんな場所で活躍している姿を楽しみにして、一緒に成長していきたいと考えています。

今回2014年教室年報を編纂するにあたりご協力いただいた教室員および同門の諸先輩方に、ここにあらためて御礼申し上げます。特に、編集委員長として頑張ってくれた柴崎晋君、途中からその任を引継ぎ立派に仕上げてくれた吉田雅君に心より感謝申し上げます。“志”ある外科医が集まり、厳しいながらもさわやかな風の吹く外科教室を目指してこれからも努力して参ります。

（2015年５月７日）

退任の挨拶

北大病院手術部副部長を退任して　―思い出すままに―

北大51期（昭和50年卒業）
佐藤　直樹

振り返れば、私は、葛西洋一教授の最後の大学院生であり、学位取得者であった。教室の混乱期、学位審査は葛西先生のご逝去の後に第二外科の田邊達三教授に代行の主査を取り持っていただき行われた。テーマは肝再生とhepatotrophic factorをflow cytometryで測定しもの。内野教授の時代になって半年、私は苫小牧市立総合病院へ。その３年後に教室へ戻って肝臓グループに。宇根良衛、中島保明先生に次ぐ３番目の助手（手術部助手）に、その後米国のクリーブランドクリニックに留学、帰国してすぐに近藤征文先生の後任の外務委員長になった。そして、平成５年８月に手術部副部長に就任した。

「君しかいない」の内野教授の声に、私の先輩に引き受け手がいないこともうかがい知れた。当時の「手術部運営委員会」、前任の三浦哲夫先生の後任の副部長選出。麻酔科の先生と票が２分して決まらず、大浦病院長と内野委員長が持ち帰って審議へ、すぐに呼び出しがあり「決まったよ」という。エキノコックスの国際会議も開催できたし、薬剤の薬価収載も厚生科学研究班に参加して可能となった。「手術には時間の空いている時は入っていい」とされたが、手術部には細かな雑多な諸問題が、突然にあるいは繰り返し発生するし、委員会や会議も多い。それでも10年間くらいは時々手洗いしたがなぜかこころ苦しく、どちらも片手間ではできない。「肝エキノコックス症の肝右葉切除」を北大病院最後の手術とした。手術をやりたい者はいっぱいいる。私は教官出張先の開業医で毎週の手術を楽しんでいたのだが。（これも、私の教員出張先が旭川に変更といわれて、やがてできなくなってしまった）。

手術部を管理する者として「手術を安全に滞りなく受け入れて行う」との基本方針は立てたもの迷いがあった。手術件数の増加をはかった時期もあり、全身麻酔では東大病院を抜いて国立大学で全国１位になった年もあったが、そんなことは私の立場が考えることではない、病院長らがやればいいことだ。緊急手術をやる診療科は黙っていても強引にやろうとする。手術を受けるのは当然である、しかし「このときに、手術部で働く看護師や技師などの手術部職員のサイドに立ち、それに全診療科の手術をさばいている麻酔科医師の最も働きやすい環境を作ること」が私の究極の最終目標になった。多くの看護師、技師の皆さん、麻酔科の医師や各科の一見控えめな医師、病理部、輸血部、医療安全管理部、事務部などの各部門との交渉ごとも少なくなく、専任部長を希望し続けたが、確かに専任になると強力な改革もできるかもしれない、しかし、強大な権力になるかもしれない。

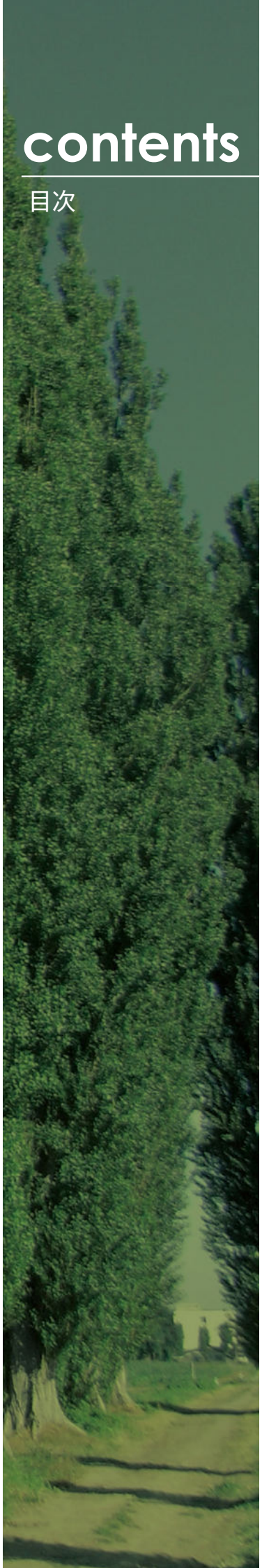
手術部に来ると、感染制御、滅菌と消毒、などの外科学の基本事項を学生に教えねばならず、これらは、全体の医学生教育に欠落していることに気づいた。学部３年目の病院実習の皮切りのタイミングに「手術時手洗い法」の実習も毎年、行ってきた。

当初は私の委任経理寄付金も適当にあったので、看護師さん、技師さんをさそって全国の学会出張にいくことができた。手術部に来て所属した日本手術医学会、日本医療機器学会（旧日本医科器械学会）、日本医工学治療学会、いずれも学会長として札幌で開催することができた。

定年退職直前、26才からともに助け合ってきた女房を病で突如失い、途方に暮れたが、さりげなく皆さんに支えられてきた。

2014年９月、教室の送別会を東京ドームホテルで開催していただき、多くの教室員に見送られて北大病院を退職した。

武冨紹信教授のもと、益々の教室の発展を願い楽しみにしています。



contents

目次

巻頭言

退任の挨拶

目次

3 2014年教室紹介

4 2014年度 教員役職一覧

7 2014年度 教室体制

8 2014年年間業績一覧
消化器外科Ⅰ・週間予定表
M&M（Morbidity & Mortality）カンファレンス内容
ジャーナルクラブ

〈診療部門〉

10 肝胆膵グループ

14 移植グループ

18 消化管グループ

21 小児グループ

〈研究部門〉

24 研究グループ紹介

24 移植グループ

25 保存グループ

26 腫瘍（肝胆膵）グループ

28 腫瘍（消化管）グループ

29 小児グループ

〈留学生〉

32 国内留学

34 海外留学

37 〈2014年入局後期研修医〉

43 〈秘書・クラーク・実験助手〉

45 業績紹介（学会・論文・研究費一覧）

59 2014年の年表・年間行事

87 関連病院紹介

104 編集後記

２０１４年教室紹介

2014年教室紹介 / 組織構成・教室メンバー一覧表

2014年度　教員役職一覧

Faculty

大学教員

Taketomi Akinobu
医学研究科/
消化器外科学分野Ⅰ
教授
武冨　紹信

Sato Naoki
病院/手術部
准教授
佐藤　直樹

Kamiyama Toshiya
医学研究科/
消化器外科学分野Ⅰ
准教授
神山　俊哉

Shimamura Tsuyoshi
病院/
臓器移植医療部
准教授
嶋村　剛

Takahashi Norihiko
医学研究科/
消化器外科学分野Ⅰ
講師
高橋　典彦

Kamachi Hirofumi
医学研究科/
消化器外科学分野Ⅰ
特任講師
蒲池　浩文

Kawamura Hideki
医学研究科/
消化器外科学分野Ⅰ
特任講師
川村　秀樹

Yokoo Hideki
病院/消化器外科Ⅰ
助教
横尾　英樹

Yamashita Kenichiro
医学研究科/
移植外科学講座
特任教授
山下健一郎

Fukai Moto
医学研究科/
移植外科学講座
特任助教
深井　原

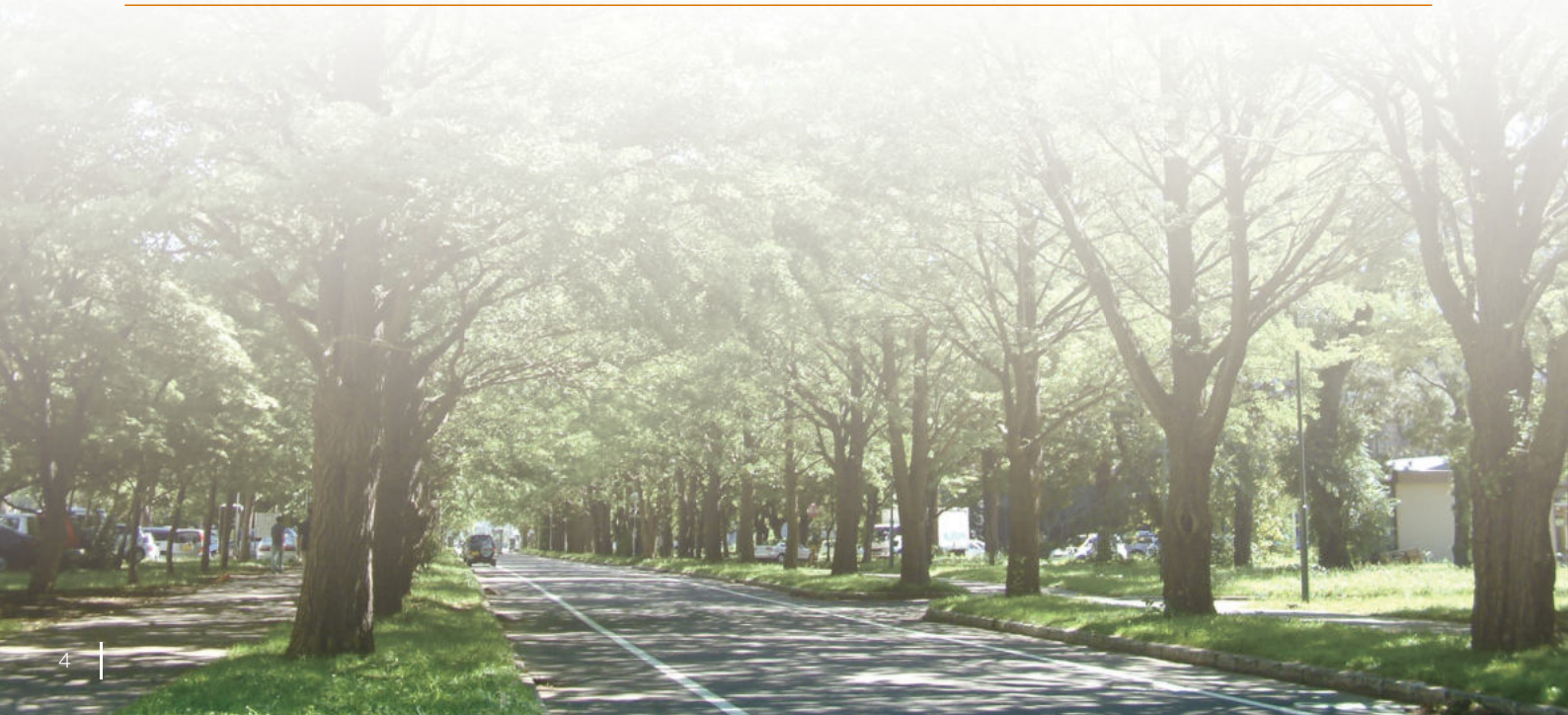
Homma Shigenori
病院/消化器外科Ⅰ
助教
本間　重紀

Honda Shohei
病院/消化器外科Ⅰ
助教
本多　昌平

Kakisaka Tatsuhiko
医学研究科/
消化器外科学分野Ⅰ
特任助教
柿坂　達彦

Tsuruga Yosuke
医学研究科/
消化器外科学分野Ⅰ
特任助教
敦賀　陽介

Aoyagi Takeshi
医学研究科/
消化器外科学分野Ⅰ
特任助教
青柳　武史



Instructors

インストラクター

Orimo Tatsuya

病院/消化器外科 I
医員
折茂　達也

Goto Ryoichi

病院/消化器外科 I
医員
後藤　了一

Takahashi Tohru

病院/消化器外科 I
医員
高橋　徹

Koshizuka Yasuyuki

病院/消化器外科 I
医員
腰塚　靖之

Wakayama Kenji

病院/消化器外科 I
医員
若山　顕治

Shibasaki Susumu

病院/消化器外科 I
医員
柴崎　晋

Kawamura Norio

病院/消化器外科 I
医員
川村　典生

Yoshida Tadashi

病院/消化器外科 I
医員
吉田　雅

Fujisawa Sorahiko

病院/消化器外科 I
医員
藤澤　空彦

Residents

後期研修医

Ishikawa Tomohiro

石川　倫啓

Ota Takuji

太田　拓児

Kashiwakura Sayuri

柏倉さゆり

Kato Takuya

加藤　拓也

Kondo Takafumi

近藤　享史

Sakamoto Sodai

坂本　聡大

Shichi Shunsuke

志智　俊介

Shibata Yasuhiro

柴田　泰洋

Chida Keigo

千田　圭悟

Yoshida Yuichi

吉田　祐一

Ph.D.Course Students

大学院博士課程

Fujiyoshi Masato
5年目
藤好　真人

Emoto Shin
3年目
江本　慎

Ono Yosuke
3年目
大野　陽介

Ohata Takanori
3年目
大畑多嘉宣

Ono Hitoshi
3年目
小野　仁

Konishi Yuji
2年目
小丹枝裕二

Minato Masashi
2年目
湊　雅嗣

Aiyama Takeshi
2年目
相山　健

Ishikawa Takahisa
2年目
石川　隆壽

Mizukami Tatsuzo
2年目
水上　達三

Takahashi Hidenori
1年目
高橋　秀徳

Fukasaku Yasutomo
1年目
深作　慶友

Ishiguro Yuui
1年目
石黒　友唯

Matsuzawa Fumihiko
1年目
松澤　文彦

2014年度（平成26年度）教室体制

教　授	武冨紹信

医　局	**医局長**	**副医局長**
	横尾英樹	本間重紀 本多昌平

(14/4/1-14/12/31)

病　棟	**病棟医長**	高橋典彦 (～2014.11.30) 神山俊哉 (2014.12.1～)	**副病棟医長**	青柳武史 (～2014.6.30) 敦賀陽介 (2014.8.1～) 柿坂達彦
Group	小　児	消化管	肝胆膵	移　植
Chief	本多昌平	高橋典彦 (～2014.11.30) 川村秀樹 (2014.12.1～)	神山俊哉	嶋村　剛 山下健一郎
Sub-chief		本間重紀	蒲池浩文 横尾英樹 柿坂達彦(2014.4～) 敦賀陽介(2014.8～)	青柳武史 (～2014.6.30)
Instructor	湊　雅嗣 (～2014.5.31) 藤澤空彦 (2014.6.1～)	柴崎　晋 吉田　雅	折茂達也 若山顕治	後藤了一 高橋　徹 腰塚靖之 川村典生 (2014.7.1～)

Junior Fellow	石川倫啓、太田拓児、柏倉さゆり、加藤拓也、近藤享史 坂本聡大、志智俊介、柴田泰洋、千田圭悟、吉田祐一

Super Rotator	（1年目）高橋　徹、霜田佳彦 （2年目）稲葉洋文、安藤貴士、佐野修平

外　来	**外来医長**	本間重紀	**副外来医長**	川村秀樹　　本多昌平
	新　来	**再　来**		
月	○	小児外科 肝胆膵	(本多昌平、湊　雅嗣(～2014.5.31)、藤澤空彦(2014.6.1～)) (神山俊哉、蒲池浩文、横尾英樹、柿坂達彦) (ｴｷ：佐藤直樹～2014.9.30)	
火	—	外来医長	副外来医長	
水	○	小児外科	(本多昌平、湊　雅嗣(～2014.5.30)、藤澤空彦(2014.6.1～))	
木	—	外来医長 移植	副外来医長 (嶋村剛、山下健一郎)	
金	○	小児外科 消化管 移植	(本多昌平、湊雅　嗣(～2014.5.30)、藤澤空彦(2014.6.1～)) (高橋典彦(～2014.11.30)、川村秀樹、本間重紀) (嶋村　剛、山下健一郎)	

Research	(Chief) 深井　原、(5年目) 藤好真人 (3年目) 江本　慎、大野陽介、大畑多嘉宣、小野　仁 (2年目) 相山　健、石川隆壽、小丹枝裕二、水上達三、湊　雅嗣 (1年目) 石黒友唯、高橋秀徳、松澤文彦、深作慶友

2014年年間業績一覧

○手術：

2014年総手術件数：596例

（手術内容詳細については各グループ紹介参照）

・消化管G手術：193例

・肝胆膵G手術：155例

・移植G手術：25例

・小児G手術：223例

○学会発表：

国内：193題

海外：21題

○論文発表：

英文原著：17編

英文症例報告：4編

和文原著：20編

和文症例報告：6編

消化器外科Ⅰ・週間予定表

M&M (Morbidity & Mortality) カンファレンス内容

1月9日	消化管G	胃癌断端陽性症例について
2月27日	旭川医大2外	生体肝移植後グラフト不全に陥った症例
5月14日	消化管G	術後出血の1例
8月7日	移植G	移植後肝生検により肝内血腫を形成した一例
8月21日	肝胆膵G	肝エキノコックス症術後胆汁漏
10月9日	小児G	短腸症候群の1幼児例

ジャーナルクラブ

5月16日	加藤拓也	遺伝性大腸癌について
5月30日	高橋徹（あきら）	TMEについて
6月13日	平尾（学生）	実習の感想
6月27日	吉田雅	大腸癌術前の機械的腸洗浄について
7月4日	大木（学生）	実習の感想
7月25日	稲葉洋文	大腸癌卵巣転移
	川村典生	Cleveland Clinic Transplantation Centerへの臨床留学経験
8月29日	霜田佳彦	直腸神経内分泌腫瘍
9月5日	柴崎晋	大腸癌術前壁深達度診断の試み
9月19日	敦賀陽介	膵癌とTFG-βとtranilast
10月17日	安藤貴士	大腸がんイレウスの治療
10月24日	佐野修平	胃上部早期胃癌における噴門側胃切除の有用性
11月28日	折茂達也	NASHと肝癌
12月5日	本多昌平	Laparoscopic percutaneous extraperitoneal closure method（LPEC法）～最近の知見および再発予防のために～
12月19日	千田圭悟	縫合不全とNSAIDs
1月23日	石川倫啓	術後疼痛とアセトアミノフェン
1月30日	坂本聡大	消化器外科領域におけるSurgical Site Infection予防の至適抗菌薬投与の検討
2月13日	柏倉さゆり	周術期の血糖管理
	吉田祐一	ERAS主に栄養管理について
2月20日	太田拓児	周術期輸血と悪性腫瘍
2月27日	蘭藤佑哉	直腸癌術後排尿障害について
3月6日	近藤享史	septic shockの初期蘇生についての最近の知見
3月13日	志智俊介	胆道閉鎖と肝移植
3月20日	柴田泰洋	低位前方切除について

２０１４年教室紹介

〈診療部門〉

肝胆膵グループ

《スタッフ紹介》

神山 俊哉

肝胆膵グループのチーフとして手術、病棟、外来、研究の指導に携わっています。肝胆膵グループのうち胆膵疾患は蒲池講師が中心となっています。手術数は、肝切除数は年間100例近くを数え国内トップクラスの症例数を誇り、肝門部胆管癌・膵頭十二指腸切除と合わせ約140例近い症例を手術しています。肝臓疾患は肝切除を必要とする肝細胞癌をはじめ、肝内胆管癌、転移性肝癌などの肝悪性腫瘍、北海道に特異的な肝エキノコックス症、巨大肝血管腫などの疾患、特に市中病院では治療困難症例の治療を行っていますが、この１年のMortalityはゼロでした。手術の負担を軽減するため腹腔鏡下肝切除を症例に応じて行ない、門脈腫瘍栓は術前放射線照射を併用し予後の向上を目指しています。巨大肝腫瘍の安全な切除方法の開発、アシアロシンチとCTをfusionした新しい肝予備能の評価法を確立など、新しい臨床研究も行っています。

蒲池 浩文

肝胆膵グループの胆膵部門を担当しております。社会的背景で院内紹介が無い状況でしたが、昨年は少し改善傾向を認め、また関連病院の皆様からのご紹介のおかげで肝葉以上＋胆管切除症例は十数例に施行できました。局所進行膵癌の術前放射線化学療法の臨床試験においては、切除症例は全例R0切除が得られ、MSTが33か月の結果が得られております。現在の手術のクオリティーをより高め、予後改善に向け外科・化学療法・放射線治療の三位一体の治療を進めて行きたいと考えております。そのためには症例数を増やしていくこと必要であり、皆さまの更なるご協力をお願いできたらと考えております。疾患の特殊性から切除適応の判断は難しい部分がありますので、どうぞお気軽にご相談いただけたら幸いです。

横尾 英樹

肝胆膵グループのおもに肝臓を担当しています。臨床と研究にわたり質の高いものをめざしております。臨床では年々、厳しい症例が集まるようになってきており最後の砦的な役割を果たすべく頑張っております。肝切除後の再発に対する治療も進めておりその結果が待たれるところです。研究ではプロテオミクスにて同定された肝細胞癌の悪性度に関わる分子であるFABP5とEB1を大学院生に解析してもらい新規の予後再発マーカーとして有用であることを突き止め近々論文投稿する予定になっております。皆様に支えられながら務めて参りました医局長も無事、本間先生にバトンタッチすることができました。この場を借りてお礼申し上げます。

柿坂 達彦

平成11年度入局の柿坂達彦と申します。平成22年４月より大学病棟の肝胆膵グループに配属となり、平成26年４月から特任助教を拝命致しました。主に肝疾患の診療に従事しております。今年度は、腹腔鏡下肝切除術の定型化を目標に掲げておりました。神山先生のもと、肝チーム全員で手術体位・手術器具・腹腔内操作・肝実質切離技術など、症例を経験する毎に改善していき、現在では、ある程度手技が定型化されてきた印象を持っております。また、研究面では、膵癌早期診断のバイオマーカー探索に関して科学研究費を頂いたのは良かった点ではありますが、実験が進んでおらず、また臨床研究でも論文投稿が少なく、大いに反省しております。来年度は札幌厚生病院での勤務となりますが、大学で教えていただいた手術手技を生かし、胆膵疾患も含めた多くの手術を経験したいと考えております。また、大学在籍中の臨床研究データを論文化できるよう精進致します。

敦賀 陽介

肝胆膵グループで胆膵を担当させていただいております。平成23年より大学に戻りまして今年度で４年目となりました。８月より特任研究助教を拝命し、臨床のみならず、研究、教育にこれまで以上に取り組んでいかなければならないと責任の重さを感じております。手術では、高難度手術が多く、術者、助手としてもまだまだ自分の技量不足を認識させられることがしばしばです。一例一例を大切に自らの経験としていきたいと思います。また懸案であった消化器外科専門医試験受験資格の論文がようやく充足したため（規約改定で必要なくなってしまいましたが…）、来年度は消化器外科専門医をきちんと取得したいと思います。

折茂 達也

臨床では肝胆膵外科に特化することで、自分で成長を自覚できる高難度手術も何例か経験できました。しかし主体性をもって行っているとはいえず、不足している論文数とともに来年度への反省点です。またどうしても自分のことで手一杯になってしまい、学生、研修医、大学院生等の指導が行き届かず申し訳なく思っています。来年度は自分の成長はもちろんのこと、後輩の成長にも目を配れるように心がけたいと思います。

若山 顕治

肝胆膵グループの若山です。本年度は、より多くの肝切除術を手掛けさせていただき、また肝胆膵グループとしても昨年度よりも手術症例および延べ入院患者数が増加するなど、臨床においては個人的またグループとしてより積極的な活動が行えたと思っております。学会活動においては、日本消化器外科学会でのパネルディスカッションをはじめ、多くの学会で発表する機会を与えていただき、充実していたと思います。研究に関しては、発表した論文が日本語論文のみであり、やや不十分であったと感じられます。来年度にむけては、グループ一丸となって現在の臨床活動を継続および発展させていくこと、引き続き積極的な学会活動を継続していくことに加え、研究面で英語論文による研究成果の発表に積極的に取り組んでいきたいと思います。

現在の取り組み

〈肝臓〉

■治験

NIK-333（ペレチノイン）第Ⅲ相試験
K-333（ペレチノイン）第Ⅲ相試験
OPTIMIS（sorfenib）
SURF trial
Polaris trial（UFT/UZEL）
BAY7-3-4506/15983（レゴラフェニブ）

■臨床

HCC再発症例に対するアイエーコール動注+UFT（FP変法）
ICG蛍光法を用いた区域同定による亜区域切除術の確立
CTとGSAシンチグラフィのfusion画像を用いた3Dシミュレーションによる肝予備能評価
CCC切除後adjuvantGEMの有用性
CCCに対するリンパ節廓清の意義
HBVを背景としたHCC術後患者の予後因子の検討

■基礎研究

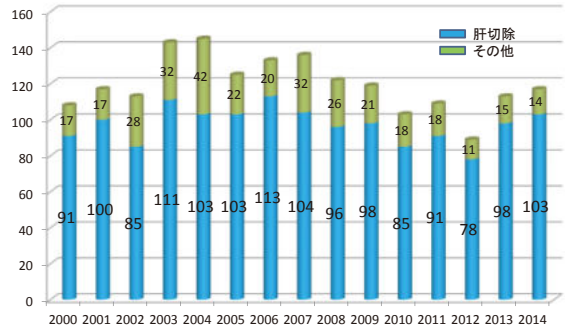
肝細胞癌におけるE-FABPの予後・再発マーカーとしての意義（大畑）
EB1の肝細胞癌発癌・進展における分子機構の解明（相山）
糖鎖プロファイル解析による肝細胞癌浸潤・転移の解明（高橋秀）
血漿タンパク質LRGの翻訳後修飾に着目した膵癌早期診断マーカーの解析（柿坂）
HCCにおけるCTC、DTCの予後・再発予測（皆川）

〈胆膵〉

・進行膵癌に対する術前放射線化学療法
　院内自主臨床試験登録（008-0040）
・膵胆道癌術後TS-1週4回投与の効果
・borderline resectable肝門部胆管癌に対する新規手術術式の確立
・肝門部胆管癌術前化学療法の検討
・消化器癌におけるMesothelin分子発現の意義と癌悪性度との関係（平成24年度基盤研究C）
・膵癌NACRT施行後の治療抵抗性癌幹細胞のプロファイル解析とターゲット治療法の開発

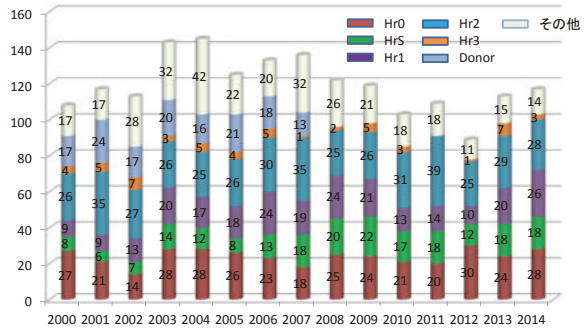
肝

肝切除術症例数



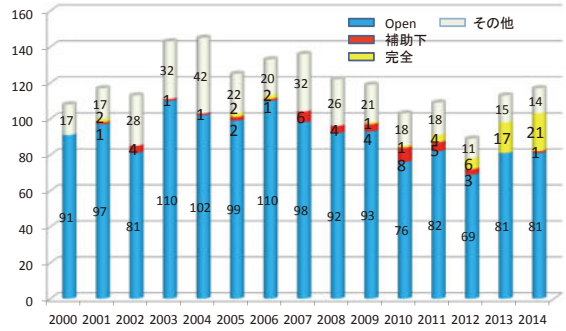
肝

術式別手術数



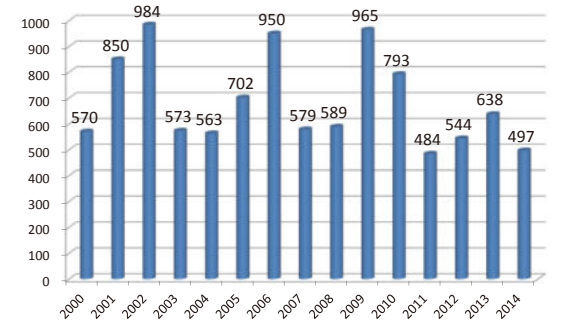
肝

腹腔鏡下手術症例数



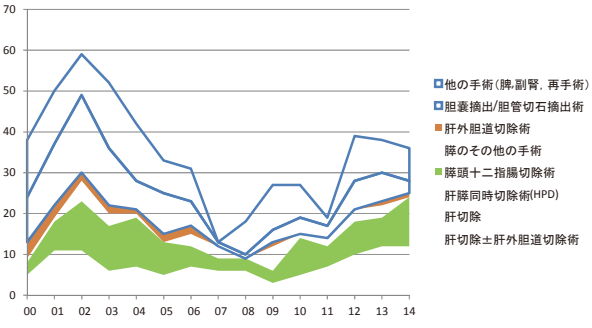
肝

肝切除術 平均出血量



胆膵

術式別症例数



移植グループ

《スタッフ紹介》

嶋村　剛

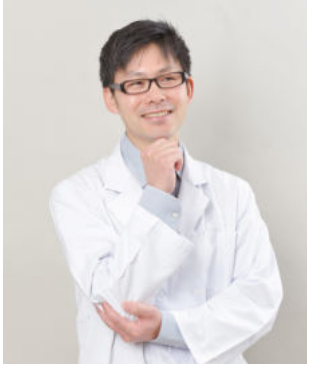
北大病院における肝移植プログラムに1997年開始当初から参加し、肝移植286例（成人生体肝移植174例、小児生体肝移植72例、ドミノ肝移植２例、脳死肝移植38例）、膵臓移植７例（膵腎同時移植４例、膵単独移植３例）を実施しました。肝移植は近く300例に達する見込みです。北大病院臓器移植医療部部長を拝命し消化器外科Ⅰとは異なる所属ですが、移植外科医を目指す後進の育成を第一に考えています。2010年の臓器移植法改正に伴い、わが国の肝移植も生体移植から脳死移植に徐々に移行してきました。そのような社会的変化に対応しながら移植医療を推進していくことが、北海道で唯一の脳死肝移植・膵移植実施認定施設の実施責任者としての職責と考えています。また、北大病院臓器移植医療部部長として心臓移植、腎臓移植関連のドクター、コーディネーターとの連携強化も進めています。

山下健一郎

2011年1月から移植外科学講座に所属しています。本講座は、「北海道の移植医療を応援し、移植医療の発展に寄与したい」と考える道内企業や医療機関からの出資により、本学に設立された寄付講座です。臨床肝移植や膵移植に従事しながら、移植関連の研究を通じて後輩の育成に尽力してきました。未だ道半ばの先生方もいますが、多くは医学博士を取得し、彼らが後人の指導に当たる時代が到来することを期待しています。リサーチ面では移植免疫に関する基礎～臨床研究を進めてきました。最近では、世界に先駆けて、生体肝移植時に制御性T細胞を用い細胞治療を併用することで免疫抑制剤の離脱・免疫寛容を誘導する臨床試験を行い、10名中７名の患者さんが肝移植後早期に免疫抑制剤を完全離脱し拒絶反応を来すことなく経過しており、新しい免疫抑制療法が標準化されるよう臨床試験を進めています。より良い移植医療を提供するため、一歩ずつでも前進すべく微力ながら今後も尽力したいと考えています。

後藤 了一

全国的に生体肝移植の数が緩やかに減少傾向にある一方で、劇症肝炎の発症や脳死登録希望の患者さんは以前と変わらず、肝移植は救命の最終手段として必要とされていることを感じています。これまで以上に遅滞のない最善の判断、治療を目指して臨みたい考えています。また昨今の抗HLA抗体の測定法の確立、HCVに対する新規DAA製剤の登場など新しい潮流があり、肝移植後の免疫抑制療法を含めた治療はさらに緻密さが求められています。臨床の疑問をリサーチに解決を求めつつ、患者さんの治療に結びつく新しい知見を北大から発表したいと考えています。一方で、学生、研修医、大学院生などの若い先生方の教育、指導に十分な時間を費し、academic surgeonの育成に力を注ぎたいと思います。



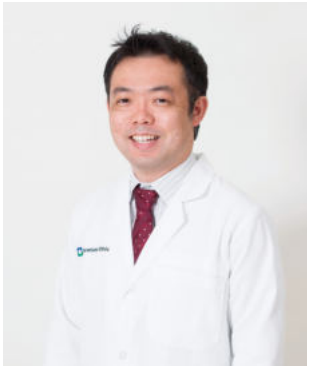
高橋　徹

2013年４月より移植グループへ配属となり２年が過ぎました。仕事にも慣れ、学会発表、論文発表、後輩への指導など不十分ながらもやって参りました。自主臨床研究の前向き研究も現在審査段階ですが、準備の段階で色々勉強になりました。

来年度は、大学を離れますが後ろ向き研究での論文発表、関連施設での学会発表も積極的に取り組みたいと思っております。また、関連施設でもスタッフと共同し、病棟業務が円滑に進むよう尽力したいと思います。

腰塚 靖之

移植グループに配属となり３年目となります。移植外科医として独り立ちすることを目標に、これまで以上に臨床、研究、教育に邁進してゆこうと思います。

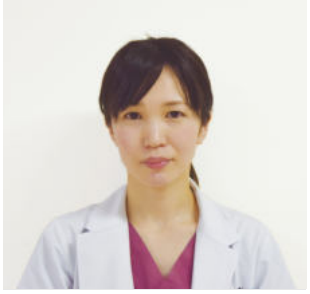


川村 典生

2014年７月から大学にて勤務しております川村です。2012年７月から2014年６月まではアメリカのCleveland Clinicにて肝移植の臨床研修をしておりました。帰国してからは主に脳死ドナーの手術を担当しており、８ヶ月間で７件の脳死ドナー手術を執刀（うち１件はドナー肝のクオリティが悪かったため移植キャンセル：Dry runと言います）しました。今後は日米双方の良いところを取り入れた診療を目指していきたいと思います。宜しくお願い致します。

太田　稔（臨床工学技師）

移植医療に関連する血液浄化療法をはじめとした生命維持管理装置を通じて、病態改善およびbridging therapyの役割をデータ解析から明確にし、適切な医療を提供できるよう努力致します。



岡本 花織（臨床工学技師）

移植医療に関連する業務に携わらせていただいている臨床工学技師です。まだ勉強不足でお役にたてることも少ないとは思いますが、先生達からいろいろな部分を吸収し、成長してゆけるように頑張っていきたいと思います。

現在取り組んでいること

制御性T細胞治療による肝移植における免疫寛容誘導法の開発
ドナー特異的抗体を含む抗体関連拒絶への対策
脳死肝移植待機患者の栄養評価および栄養療法の最適化に関する臨床研究

2014年診療実績（1月～12月）

1. 病棟実績
・入院患者数（延べ人数）：204名
　術前評価・待機：23名
　手術（生体ドナー・再手術などを含む）：25名
　移植後再入院（検査・加療など）：156名

・平均在院日数：13.8日

・術後平均在院日数
　肝移植：58.2日（生体：56.5日、脳死60.8日）
　生体肝移植ドナー：13.8日

2. 2014年手術件数：25例
生体肝移植術　6例（成人4例、小児2例）
生体肝グラフト採取術　6例
脳死肝移植術　4例
その他　9例

3. 外来実績
外来患者数（延べ人数）：2032名
新患外来（紹介）：50名（延べ1122名）
現在フォロー中の患者数
　移植前フォロー患者数：63名
　　生体肝移植待機：4名
　　脳死肝移植待機：53名
　　膵・膵腎移待機：6名

移植後患者数：244名（ドナー除く）
肝移植後：236名(当院　生体185名+脳死28名､他院　23名)
膵腎移植後：8名（当院　7名、他院　1名）
生体肝移植ドナー：244名（＊全員毎年受診はしていず）

入院

- **入院患者数(延べ人数): 204名**
  - 術前評価・待機: 23名
  - 手術(生体ドナー・再手術などを含む): 25名
  - 移植後再入院(検査・加療など): 156名
- **平均在院日数: 13.8日**
- **術後平均在院日数**
  - 肝移植: 58.2日(生体:56.5日、脳死60.8日)
  - 生体肝移植ドナー: 13.8日

2013年1月～2014年12月

外来

- **外来患者数(延べ人数): 2032名**
- **新患外来(紹介): 50名(延べ1122名)**
- **現在フォロー中の患者数**

移植前フォロー患者数: 63名

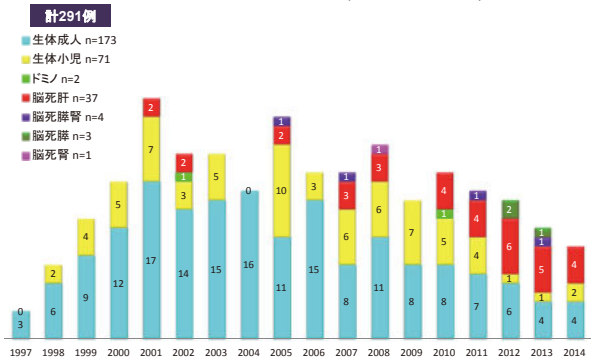
- **生体肝移植待機:** 4名
- 脳死肝移植待機: 53名
- 膵・膵腎移待機: 6名

移植後患者数: 244名(ドナー除く)

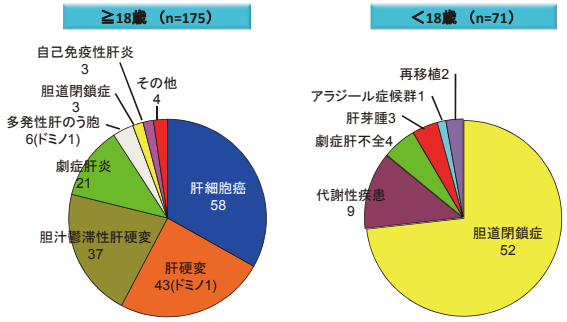
- 肝移植後: 236名 (当院 生体185名+脳死28名、他院 23名)
- 膵・膵腎移植後: 8名(当院 7名、他院 1名)
- **(生体肝移植ドナー: 244名 ＊全員毎年受診はしていず)**

2014年1月～2014年12月

当科における移植症例 (1997.9-2015.1)

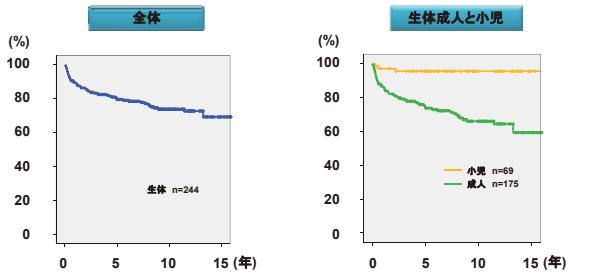


生体肝移植の適応疾患



1997年9月～2014年12月

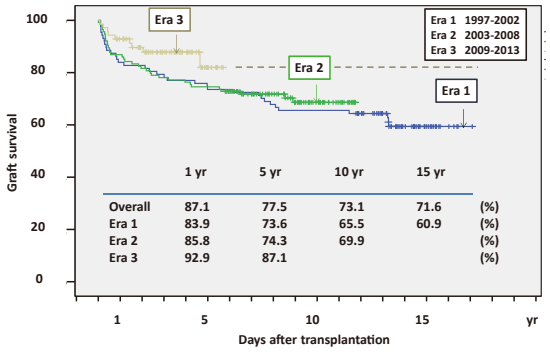
生体肝移植の成績



	1年	3年	5年	10年	15年
生体 n=244	89.3	83.3	79.5	73.8	69.2

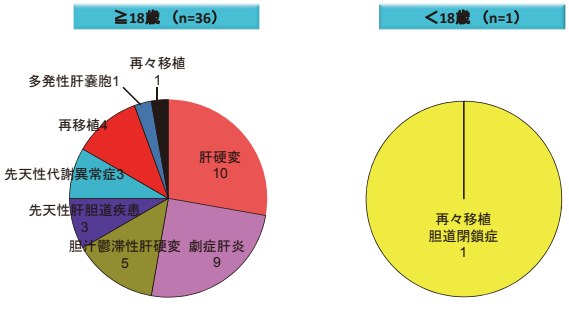
	1年	3年	5年	10年	15年
小児 n=69	97.1	95.6	95.6	95.6	95.6
成人 n=175	86.3	79.1	73.7	66.0	59.3

移植時期別にみたGraftsurvival



	1 yr	5 yr	10 yr	15 yr	
Overall	87.1	77.5	73.1	71.6	(%)
Era 1	83.9	73.6	65.5	60.9	(%)
Era 2	85.8	74.3	69.9		(%)
Era 3	92.9	87.1			(%)

脳死肝移植の適応疾患



1997年9月～2015年1月

消化管グループ

《スタッフ紹介》

高橋 典彦

当グループでは、消化管の良・悪性腫瘍、炎症性腸疾患（クローン病、潰瘍性大腸炎など）に対する手術治療を中心に行っております。癌などの基礎研究や臨床研究を基盤として、チーム一丸となって、個々の患者さんに最も適したな治療法の提供を心がけています。

なお、2014年12月からは、私自身は手術部に異動となりました。これからは、更に安全・確実な手術が提供できますように、快適な手術部の環境整備・安全管理などに取り組みたいと思っております。今後ともよろしくお願いいたします。

川村 秀樹

2014.12に手術部准教授として赴任された高橋典彦先生のあとをついで消化管グループのチーフとなりました。当グループの診療の特徴はほとんどの症例を鏡視下手術で行っていることと非常に低い術後合併症発生率を誇っていることです。今後もさらに安全でレベルの高い診療を行ってまいります。今年の目標も１. 胃癌、大腸癌症例数の増加、２. 日本内視鏡外科学会技術認定医取得者の増加、３. 学会発表，論文投稿数の増加、今年・昨年以上の結果を残したいと思っております。

本間 重紀

今年度の満足度は70点。今年は手術件数が増加し、初発大腸癌切除症例数が念願の100例を突破しました。それに伴い修練医、研修医の執刀機会も増加しました。そこそこに安定した手術成績を残せるようになってきましたが、術後合併症がゼロではなく、まだまだ理想の手術からは程遠いのが現状です。今後の抱負は、術後合併症ゼロが最大の目標。そして術後中長期成績の解析（本当に今の手術手技で良いのか、改善点の洗い出し）。さらに、第一外科関連施設の先輩方とともに手術手技に関連した前向き試験に取り組みたいと考えています。

柴崎　晋

2013、2014年度の２年間、大学で鍛えて頂き、自分としても大きく成長することができたと思っています。手術に関してはまだまだ改善すべき部分も非常に多く満足できるレベルにまでは至っていないのが現状で、さらなる研鑽が必要と感じております。その他の部分においてもなかなか業績が伸びず、積み重ねていくことの重要さを身にしみて感じております。ただ、この２年間は色々な方に支えられながら、医師人生の中でもっとも伸びた時期でもありました。皆様のあたたかいお心遣いに御礼申し上げます。2015年度は、国内留学をさせて頂けることとなりました。更なる実力の向上を目指し、少しでも多くのことを会得し、将来的にはしっかり還元できるようにしたいと思います。まずは留学先で足手まといにならないようにすることが目標ですが、このような機会を与えて下さり、武冨教授はじめ多くの方々に、この場をお借りしまして厚く御礼申し上げます。

吉田　雅

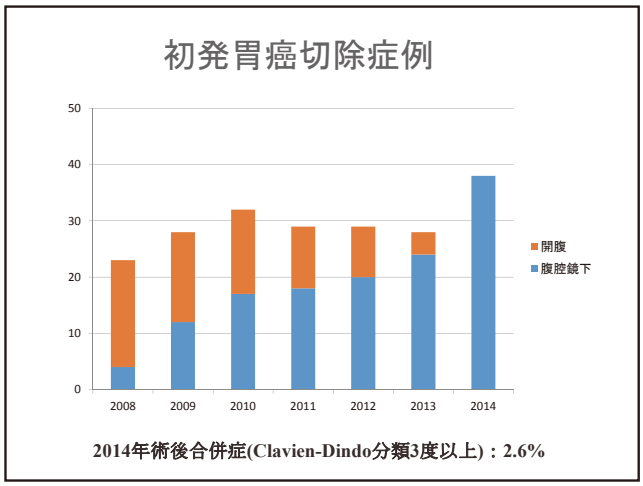
数年振りに大学病棟勤務となりました。大学での勤務内容に慣れるのに、非常に体力・精神力を費やしました。数年前に勤務した時とは打って変わり、腹腔鏡下手術が大勢を占めており、非常に驚きました。昨年度の勤務地であった岩見沢市立病院では、上泉洋先生の御指示の下、川村秀樹先生、本間重紀先生に御来院頂き、初めて腹腔鏡下胃・大腸切除の指導を受ける事が出来ました。その時、川村先生から、「来年（今年度）には、必ず技術認定医を取得するように」と命じられた事は、自分の中で青天の霹靂でした。申請に必要な、論文作成、学会発表を行い、手術技能の習得、後期研修医に混じってのドライボックスでの縫合結紮手技の習得を中心に行い、何とか申請まで漕ぎ着けました。その他には、学位の基礎論文作成、追加実験などに忙殺され、他の先生方の足を引っ張る事になってしまい、申し訳なく思っています。また、後輩の指導にも十分な時間を費やす事が出来ませんでした。来年度は、学位の取得、現在投稿準備中の論文２編を形にし、全国学会にも精力的に参加すると共に、グループのプロジェクトや後輩の指導にも力を入れたいと思っています。

現在の取り組み

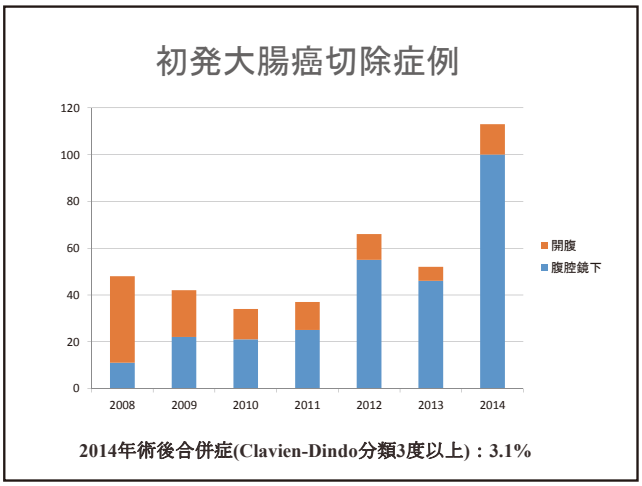
〈胃〉
- 早期胃癌に対するReduced port surgery（Dual-port法）
- 進行胃癌に対する腹腔鏡下幽門側胃切除（D2郭清、大網全摘も含む）
- 進行胃癌に対する腹腔鏡下胃全摘術（脾摘D2郭清も含む）
- 進行胃癌に対するNAC後の根治手術
- 残胃癌に対する腹腔鏡下手術

〈大腸〉
- 手術支援ロボット（da Vinci Surgical System Si）を用いた直腸腫瘍に対する腹腔鏡下直腸切除/切断術の探索的臨床研究（自主臨床試験）
- SILS^{TM}ポートを用いたReduced port surgery
- 直腸癌に対する減孔式腹腔鏡下低位前方切除術
- 直腸癌に対するストマ孔を利用した単孔式腹腔鏡下直腸切断術
- 潰瘍性大腸炎に対するストマ孔を利用した単孔式腹腔鏡下大腸全摘術
- 大腸癌同時性肝転移に対する腹腔鏡下大腸・肝同時切除術（肝グループとの合同臨床研究）
- 直腸癌術前化学療法RNAC-01試験
- 体外式超音波検査を用いた大腸癌術前診断法の探索的臨床研究

〈鏡視下手術全般、教育関連〉
- 胃または大腸の悪性腫瘍に対する腹腔鏡下手術におけるエノキサパリンによる術後静脈血栓塞栓症発生予防の検討（Eno-LAP試験、多施設共同RCT、研究代表者：蒲池浩文）
- 初期・後期研修医に対する鏡視下基本手技（縫合結紮手技）の教育
- 後期研修医の早期からの鏡視下手術執刀経験
- 北大消化器外科Ⅱ鏡視下手術教育カリキュラムの作成
- 関連病院での技術認定医取得を目指した技術指導･技術支援出張
- Linear-Staplerの至適切離条件の検討



2014年術後合併症(Clavien-Dindo分類3度以上)：2.6%



2014年術後合併症(Clavien-Dindo分類3度以上)：3.1%

小児グループ

《スタッフ紹介》

岡田 忠雄

2014年度（4.1.付）より北海道教育大学教育学部（養護教育専攻医科学看護学分野臨床医学担当）で養護教諭の養成、教育が主となりつつも、北大病院では客員・招聘医師として診療と研究に関わっていただいております。

本多 昌平

北大病院に戻って５年目となり、現在小児外科チーフとして小児外科グループの舵取りをする存在です。

チーム体制が一新した中で、臨床・研究両面で活躍しております。

来年度は神奈川こども医療センターから宮城医師も帰ってくるので、小児外科チームとしてさらにパフォーマンスを打ち出せるよう頑張っていきたいと思います。

湊　雅嗣（外来医＋大学院研究中）

神奈川県立こども医療センターでの外科研修を終え、2013年春より大学院生として肝芽腫の基礎研究に勤しみながら、臨床では主に外来診療に携わっています。

藤澤 空彦（九州大学　小児外科より応援）

2014年６月～2015年３月まで九大より応援に駆けつけてくれた６年目の若手小児外科医です。元気いっぱいで頑張ってくれています。４月からはまた異動で愛媛県立中央病院小児外科にて勤務することとなっています。

2014年診療実績（1月～12月）

〈外来実績〉

月、金曜日の午前中に上記３名体制でおこなっています。毎月１回（水曜日）、前北海道大学小児外科学講座教授　佐々木文章先生および北海道教育大学教育学部教授、岡田忠雄先生に外来支援をいただいています。

〈病棟実績〉

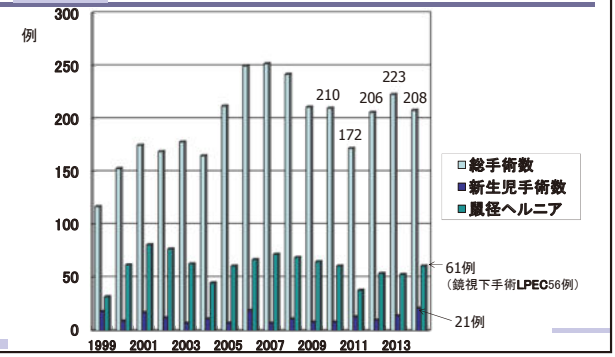
小児外科グループチーフ　本多先生の下、後期研修医ローテーターとの３名で診療に当たっています（時に初期研修医が加わることがあります）。小児外科領域の疾患の大部分は周術期を乗り切ると回復が早く、入院患者の回転が速いことが特徴です。一方で、先天性疾患に伴う短腸症候群など長期入院加療を要する症例にも遭遇することがあり、患児の成長・発達を考慮した環境づくりや家族へのサポートなど、小児外科に特異的な配慮を必要とすることもしばしばです。

〈2014年手術件数〉

総手術数　223例、新生児症例　14例

（内訳：小児悪性腫瘍　11例、胆道系疾患　２例、鏡視下手術（LPEC法を含む）　59例）

小児外科の年間手術数の推移



新生児手術症例の内訳

		新生児手術21例
先天性食道閉鎖症	根治術・胃瘻造設術	2
先天性腸閉鎖症	腸吻合術	3
新生児壊死性腸炎、鎖肛	ストーマ造設術	6
臍帯ヘルニア	腹壁閉鎖術(サイロ形成術)	2(1)
鎖肛	肛門形成術(カットバック)	1
先天性横隔膜ヘルニア	裂孔閉鎖術	3
先天性水頭症	VPシャント留置	2
嚢胞性肺疾患	VATS肺切除	2

鏡視下手術

術　式	例数	疾　患
胸腔鏡下肺葉切除術	3	先天性肺嚢胞性疾患
腹腔鏡下尿膜管摘出術	1	尿膜管遺残症
腹腔鏡下虫垂切除術	4	急性虫垂炎
腹腔鏡下脾臓摘出術	2	特発性血小板減少性紫斑病
腹腔鏡下鼠径ヘルニア手術(LPEC)	56	鼠径ヘルニア
計	66例	

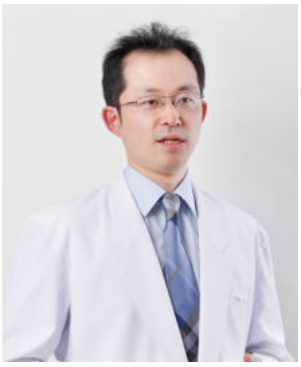
２０１４年教室紹介

〈研究部門〉

研究グループ紹介

移植グループ

江本 慎（2006年卒）


小野 仁（2006年卒）

深作 慶友（2007年卒）

1. 研究テーマ・概要

移植グループは、江本慎（2006年卒）、小野仁（2006年卒）、深作慶友（2007年卒）が配属しています。江本・深作は移植免疫学に関する基礎研究を行っています。江本は、樹状細胞の成熟を抑制するトリアゾロピリミジン系新規免疫抑制剤NK026680を用いた拒絶反応の抑制を、マウスのアロ心移植モデルを用いて研究を行っています。NK026680は単剤の短期投与でもグラフト生着延長効果を認めますが、その効果は十分とは言えません。そこでわれわれは、ドナー系統の脾細胞静脈投与（donor-specific transfusion：DST）とNK026680を併用することによる免疫修飾効果につき、検討しています。NK026680は、DSTと併用することにより、投薬中止後も長期にわたりグラフトを生着させることがわかりました。われわれは、この治療法により、術前のレシピエント生体内に抗原特異的制御性T細胞（regulatory T cell：Treg）を誘導でき、誘導された抗原特異的Tregが移植後早期にグラフトに浸潤することがグラフト保護に重要である可能性を見出しました。NK026680とDSTの併用療法は、臨床移植における新たな免疫抑制療法の可能性を示唆するとともに、生体内における抗原特異的Tregの誘導機序を解析するためのモデルとしても有用であると考えられます。

深作は、肝移植後de novo抗HLA抗体（donor specific antibody: DSA）の血管病変に果たす役割の解析を、ヒト化マウス血管移植モデルを用いて研究を行っています。カルシニューリン阻害薬（Calcineurin inhibitors：CNIs）の開発により移植後短期成績の著明な改善を認めましたが、移植後長期成績は未だ十分とは言えず、慢性期Graft lossの原因とされる慢性拒絶反応の制御は重要課題とされています。しかし、その原因・機序・治療方法について、未だによく分かっていない状況です。近年、グラフトに対する抗HLA抗体と慢性拒絶反応との関連が報告され、注目されています。そこで肝移植後レシピエントに発生するde novo DSA（抗HLA抗体）を採取し、そのヒト血管に対する障害機序の解析を行っています。ヒト血管に生じる血管病変はin vivoにおいて観察される変化であり、ヒト化マウスにヒト血管を移植するヒト化マウス血管移植モデルを確立するため、現在、ヒト化マウスモデル、血管移植モデルの作成を行っています。

小野は膵島移植の研究を担当しています。細胞移植は臓器移植に比べ手技が容易でかつ侵襲も少なく、今後の臨床応用拡大が期待されています。膵島移植は細胞移植の一種で、1型糖尿病治療の根本治療として、膵臓移植に比べ、低侵襲で合併症も少なく、理想的な治療法です。しかし、膵島移植後の長期インスリン離脱率は、近年の免疫抑制療法の進歩により改善はみられたものの、膵臓移植のそれには及ばず、膵島移植は未だ標準治療として認められておりません。膵島移植の成績不良の主な原因として、移植後早期の炎症反応およびそれに引き続く進行性の拒絶反応が考えられます。膵島を門脈経由で肝臓へ移植しますが、移植後72時間以内に移植膵島の約50～70%が破壊されると言われています。これには、移植された膵島と血液が接触することで惹起される、凝固・補体系の活性化と続発する非特異的炎症反応が主に関わっています。この炎症反応には転写因子NF-κB、PPAR-γが深く関与しており、教室では、マウスやイヌ膵島移植において、早期膵島グラフト障害に対するNF-κBやproteasomeの阻害薬、PPAR-γ作動薬の有効性を研究し報告してきました。早期グラフト障害を逃れても、拒絶反応や自己抗体によって徐々に移植膵島は障害されます。また、移植後早期の炎症反応はallo免疫反応を増強することがわかっています。これらの免疫反応を解析し、教室ではアロ膵島移植におけるNF-κBやAP-1の阻害薬の有効性を報告してきました。

2. 今後の方向性

江本：現在、NK026680とDSTの併用治療による抗原特異的Treg誘導の機序解析を進めています。それと同時に、「NK026680とDST併用による免疫修飾効果」について、論文投稿を準備しています。

深作：今後はモデルを確立し、抗HLA抗体のみでヒト血管に影響を及ぼすかどうか、さらには、抗HLA抗体と各種グラフト浸潤細胞や補体の関与についての解析を行っていく予定です。

小野：「マウス同種同系膵島移植モデルにおけるproteasome阻害薬の効果」および「マウス同種異系膵島移植モデルにおけるAP-1阻害薬の効果」に関する論文投稿を準備しています。引き続き膵島移植後の革新的治療戦略の開発に関わる基礎研究を進めてゆきます。

（文責：深作慶友）

保存グループ

深井　原（1994年卒）

藤好　真人（2003年卒）
マウス肝移植モデルを用いた体外でのsi-RNA導入法の検討

石川　隆壽（2007年卒）
低温酸素化灌流による心停止肝グラフトの修復～水素化灌流の併用効果

1. 研究テーマ・概要

A) 臓器灌流 (深井・藤好・石川)：

ドナー不足の解決策として、心臓死（Donation after Cardiac Death; DCD）や脂肪肝、長期冷保存などのECD (extended criteria donor) を安全に活用する方法が模索されている。近年、欧米では臨床腎、肝移植におけるECDグラフトの灌流が行われているが、灌流法のGold Standardは定まっていない。臓器灌流の利点は好気代謝の促進、代謝老廃物の除去、血栓の除去、体外治療、viability/injuryの移植前評価などが挙げられる。われわれは灌流液の組成、灌流 (流量、圧、酸素分圧、灌流時間) の至適条件を探索してきた。灌流液は重水を主成分とする緩衝液であり、ラット心、肝や各種の細胞株の冷保存において有効であったものを使用した。長時間冷保存、心停止のグラフトを用いた冷保存法の至適化、低温酸素化灌流、低温酸素化灌流時水素ガス投与治療、再灌流時水素ガス治療を石川が検討し、脂肪肝グラフトでの検討も開始した。

B) 重水含有液の奏功機序の解明 (深井・小林)：

臓器 (細胞) 膨張、細胞質Ca^{2+}のoverload、アクチン脱重合、ミトコンドリア障害を軽減し、血液不含条件で酸化的リン酸化を促進し、細胞死を抑制することが重水液の主作用である。灌流における有効性が期待されるが、全ての温度で同様の保護効果が得られるか、また、温度によって保護機序の程度や性質的が異なるのか、など多くの未解決な点がある。重水含有液を用いた臓器灌流の各温度における細胞保護効果を明らかにし、小動物肝体外灌流モデルにおける奏功メカニズムを解明すると共に、至適灌流条件決定の一助とするために行った。

C) 臓器保護・修復を促進する新しい物質の併用効果 (深井・小林)：

われわれはラット肝、腎、心や細胞株 (肝、尿細管、小腸上皮、血管内皮、心筋) を用いて、単純浸漬冷保存、灌流保存、再灌流時におけるガス投与の有効性を検証してきた。障害性反応と保護性反応の時間的、空間的推移を解析し、各々の起点とエフェクターとなる細胞内シグナルを明らかにしたい。水素ガス、新規抗酸化物、ある種の分子シャペロンなどに着目し、基礎的な検討を行った。臓器保存や体外灌流時に実質細胞、非実質細胞で起こる変化を明らかにし、さらに前記の保護性物質が及ぼす影響を解明し、細胞間のクロストークを制御することを目指した。特にエネルギー産生、ミトコンドリア機能、細胞内Ca^{2+}の制御、をキーワードに、臓器修復の実現はもと

より、修復のメカニズムを解明することをゴールと考えている。

D) ヒト切除肝組織からの初代培養 (深井・肝グループDrs.)：

肝炎ウィルスに対する新規治療の効果を評価できる細胞源を作成するために、切除肝組織の非癌部から初代培養を開始した。成熟肝細胞を長期間保持することは困難だが、肝芽細胞、progenitor、小肝細胞などと称される細胞は継代、凍結保存が可能とされる。これらの細胞を分離、凍結保存し、必要な時に必要なだけ成熟肝細胞に分化させる方法論を確立するための検討を行った。初代培養の最初の関門は手術による温阻血の影響であり、如何に温阻血障害を軽減しつつ、培養に進めるかが課題である。われわれは新規保存液、酸素化、水素化などによって組織片を修復し、回収率を上げる工夫をしている。肝切除のhigh volumeセンターであり、臓器修復、培養のノウハウがある当科ならではの独創性の高い研究である。

E) マウス肝移植モデルにおける非冷温機械灌流法の確立 (藤好)：

我々はマウス肝臓を対象とした新規体外臓器灌流装置を開発し、室温環境下での任意の温度調節と酸素化灌流を実現した。この灌流装置をマウス肝移植モデルに適用し、非冷温（20℃）機械灌流を施したグラフトを用いたマウス肝移植において80%以上の長期生存（28日以上）を実現した。この非冷温機械灌流法を心停止後ドナーを用いた肝移植モデルに適用し、良好な成績を得ている。今後、新規灌流液、灌流法を用いて効果を生存率で示すことを目指す。

2. 今年度の満足度・来年度の抱負・今後の方向性

満足度：60%程度か。2014年度は島田慎吾が学位を取得した。研究課題名「硫化水素は生存シグナルの増強とNrf2の核内移行を介して肝温虚血再灌流障害を軽減する」(Hydrogen Sulfide Ameliorates Hepatic Warm Ischemia and Reperfusion Injury via Augmentation of Survival Signals and Nuclear Translocation of Nrf2))。来年度は藤好が学位取得見込みだが、深井、石川の研究の進捗は予定していたものに達しておらず、さらなるスピードアップが必要と考えている。

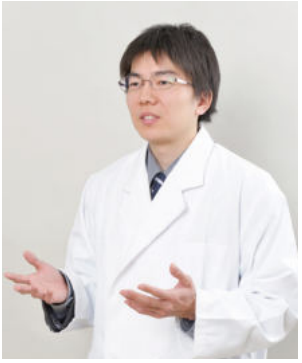
来年度の抱負・方向性：来年度の前半までに特許申請し、以後、随時論文として公表することが目標である。

今後の方向性：石川は心臓死モデルラット肝を用いた低温酸素化灌流を検討し、至適灌流条件の探索と水素ガスの併用効果を検討中だが、さらに、脂肪肝ラットモデルを作成し、同様の検討を開始した。低温酸素化灌流、再灌流時の水素ガス投与、灌流時間、温度などを検討し、脂肪肝に対する　至適灌流条件を確立することを目標とする。深井は臓器保存、灌流における保護性シャペロンの制御、新規抗酸化物の効果等の検討を開始した。ヒト切除肝からの初代培養では、肝芽細胞、あるいは、小肝細胞を単離し、遺伝子背景が異なるヒト由来の多ロットの細胞リソースを確立する。これらのヒト細胞を用いて、iPS細胞を作製したり、臓器保存、灌流をmimicした細胞実験を行う。藤好はマウス肝灌流、移植モデルを駆使して、新規灌流液の有効性を検討する。2015年度は新人（梅本、大谷、橋本）の加入により、さらに研究を加速していく予定である。

（文責：深井　原）

腫瘍（肝胆膵）グループ

大畑　多嘉宣（2006年卒）
肝細胞癌におけるFABP5のバイオマーカーとしての確立とその機能解析



相山　健（2007年卒）
肝細胞癌におけるEB1のバイオマーカーとしての確立とその機能解析

水上　達三（2007年卒）
NACRT後の膵癌切除検体における癌幹細胞マーカーの発現意義の解明
膵癌細胞株に対する抗メソテリン抗体の有効性の検討

高橋　秀徳（2005年卒）
糖鎖プロファイル解析による肝細胞癌の浸潤・転移の検討

1．研究テーマ・概要

〈肝細胞癌研究〉

2011年にC型肝炎ウィルスに対する新しいプロテアーゼ阻害剤テラプレビルが日本で承認されて以来、C型肝炎の治療成績が飛躍的に改善しつつあります。そのため、C型肝炎に起因する肝細胞癌が明らかに減少してきています。さらに、2014年にはB型肝炎に対する新しい核酸アナログ製剤であるテノホビルが承認されたため、B型肝炎のコントロールも向上するものと思われます。そうなれば、B型肝炎に起因する肝細胞癌も減少へと転じると推測されます。そんなB型およびC型肝炎の鎮静化が飛躍的に進みつつある今日、肝細胞癌切除後の再発形式も少しずつ変化してくるものと考えられます。

しかし、現在臨床で肝細胞癌の腫瘍マーカーとしてよく用いられるAFPやAFPレクチン分画、PIVKA-IIは、予後や再発の予測因子としてはまだ十分とは言えません。そこで、当グループはプロテオミクス解析から得られた２つのタンパク（FABP5とAPC結合蛋白EB1）に着目して、肝細胞癌における予後・再発予測因子としての確立およびその機能解析を目的に日々研究に励んでいます。

また、近年北海道大学大学院先端生命科学研究院の西村紳一郎らによって開発されたグライコブロッティング法によりスピーディーに網羅的かつ定量的なグライコミクス(糖鎖構造の解析)が可能となり、新たな方向からのバイオマーカーの探索などを行えるようになりました。そこで、当グループは肝細胞癌切除症例の血清を解析したところ２種類の血清糖鎖が肝細胞癌の予後および再発に強く関わっていることを発見し、報告しました。現在はこのような糖鎖がどのようにして癌の悪性度と関わっているのかを解明すべく日夜研究を進めています。

〈膵癌研究〉

日進月歩の近年、様々な分子標的薬が開発され、それによって様々な癌種の治療成績が向上しているにもかかわらず、膵癌はいまだ最も予後不良な癌の一つです。

その大きな要因の一つとして、術後再発の抑制に有効な手段があまりないことがあげられます。当グループでは以前より術前放射線化学療法（NACRT）を施行し一定の成果を報告してきましたが、その詳しい機序は不明のままです。そんな中、近年癌幹細胞説が唱えられ、その癌幹細胞が放射線に対する抵抗性を有すると考えられています。現在その癌幹細胞とNACRTの治療効果との関連性について着目し研究を行っています。

また、当グループではメソテリンが膵癌や肝外胆管癌の予後予測因子となりうることをこれまでに報告してきました。近年このメソテリンが癌治療のターゲットとなりうることが期待され、抗メソテリン抗体が開発されております。現在この抗メソテリン抗体を用いた膵癌に対する分子標的薬としての可能性についても検討し研究を行っております。

2．今年度の満足度・来年度の抱負・今後の方向性

今年度は大畑多嘉宣が肝細胞癌におけるFABP5の発現意義をEpithelial Mesenchymal Transition（EMT）の観点から解明し、３つの国際学会（AASLDやILCA、ASCO(GI)）で積極的に発表を行い、現在論文を作成中です。また、水上達三がNACRT後の膵癌切除検体において癌幹細胞マーカーを用いて免疫組織化学的検討を行い、癌幹細胞マーカーの発現パターンと予後との相関性について報告し、BMC Cancerに採用されました。来年度も今年度に負けぬよう積極的に学会発表や論文投稿を行っていきたいと思います。また、新たな実験手法や技術に対しても積極的に学習・習得し、今後の研究に活用していきたいと思います。

（文責：相山　健）

腫瘍（消化管）グループ

大野　陽介（2006年卒）

小丹枝　裕二（2006年卒）

石黒　友唯（2008年卒）

1. 研究テーマ・概要

現在、消化管Ｇでは大野陽介（2006年卒）、小丹枝裕二（2006年卒）、石黒友唯（2008年卒）の３名が大学院生として各講座にてリサーチを行っております。

大野陽介は、北海道大学遺伝子制御研究所免疫機能学分野において、腫瘍内に存在するミエロイド系細胞による免疫抑制機構の解明と、その制御によるがん免疫治療への応用を目指して研究を行っております。マウスの担癌モデルを中心としたミエロイド系細胞の腫瘍増殖に関わる役割がヒトにおいても相同性があるかを確認するために、大腸癌、胃癌の手術検体の一部よりミエロイド系細胞を単離し解析しております。

小丹枝裕二は、北海道大学大学院医学研究科病理学講座腫瘍病理学分野に所属し、近年、増加しつつある消化器癌脳転移の責任遺伝子の同定とそれらを標的とした治療法の開発を目的として研究を行っています。消化器癌の細胞株を用いて脳転移を作成し、親株と脳転移株との遺伝子発現の違いを次世代シーケンサーやマイクロアレイを用いて網羅的に解析することで、責任分子を同定することを目指しています。

石黒友唯は、北海道大学大学院医学研究科消化器外科学分野Ⅰにて、EMTに注目した消化器癌における循環・骨髄腫瘍細胞の臨床的意義の検討をテーマに研究を行ってます。腫瘍細胞を検出する方法は今日までは上皮系マーカーに着目したものが主流でありましたが、癌細胞が浸潤・転移する際は上皮間葉転換（epitherial-mesenchymal transition；EMT）を起こすことも知られており、間葉系マーカーにも焦点を当てた検出方法の確立を目指すことでこれまでよりも検出感度の向上を目指しています。

2. 今年度の満足度・来年度の抱負・今後の方向性

大野；腫瘍内ミエロイド系細胞に対するIL6の役割を中心に研究をすすめ、IL6が樹状細胞の機能を負に制御するというマウスで得られていた知見がヒトでも再現されること、その効果が実際の大腸癌微小環境下においても認められることを確認しました。今年度は、この内容を論文として投稿し、現在reviceにこたえるためのデータの再解析、論文の再構成を行いacceptを目指しております。また、今年度中にて学位取得する予定です。

小丹枝；マウス脳転移モデルの作成手技を確立させており、３種類の細胞株で脳転移株を樹立しています。現在は、より脳転移を来し易い細胞株を樹立するために脳転移作成作業を繰り返しています。今後は親株と脳転移株の遺伝子profileの違いから責任遺伝子の探索を行い、その機能解析を行うことにより、分子標的治療や予後予測マーカーなど臨床応用への可能性を探索していく予定です。

石黒；今年度から消化管Ｇのもとで研究を始めさせていただき、前半は自主臨床試験や科研の申請の手続きなど事務的なことを中心におこない自分の研究について座学をしました。結果的に英語論文を読むというアレルギーがなくなったのは収穫です。現在は、胃癌患者の検体を用いて実際に研究を開始したところです。prospectiveな研究なため、地道に症例の蓄積を目指していきたいと思います。

（文責：石黒友唯）

小児グループ

湊　雅嗣（2006年卒）

1. 研究テーマ・概要

〈肝芽腫におけるDNAメチル化異常の関与〉

私たちは主にDNAの異常メチル化と肝芽腫との関連について研究しています。遺伝子はプロモーター領域がメチル化すると発現が不活化されます。従って、たとえば癌抑制遺伝子のプロモーター領域が異常にメチル化されてしまった場合、その機能を発現することができ ないために細胞は癌化の方向へ導かれてしまいます。

また肝芽腫は３大小児悪性固形腫瘍の一つですが、100万人に1−1.5人の発症と言われており、希少がんに分類されます。その５年生存率は70%と比較的良好であるものの、予後予測可能な分子マーカーは十分なものがないのが現状です。
上記背景があり、現在の研究に至っておりますが、この研究テーマは本多先生が埼玉県立がんセンター研究所で行っていたもので、これを引き続き北大で行っています。日本小児肝癌スタディーグループからの検体の供与や、札幌医科大学分子生物学講座などの様々なバックアップのもと研究をさせていただいております。

今年度は肝芽腫における癌抑制遺伝子のDNAメチル化による予後予測因子を探求しています。具体的には、次世代シークエンサー・発現アレイ等を用いての候補 遺伝子の抽出、臨床検体におけるDNAメチル化率の計測・mRNA/たんぱく質の発現解析、臨床像・化学療法耐性などとの関連の検討などを行っています。また，並行して強制 発現株の作成およびin vitro解析を行っています。

2. 今年度の満足度・来年度の抱負・今後の方向性

今年度の満足度：小児グループ初の大学院生として、今年度より研究を開始いたしました。開始にあたり、中期的目標として（大学院在学中の目標）は、①まず無事学位を頂けるような研究を遂げること、②小児グループとしての研究システム基盤を完成させること、③後代へ研究手法を指導できるようになること、以上を目標として研究に勤しんでおります。短期的目標としては、研究に関する言語・手技・手法を理解するという低めの目標を掲げ、これは概ね達成できたと思っております（満足度90%）。

今後の抱負：大きくはやはり小児グループとしての研究システムを構築すること。個別にはin vivo解析の開始、新たな研究分野への応用、および学会での研究者との名刺交換10回を今年度の短期目標として考えています。

今後の方向性：これまでの予後予測因子としてのDNAメチル化異常の探索と検証に加え、新たに肝芽腫の化学療法耐性メカニズムを研究テーマとして一部開始いたしました。（詳細はまだ公表できません）。

（文責：湊　雅嗣）

２０１４年教室紹介

〈留学生〉

国内留学

宮城　久之

卒業年：2003年
留学先：神奈川県立こども医療センター外科

近況報告

平成23年４月より、神奈川県立こども医療センター外科で勉強させて頂いております。２年目となり要領も得てスムーズに･･･というつもりでしたが、４万出生に１人の割合とされる仙尾部奇形腫の患児が１日に２例来たり、胆道閉鎖症が５週連続紹介され５週連続葛西手術など、気がつくと夜になってしまっている日々です。もちろんすべてが担当ではありませんがレジデントは３名だけであり、まんべんなく十分な症例を当てて頂いており大変勉強になっております。

横浜の生活は、結局あまり散策はできず、地理に疎いままとなってしまい反省しています。今年度のプライベートなニュースは、第１子が生まれたことです。なかなか恵まれませんでしたが、神奈川への国内留学のおかげか伊勢神宮お参りのおかげか定かではありませんが、とても幸せなことでした。武冨教授、本多先生はじめ皆様に感謝しております。

日々に追われるばかりでなく業績も含め、更なる精進が必要で、残りわずかですが気を引き締めて参りたいと存じます。

2014年の業績

1．短腸症候群における静脈栄養離脱症例の検討
宮城 久之（神奈川県立こども医療センター 外科）、北河 徳彦、新開 真人、武 浩志、望月 響子、臼井 秀仁、浅野 史雄
第51回　日本小児外科学会学術学会（2014.05）大阪、要望演題

2．出生直後から極めて重篤な症状を来たし救命できなかったmyofibromatosisの1例
宮城 久之（神奈川県立こども医療センター 外科）、新開 真人、武 浩志、北河 徳彦、望月 響子、臼井 秀仁、中村 香織、後藤 裕明、田中 祐吉
第61回神奈川小児腫瘍研究会（2014.09）横浜「奨励賞」受賞

3．空腸盲端がapple-peel型を呈した離断型先天性十二指腸閉鎖の1例
宮城 久之（神奈川県立こども医療センター 外科）、北河 徳彦、新開 真人、武 浩志、望月 響子、臼井 秀仁、中村 香織
第49回日本小児外科学会関東甲信越地方会（2014.10）千葉

4．Cavernous transformationを伴った肝芽腫に対する肝切除の工夫
宮城 久之（神奈川県立こども医療センター 外科）、北河 徳彦、新開 真人、武 浩志、望月 響子、臼井 秀仁、中村 香織
第34回小児内視鏡外科・手術手技研究会（2014.10）兵庫

5．多臓器不全で死亡した新生児myofibromatosisの１例
宮城 久之（神奈川県立こども医療センター 外科）、新開 真人、武 浩志、北河 徳彦、望月 響子、臼井 秀仁、中村 香織、後藤 裕明、田中 祐吉
第56回日本小児血液・がん学会学術集会（2014.11）岡山

野口　慶太

卒業年：2003年
留学先：国立がん研究センター 東病院 大腸外科

近況報告

国立がん研究センター・東病院にて研修させていただき、３年目になりました。大腸外科の手術に関しましては内視鏡外科手術を中心に研修させていただき、日々考えながら手術に取り組んでおります。手術に関しては私が北大１外の先輩方に教えていただいた面の展開と、左手の使い方ですべてが決まりそれ以上の基本はないと改めて考えさせられております。腹腔鏡に関しては先ほどの基本に加えて軸合わせが加わり、この概念のとらえ方が開腹手術に加わる分難しくなる場面が多いと思います。北大１外にも札幌厚生病院にて１年間一緒に働かせていただいた川村先生をはじめとして内視鏡手術の

名手がいますので、またご一緒に手術させていただく機会があればいろいろな意見を交わすことができると思いますので楽しみにしております。

研究に関しては国立がん研究センター・東病院ではほぼすべての手術となる患者さんが何らかの臨床研究に登録されている状況です。例えば直腸癌に関しては世界的には術前放射線化学療法が主流ですが、放射線療法の肛門機能増悪があるので、当院では肛門機能を良好に温存するために化学療法のみ（FOLFOX）を施行することで５年生存率の延長がのぞめるのではないかと期待がもたれ、様々な研究がはしっております。北海道の大腸癌のpopulationを考えると十分にstudyを組んでいけると思います。2015年４月から北海道にもどらせていただく予定ですが、様々な研究に関与して全国学会、海外学会、論文に発表する必要があると考えております。論文に関しては当院で現在１編作成中でありまして、３月までには投稿する予定です。

2014年の業績

《学会発表：国立がん研究センター東病院　大腸外科》
第114回　日本外科学会定期学術集会　一般演題　2014/4/3-5 京都
ISR術後の長期肛門機能の検討
野口慶太、西澤雄介、小林昭広、伊藤雅昭、杉藤正典、斉藤典男

第81回　大腸癌研究会　ポスター　2014/07/04 名古屋
高齢者の下部直腸癌治療における側方郭清と術後補助化学療法に関する検討
野口慶太、西澤祐吏、小林昭広、伊藤雅昭、齊藤典男

第69回　大腸肛門病学会学術集会　2014/11/7-8 横浜
（シンポジウム：標準化を目指した消化管ストーマの造設と閉鎖）
直腸癌手術における Diverting stoma 造設の定型化と成績
野口慶太、西澤祐吏、小林昭広、伊藤雅昭、斉藤典男

正司　裕隆

卒業年：2007年
留学先：国立国際医療研究センター　肝炎・免疫研究センター

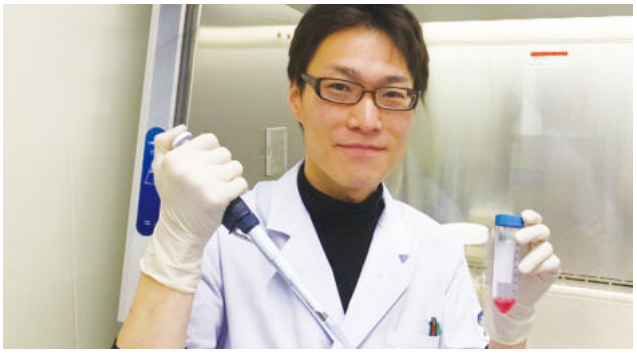
近況報告

2013年入局の正司裕隆と申します。私はまだ入局して日が浅いので私のことをご存じない先生方がほとんどかと存じますが、このたび国内留学近況報告の場をいただきましたので、ご紹介させていただきます。私は2014年4月より千葉県にある国立国際医療研究センター肝炎・免疫研究センターで研究をさせていただいております。こちらの施設では肝疾患に対する診断、治療、予防に貢献することにより肝炎、肝癌の撲滅と免疫疾患対策をめざし設立された機関です。こちらの施設には遺伝子学分野や免疫学分野をはじめとする肝疾患におけるさまざまな研究分野の先生方がおられ、多方面からの貴重なお話やご指摘をいただいております。このような経験は他の施設ではなかなか経験できないすばらしい環境だと日々感じております。

私の研究テーマは「肝細胞癌におけるTIE2 expressing monocyte(TEM)の誘導機序の解明」です。肝細胞癌の増殖には血管新生が関与しており血管新生関連細胞として注目されているTEMが腫瘍増殖に関与していることが報告されていますが、TEMの誘導機序は明らかとなっておりません。TEMの誘導を抑制することが腫瘍増殖を抑制し、新規治療につながると考えてTEM誘導因子の探索を行っております。まだまだ発表できるような結果は残せておりませんが、1日でも早く、良いご報告ができるように日々精進する所存です。

こちらのセンターは千葉県にありますが、東京まで30分と交通の便は非常によい場所です。研究の合間には研究員の方々と東京都内に食事にいったり、趣味のアイスホッケーをしたりと充実した私生活を送っております。

最後になりましたが、このような素晴らしい環境で研究をさせていただく機会を与えてくださった武冨教授、消化器外科学分野Ⅰの先生方に厚く御礼申し上げます。今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。



海外留学

大浦　哲

卒業年：2001年

留学先：Massachusetts General Hospital, Surgery Transplant Center, Harvard Medical School

近況報告

同門会の皆様、私は2001年卒業の大浦哲です。2012年11月からResearch FellowとしてMassachusetts General Hospital, Surgery, Center for Transplantation Sciences, Harvard Medical School, Bostonに勤務しております。私の直属のBossであるDr. Kawaiから与えられたテーマは『膵島移植の成績向上』、『脳死移植患者への免疫寛容の誘導』の２点です。これを実現する為に日々カニクイザルと戯れて、人間・サルの検体を解析しております。日本では経験の無かったサルの腎移植・膵島移植を月に３回～４回程度行っております。臨床の時と同じように早朝からサル回診をして藤堂方式で働く生活していたら、奇特な日本人と思われました。しかし１年経ち北海道大学泌尿器科から同世代の同僚が参戦して同じような生活をしてくれるので、現時点では『こういう種類の日本人達。』と認識してくれる様になりました。テーマのハードルが高くて中々結果の出ない日々を過ごしていましたが、徐々に進むべき道筋がおぼろげながら見えてきました。

生活面ではボストンでの生活に慣れたおかげで昨年の近況報告とは異なり、レッドソックスの試合をフェンウェイに見に行くことが出来る様になりました。

食生活も充実して来て、夏はBBQ、冬は鍋にお好み焼きという生活になっております。もしアメリカ東岸にいらっしゃる事が有れば連絡を頂けると幸いです。季節によってお勧めのレストランか自宅でのBBQに招待させて頂きます。

最後に、外科医不足の中、留学に行かせて頂ける自分の立場を自覚し、背中を押して頂いた藤堂先生・山下先生をはじめ、お世話になっている同門の先生方に深く感謝しております。

2014年の業績

I.Journal articles

1. Oura T, Yamashita K, Suzuki T, Watanabe M, Hirokata G, Wakayama K, Taniguchi M, Shimamura T, Furukawa H, Todo S. A technique for orthotopic live r transplantation in cynomolgus monkeys. Transplantation. 2014; 98(6): 58-60.
2. Yamada Y, Ochiai T, Boskovic S, Nadazdin O, Oura T, Schoenfeld D, Cappetta K, Smith RN, Colvin R, Madsen JC, Sachs D, Benichou G, Cosimi AB, Kawai T. Use of CTLA4Ig for Induction of Mixed Chimerism and Renal Allograft Tolerance in Nonhuman Primates. Am J Transplant. 2014 12; 14(12): 2704-12.

II.Published Abstracts

1. Oura T, Hotta K, Rosales I, Dehnadi A, Ndishabandi D, Kawai K, Cosimi AB, Benichou G, Kawai T. Suppression of CD8+ memory T cell proliferation and expansion of T regulatory cells by bone marrow derived autologous mesenchymal stem cells in nonhuman primates. World Transplant Congress 2014. San Francisco, USA, 2014, 7. Am J Transplant. 2014; 7(Supple 2).
2. Yamada Y, Hotta K, Oura T, Tonsho M, Dehnadi A, Bernard-Stoecklin S, Smith N, Colvin R, Benichou G, Cosimi AB, Kawai T. Novel ELISPOT assay to detect allo-reactive B cells in kidney-transplant recipients in non-human primates. World Transplant Congress 2014. San Francisco, USA, 2014, 7. Am J Transplant. 2014; 7(Supple 2).
3. Hotta K, Aoyama A, Oura T, Tonsho M, Yamada Y, Allan J, Madsen CJ, Cosimi AB, Benichou G, Kawai T. Donor Specific Regulatory T-cell Expansion is Associated with Maintenance of Allograft Tolerance Induced by Transient Mixed Chimerism. World Transplant Congress 2014. San Francisco, USA, 2014, 7. Am J Transplant. 2014; 7(Supple 2).

III. Award

1. 2014 World Transplant Congress: Young Investigators Award (San Francisco)

渡辺　正明

卒業年：2001年
留学先：カロリンスカ研究所移植外科学部門

近況報告

Sweden、Stockholmに来て、早２年が過ぎました。仕事の幅を広げつつ目下の課題に取り組んでいます。カロリンスカ研究所移植外科学部門は、Swedenでは最大の、また、欧州でも主要な臨床移植外科部門です。近年は移植件数も増え、昨年は年間約100例の肝臓移植、約100例の腎移植、約20例の膵臓移植を行っています。その他、膵島移植や臨床肝細胞移植も実施しています。臨床では、上記移植手術、ドナー手術へ参加するとともに、基礎研究では、細胞移植（膵島移植、肝細胞移植、幹細胞移植）に関する研究に従事しています。膵島移植における、新たな抗炎症薬の臨床試験、また、肝臓移植での免疫寛容誘導試験を開始すべく基礎実験から、書類作成等、準備を進めています。

言葉の壁や文化の差異に戸惑いながらも、たくさんの方々に支えていただいています。あっという間に毎日が過ぎてゆきますが、いただいた機会を十分に活かせるよう目の前の仕事に一生懸命取り組んでゆきます。

財津　雅昭

卒業年：2003年
留学先：Transplant Research Immunology Group (TRIG), Nuffield Department of Surgical Science (NDS), University of Oxford

近況報告

Oxfordでリサーチをしている財津です。研究内容は去年の会報に簡潔に載せましたが、ヒト化マウスを用いて選択的CD28副刺激遮断による効果を評価しています。今年１年はなかなか仮説通りには進まず、楽しくはあるのですが、時間との戦いだった気がします。現在はpublicationに向けて最後の詰めの段階であります。４年ぶりにWorld Transplant Congressで発表もでき、実りの多い年でもありました。

Oxfordに３年もいると留学者の中では古株になりました。おかげさまで、他分野の方とも交流する機会に恵まれ、情報交換もできるようになり小さな世界が少し大きくなった気がします。また、今後やりたいことも増えてきました。

家族はすっかりイギリスの生活に慣れてしまい、日本に戻るのが逆にチャレンジになってしまっているように思えます。

さて、Wood Labのことですが、Transplantationの分野を研究しているところでは国内外を問わず認知されているところです。去年はNuffield Department of Surgical Scienceの部門で分野を問わず各グループからの研究発表があったのですが、すべてのAwardを総ナメしてしまいました。Kathrynはホクホクでしたが、個人的にいいのかと思ったぐらいですが。Labとしては決して大きくはなく、別段最新の機器があるわけではありません。しかし、オープンにPhDからPhD studentを受け入れてくれ、色々と面白そうな研究テーマをいくつも抱えています。僕の後にも、挑戦してくれる後輩が出てくることを祈っています。機会があり悩んでいるのであれば、ご相談いただければ自分の経験を伝えることはできます。お気軽にご連絡ください。

最後に、Oxfordの生活ではなかなか得難い経験をさせていただけました。映画で例えるならマトリックスのような感覚でした。ヒトの人生の価値観や目的にいたるまで、色々なものが刷新されていきました。イギリスでの経験は僕の人生の宝になり続けると思います。

（写真の説明）
2014 WTCにて　（左）Fadi Issa, (右) Kathryn Wood。
Fadiは形成外科医ですが、PhDをWood Labでとった後も50% Research 50% Clinical workというスタイルでWood labに所属しています。僕の研究の一番の相談役です。

2014年の業績

“Anti-CD28 antagonism using a monovalent Fab antibody for the prolongation of human skin allograft survival”
Masaaki Zaitsu, Fadi Issa, Joanna Hester, Kate Milward, Bernard Vanhove, Kathryn Wood
2014 World Transplant Congress, San Francisco, July 26-31, 2014

２０１４年教室紹介

〈2014年入局後期研修医〉

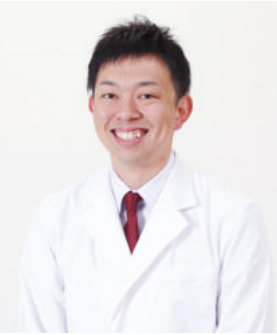
2014年教室紹介/2014年入局後期研修医

新入局員アンケート

1 今年度の感想/来年度の抱負/今後興味ある専門分野など
2 進路（外科）を考え始めた時期
3 一外入局を考え始めた時期
4 一外入局を決めた時期
5 一外に入局した決定的な理由
6 今年一年で特によかった出来事
7 今年一年で力がついたと思うこと

加藤 拓也

1 今年度の感想としては、外科は思っていた以上に頭を使う科だと感じました。色々なグループを周らせていただき、それぞれ疾患・病態の考え方や手術の要点、術後管理などに少しずつ違いがあり、外科という単純なひとくくりの考え方ではうまく行かないことも多々あり、一筋縄ではいかないことも多かった点で外科の奥深さを感じました。
来年度の抱負としては、市中病院で働く事が決まり、自分が執刀する機会も多く与えられると思うので、一症例一症例を大事に解剖や手術操作など外科手術の基礎を学びながら、できるだけ多く執刀できるように精進していきたいと思います。
今後興味ある専門分野としては、内視鏡手術に興味があるので消化管グループを専門にやっていきたいと考えています。ただ、開腹手術ができてこその内視鏡手術であると思うので、開腹手術もしっかりとできるように鍛錬を積みたいと思います。
2 学生～研修医１年目終了時
3 研修医２年目の秋頃
4 研修医２年目の冬
5 教授の人柄・手術の上手さ
6 内視鏡の縫合トレーニング・アニマルラボ
7 術後管理、特にICUでの重症患者の管理に少し自信がついた



吉田 祐一

1 初期研修が終わり、医師として本格的なスタートを切るにあたり、私は第一外科に入局しましたが、とても充実した１年を送る事ができたと思います。外科医として今後のキャリアを積み重ねて行く事を決めたとはいえ、技量も経験もまだまだ乏しい私を温かく迎えていただき、各疾患、各手術毎に一から様々な事を教えてもらい、しっかり勉強させていただいたと思っています。今年はヒエラルキーの底辺でチームの方針をそのまま遂行する人間という認識で、責任という事に関してはあまり実感がありませんでしたが、来年度以降は主治医として患者に関わって行く事も多くなると思うので、しっかりした自覚をもって臨んで行きたいと考えています。まだまだ見る事やる事全てが新鮮で、今後どの分野を究めて行くかはまだ考えていませんが、これからもまずは一生懸命に目の前の事に全力で取り組んで行きたいと思います。
2 初期研修医２年目の秋頃
3 同上
4 初期研修医２年目の秋（11月頃）
5 手術が楽しかった・外科の先生と一番馬が合うと感じた・北大出身で初期研修先が一外の関連施設だったので
6 グループ毎にスペシャルな先生がいて、上手な手術を沢山見れた事・沢山のいいイメージを蓄積できた
7 調べる力（調べ方）が少し身に付いた

近藤 享史

1 今年度入局致しました近藤享史です。今年度は、外科という自分の先行する分野を選択したということと、生活の場としても、大学、初期研修を過ごした関西、東京を離れ、８年ぶりに北海道に帰ってきたということで、大きな変化のある一年となりました。
大学で過ごした一年は、非常に濃密で、これまでに見ることのなかった症例に触れることができて有意義でした。特に初期研修ではあまり経験のなかった肝臓、膵臓の手術の周術期を見られたことや、予てより興味のなった肝移植という特殊な医療に、ICUでの管理も含めて触れることができたことは印象的でした。また、今後は特に小児外科医療に関わってみたいと考えていることもあり、大学で新生児疾患や、腸管不全、胆道閉鎖症術後患児などを見ることができたのも、小児外科の様々な側面を学ぶことができて非常に貴重な経験となりました。
来年度は、砂川市立病院での勤務となりました。これまでより自分自身での選択を迫られる機会が多くなるかとは思いますが、大学で教えていただいたことを活かし、また今後もしっかり勉強して、適切な医療が提供できる医師になれるように努力したいと思います。
今後とも何卒、ご指導、ご鞭撻の程よろしくお願い致します。

2 医師を志したときから

3 前年度の春頃

4 前年度の10月頃

5 北海道を基盤に小児外科医療に携わりたいと思ったので

6 様々な症例に触れることができたこと・腹腔鏡のトレーニングのプログラムなど教育体制ができていたこと

7 手術を意識して画像など術前検査を読むこと

坂本 聡大

1 私は今年度より消化器外科Ⅰに入局させていただき、消化器外科医として働き始めました。初めは慣れない大学病院での仕事に加え、知識も乏しく、諸先輩方にご迷惑をかけることも多かったと思います。今年度１年間で、外科医として多くのことを学ばせて頂きましたが、まだまだ至らない点も多々あるのは間違いなく、これからも知識や技術の習熟に努めていきたいと思います。
来年度は市中病院でお世話になり、さらに多くの症例を経験し、外科医として成長したいと考えています。消化器外科医として一人前になるためにはまだ経験不足であり、専門分野を決める前に分野を隔てず様々な症例を経験する必要があると思っています。未熟者であり今後も諸先輩方にはご迷惑をおかけするかもしれませんが、今後とも何卒よろしくお願いいたします。

2 学生の頃から

3 研修医のとき

4 研修医２年目の秋から冬の頃

5 北海道で一人前の外科医になるため

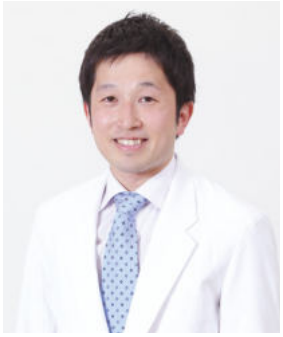
6 息子が生まれたこと

7 鏡視下縫合結紮（ドライボックス）

1 今年度の感想/来年度の抱負/
今後興味ある専門分野など
2 進路（外科）を考え始めた時期
3 一外入局を考え始めた時期
4 一外入局を決めた時期
5 一外に入局した決定的な理由
6 今年一年で特によかった出来事
7 今年一年で力がついたと思うこと

志智 俊介

1 肝胆膵分野や小児外科、ICU管理は初期研修では経験できなかった分野で非常に勉強になりました。肝移植など大学ならではの先端医療についても触れることができた点はよかったです。また、同じスタートラインに立つ多くの同期と働くことができたことも刺激になってよかったと思います。来年度は関連病院で今年学んだことを生かして実際に自分の手を動かして基本的な手技から、術者としての経験も積みたいです。今は腹腔鏡手術に興味がありますが、いろいろ経験して自分に合った専門分野を見つけたいと思います。
2 5、6年生で臨床実習の頃から
3 初期研修でローテートした頃から
4 初期研修２年目の夏頃
5 初期研修で消化器外科の診療や手術手技に興味をもったから
6 術前評価から術後周術期管理まで基本から学ぶことができた
7 症例のプレゼンテーションを通して、疾患・手術に対して理解を深めることができた



柴田 泰洋

1 大学病院で１年間勉強して思ったことは、外科での手技が未熟であることだけでなく、知識などまだまだ足りないことを感じる。自分だけでは考えつかなかった点を気付かされ、多くの先生方から様々な角度で物の考え方を教わったと思う。来年度からは市中病院でさらに経験を積んで、知識と技術を磨いて行きたい。
2 初期研修医２年目
3 初期研修医２年目
4 初期研修医２年目１月
5 北海道で外科になるならば１外しかないと思った。
6 福島のラパロトレーニングに行けたこと
7 考えて、調べて、考えること

石川 倫啓

1 大学病棟勤務は朝も早く、また難しい症例も多く、予想していた通り、あるいはそれ以上に大変な１年だったと思います。業務が終わった後も学会等の発表の準備に追われたりと、かなり濃い１年だったように思います。反省点は挙げればきりがないですが、昨年よりは少しは成長できたのではないかと期待しています。また同期も多く、お互い助け合いながら仕事をすることで、同期の大切さを改めて実感しました。大変な面も多かった分非常に充実した１年を過ごすことができました。ありがとうございました。最近になって、同期と一緒に仕事をすることはしばらくないのだろうなと考える機会も増え、少し寂しい気持ちでいます。来年はより積極的というかもっと頭を使って手術や日々の診療に取り組んでいきたいと思っています。今後は腹腔鏡操作の基本手技をもっと徹底して学んでいきたいと考えています。

2 初期研修医2年目の6月に外科をローテートした時

3 初期研修医２年目の秋

4 初期研修医２年目の冬

5 研修先の同門の先生方の雰囲気・仕事をしている時の空気・飲み会のテンション
北海道で外科をやるならここしかないと思えた

6 多くの同門の先生と接することができたこと

7 患者さんに何が起こっており、どうすればいいのかより深く考えるようになれた

千田 圭悟

1 2014年４月から北海道大学第一外科の一員として働き始め、早１年が経ちました。外科医１年目として初めてのことばかりで手探りの１年間でしたが、非常に得たものも多かったと思っています。まず、トップクラスの手術を実際に目で見て、指導を受けることができたということ。内科にも言えることだと思いますが、特に外科は上級医の指導次第で今後の成長や目標設定がかなり違ってくると思います。最初に見本とすべき手術に入ることができたことは大きいと思っています。また、各症例の詳細なカンファレンスと行い、その場で質問も飛んでくるため、その疾患について詳しく調べる必要があったこと。必要に迫られて自分で資料を集めることで、PubmedやGoogle scholar等での論文検索の仕方も学べたし、英語論文を読むことが苦ではなくなりました。これは今後の診療においても非常にプラスになると思います。
来年度は大学で学んだことに加えて大学では学べなかった緊急症例の手術等にも対応できるように勉強して行きたいと思っています。現時点では腹腔鏡手術に興味があり、今後は技術認定医等の資格習得ができるよう、今から高い目標をもち、一歩一歩着実に頑張っていきたいと思っています。

2 研修医２年目　８月頃

3 研修医２年目　９月

4 研修医２年目　９月

5 北海道で外科をするなら第一外科だと単純に思ったため
研修先（市立札幌病院）の上司の先生が北大第一外科の先生であったため

6 腹腔鏡を中心に指導していただき、腹腔鏡補助下の手術も２例経験させていただいたこと。
他の外病院では３年目にはやらせてもらうことはできないと思います。非常に勉強になり、モチベーションにもつながり、今後の目標もできました。

7 ICUで経験した重症患者全身管理・肝硬変患者のマネージメント・肝の解剖学的な知識
腹腔鏡手術における解剖学的知識と手技

1 今年度の感想/来年度の抱負/
今後興味ある専門分野など
2 進路（外科）を考え始めた時期
3 一外入局を考え始めた時期
4 一外入局を決めた時期
5 一外に入局した決定的な理由
6 今年一年で特によかった出来事
7 今年一年で力がついたと思うこと

太田 拓児

1 同期と病棟スタッフの先生方に支えられた１年だったと思います。病棟の指示や処置もスタッフの先生方からみて不安を抱いていたと思いますが、それでも温かく見守っていただき積極的に病棟業務に関わることができたと思います。６つの診療グループをローテートし、思っていた以上に自分で手術、処置する機会が多く充実しておりました。初期研修医の時に小児科をローテートしていなかったため、この一年で小児の栄養からICU管理まで幅広く学ぶことができたこともICUをローテートできる魅力と感じました。またICUでは重症患者の全身管理を主治医となって行い、失敗と反省することも多く、大学病院でしかできない経験となったと思います。
今後、市中病院の勤務となり、自ら執刀する症例も増え、初期研修医に教える立場となるため、技術の研鑽と知識の積み重ねを怠らず努めます。
2 初期研修医１年目
3 初期研修医１年目
4 初期研修医２年目
5 初期研修病院の外科の先生たちが素敵で、目標にしたいと思ったから
6 同期に恵まれたこと
7 他科へのコンサルテーション能力

柏倉 さゆり

1 体力が持つか心配でしたが、無事病棟勤務を終了できそうで、安心しています。初期研修医の終わりかけに、急遽消化器外科を志したので、今年は要領を得ないことがずいぶんたくさんありました。来年度はもう少し外科医に近づけるように頑張りたいです。
2 研修医２年目　10月頃
3 研修医２年目　10月頃
4 研修医２年目　12月頃
5 不出来な私のことも、見捨てず教育していただけそうだから
6 同期がたくさんできたこと・各グループを回って臓器別に研修できたこと
7 あまりありませんが、強いて言うなら学会発表

２０１４年教室紹介

〈秘書・クラーク・実験助手〉

2014年教室紹介/秘書・クラーク・実験助手

医局秘書

川口 菜穂子

平成23年２月から医局秘書として働かせて頂いております。働き始めて４年が過ぎましたが､毎日楽しくお仕事させて頂いています。主な仕事は教授関連業務です。先生方のお役に立てるよう努めて参りたいと思いますので、今後ともどうぞよろしくお願い致します。

中澤 有紀

医局秘書の中澤有紀と申します。主に研究費関連業務、教室費関連業務を担当しております。

勤め始めて数年が経ちましたが、昨年はBBQや医局旅行もあり、仕事に飲み会に、楽しく働かせていただいております。

塩田 優貴子

2010年７月より医局秘書として勤務しております塩田優貴子と申します。

早いものでこちらに来てから５年が経ち、間もなく雇用期限満了に伴い退職の日を迎えます。初めは慣れない仕事で戸惑う事も多々ございましたが、親切な職場の方々に恵まれて少々そそっかしい私ですがここまで楽しく続けてこられました。

担当業務は多岐にわたり、普通の企業でしたら何年も勤めなければ担当することができないくらい色々な経験を積ませて頂きました。本来であれば、この辺りで社会人生活にも有終の美を飾りたかったのですが、まだそういうわけにはいかないようです。。。

楽しい第一外科を離れる事は今は寂しい気持ちでいっぱいですが、後任へバトンを渡せるよう誠心誠意引継ぎをして参りたいと思います。

最後になりますがこの冊子をご覧になっている諸先生方にこの場をお借りして感謝の気持ちをお伝えしたいと思います。ありがとうございました。

小原 美都

担当業務：医局長関連業務、同門会事務局、医学部学生・大学院学生関連業務（学位申請等）、業績収集、教室年報・HP関連業務

秘書として勤務させていただき、早１年が過ぎました。

振り返りますと本当にあっという間の日々でしたが、教室業務のみならず同門会事務局も担当させていただき、栄えある第一外科の歴史の重みを感じ、また、僅かばかりながら先生方のお手伝いが出来る事を大変光栄に思っております。

まだまだ至らぬ点はございますが、日々精進し、One for All, All for Oneの精神で頑張ります。

どうぞ宜しくお願い致します。

病棟クラーク

鈴木　愛

担当業務は症例登録関連、手術映像の処理と管理等です。

どうぞよろしくお願い致します。

実験助手

三好 早香

Tissue bank 検体の処理と管理、vitro実験のお手伝いをさせていただいております。

徐々に実験も任せていただけるようになってきましたが、さらに皆様のお役にたてるよう、貪欲に技術を吸収し新たな手技も習得していきたいと思います。

五十嵐 瑠美

移植患者さんの免疫モニタリングアッセイ、実験の手伝いをさせていただいております。

よい実験結果につながるよう、正確な仕事をするように心掛けております。

どうぞよろしくお願いいたします。

小林　希

vitro実験関係をお手伝いさせていただいています。

新しい技術も習得させていただき、リサーチにおいて今以上に皆様のお力になれるよう努力中です。

今年は『結果を出すこと』にも挑戦していきたいと思います。

堀米 正敏

第一外科最年長（たぶん）となってしまいました。

実験助手、堀米です。まさか、こんなに長く居るとは……！

皆様に助けていただきながら働いています。

宜しくお願いします。

2014年業績紹介

（学会・論文・研究費一覧）

2014年業績紹介

2014年学会一覧

《学会発表（国内）》

2014.1.26　日本小児肝癌スタディグループ（JPLT）研究会2014（新宿区）
肝芽腫におけるDNAメチル化異常と予後の関連
本多昌平、岡田忠雄、湊雅嗣、武冨紹信

2014.2.12　第12回肝不全懇話会（札幌市）
PBC＋AIHオーバーラップ症候群の進行により肝不全に至った一例
腰塚靖之、高橋徹、後藤了一、青柳武史、山下健一郎、武冨紹信、嶋村剛

2014.2.15　第44回日本小児消化管機能研究会（大阪市）
乳児期に診断された先天性肛門狭窄症（CAS）における術式の検討
岡田忠雄、本多昌平、湊雅嗣、武冨紹信

2014.2.22　第100回北海道外科学会（札幌市）
Robot支援下腹腔鏡下直腸切除/切断術の導入
柴崎晋、本間重紀、皆川のぞみ、川村秀樹、高橋典彦、武冨紹信

FDG-PETが診断に有用であったMuir-Torre症候群の２例
宮岡陽一、本間重紀、柴崎晋、皆川のぞみ、川村秀樹、高橋典彦、武冨紹信

腹腔鏡下残胃全摘術の２例
渋谷一陽、川村秀樹、柴崎晋、皆川のぞみ、本間重紀、高橋典彦、武冨紹信

膵腎同時移植後に発症した腸閉塞の１例
松井博紀、高橋徹、腰塚靖之、後藤了一、青柳武史、山下健一郎、鈴木友己、太田稔、古舘馨、山本真由美、嶋村剛、武冨紹信

副脾茎捻転に対し緊急手術を施行した１小児例
加藤紘一、岡田忠雄、本多昌平、湊雅嗣、武冨紹信

腸管穿孔を伴う小腸悪性リンパ腫に対して人工肛門造設及び二期的腸管吻合を行った一例
高橋秀徳、谷安弘、高橋学、中川隆公、松岡伸一、佐々木文章

当科における生体・脳死肝移植での血管グラフト併用門脈再建症例の検討
谷道夫、嶋村剛、腰塚靖之、高橋徹、後藤了一、青柳武史、山下健一郎、太田稔、古館馨、山本真由美、武冨紹信

特異な画像所見を示し診断に苦慮した肝内胆管癌再発の１例
金沢亮、蒲池浩文、敦賀陽介、若山顕治、折茂達也、柿坂達彦、横尾英樹、神山俊哉、武冨紹信

当科におけるOncotypeDX施行症例のrecurrence score（RS）と臨床病理学的因子の検討
正司裕隆、細田充主、市之川一臣、中野基一郎、山本貢、亀田博、武冨紹信、山下啓子

横行結腸癌肝転移切除後断端再発に対し施行したRFA後に、biloma内再発をきたした１例
深作慶友、神山俊哉、若山顕治、折茂達也、敦賀陽介、柿坂達彦、横尾英樹、蒲池浩文、武冨紹信

2014.2.28　第39回北海道小児がん研究会（札幌市）
DNAメチル化異常が肝芽腫の予後予測因子となる
本多昌平、岡田忠雄、湊雅嗣、武冨紹信

2014.3.1　第26回代用臓器・再生医学研究会総会（札幌市）
酸素化体外灌流における水素ガスの肝保護効果
石川隆壽、深井原、島田慎吾、若山顕治、山下健一郎、嶋村剛、武冨紹信

2014.3.1-3.2　第114回日本消化器病学会北海道支部例会（札幌市）
TACE後の再発に対する再肝切除後、急速に再発した肝細胞癌の２例
折茂達也、神山俊哉、横尾英樹、柿坂達彦、若山顕治、敦賀陽介、蒲池浩文、武冨紹信

局所進行膵癌に対するゲムシタビン併用術前放射線化学療法の治療効果
敦賀陽介、蒲池浩文、若山顕治、折茂達也、柿坂達彦、横尾英樹、神山俊哉、武冨紹信

早期胃癌、大腸癌重複例に対してDual Port（DP）法で腹腔鏡下胃全摘、下行結腸切除術を施行した一例
松井博紀、皆川のぞみ、柴崎晋、本間重紀、川村秀樹、高橋典彦、武冨紹信

薬剤性劇症肝炎亜急性型を救命し得た脳死肝移植２症例の検討
渋谷一陽、後藤了一、腰塚靖之、高橋徹、青柳武史、武冨紹信、山下健一郎、嶋村剛

大腸癌原発巣および肝転移巣に対する腹腔鏡下同時切除術の検討
加藤拓也、皆川のぞみ、神山俊哉、本間重紀、柴崎晋、若山顕治、折茂達也、敦賀陽介、柿坂達彦、横尾英樹、蒲池浩文、川村秀樹、高橋典彦、武冨紹信

2014.3.6-7　第50回日本腹部救急外科学会（新宿区）
抗血栓療法施行中の中等度急性胆嚢炎に対するPTGBD後待機的腹腔鏡下胆嚢摘出術
柴崎晋、戸井博史、津田一郎、中村貴久、長谷泰司、皆川のぞみ、本間重紀、川村秀樹、高橋典彦、武冨紹信

2014.3.7-8　第41回膵・膵島移植研究会（名古屋市）
高　橋　徹、Kumagai-Braesch Makiko、Ljung Karin、Holgersson Jan、Lundgren Torbjörn、Ericzon Bo-Göran、Tibell Annika：「骨髄間葉系幹細胞治療による副刺激経路遮断薬併用下同種異系膵島移植成績改善効果の検討」

青柳武史、嶋村剛、腰塚靖之、高橋徹、後藤了一、山下健一郎、鈴木友己、太田稔、古舘馨、山本真由美、武冨紹信：「膵腎同時移植後に発症した腸閉塞の一例」

2014.3.8　第90回日本小児外科学会北海道地方会（札幌市）
便秘を契機に診断された先天性肛門狭窄症における術式の検討
岡田忠雄、本多昌平、湊雅嗣、武冨紹信

短腸症候群に対して内科的・外科的治療に難渋している１幼児例
本多昌平、岡田忠雄、湊雅嗣、武冨紹信

2014.3.20-22　第86回日本胃癌学会総会（横浜市）
腹腔鏡下胃切除と開腹胃切除の長期成績の比較と適応拡大における問題点
川村秀樹、柴崎晋、皆川のぞみ、本間重紀、高橋典彦、武冨紹信、高橋周作、高橋昌宏

腹腔鏡下胃全摘術後のアルブミン製剤ルーチン投与の意義
柴崎晋、川村秀樹、皆川のぞみ、本間重紀、高橋典彦、高橋周作、高橋昌宏、武冨紹信

2014.4.3-5　第114回日本外科学会総会（京都市）

Genome-scale promoter methylation analysis s to establish a molecular-genetic marker for treatment outcome in hepatoblastomas.
Shohei Honda、Tadao Okada、Masashi Minato、Eiso Hiyama、and Akinobu Taketomi

腹腔鏡下肝葉切除における肝門部処理・肝実質切離の基本的手技の確立
神山俊哉、横尾英樹、柿坂達彦、折茂達也、若山顕治、敦賀陽介、蒲池浩文、武冨紹信

肝門部胆管癌における動脈再建症例の検討
蒲池浩文、敦賀陽介、若山顕治、折茂達也、柿坂達彦、横尾英樹、後藤了一、山下健一郎、神山俊哉、武冨紹信

大腸癌多発肝転移に対するベストな外科治療戦略
横尾英樹、神山俊哉、柿坂達彦、折茂達也、若山顕治、敦賀陽介、蒲池浩文、武冨紹信

Borderline resectable膵癌に対するゲムシタビン併用術前放射線化学療法の治療効果
敦賀陽介、蒲池浩文、若山顕治、折茂達也、柿坂達彦、横尾英樹、神山俊哉、武冨紹信

肝切除術における術前腸管処置のSSI発生に及ぼす影響
折茂達也、神山俊哉、横尾英樹、柿坂達彦、若山顕治、敦賀陽介、蒲池浩文、武冨紹信

混合型肝癌15例の臨床病理学的検討
柿坂達彦、神山俊哉、横尾英樹、折茂達也、若山顕治、敦賀陽介、蒲池浩文、武冨紹信

当科における長期成績と進行癌の経験から考える腹腔鏡下胃切除の妥当な適応と限界
川村秀樹、柴崎晋、皆川のぞみ、本間重紀、高橋典彦、武冨紹信、高橋周作、高橋昌宏

腹腔鏡下低位前方切除術～安全性と更なる低侵襲性の追及～
本間重紀、柴崎晋、皆川のぞみ、川村秀樹、高橋典彦、武冨紹信

肝細胞癌における循環腫瘍細胞ならびに骨髄腫瘍細胞と臨床病理組織学的因子の検討
皆川のぞみ、崎浜秀康、小林希、柴崎晋、若山顕治、折茂達也、柿坂達彦、敦賀陽介、本間重紀、横尾秀樹、蒲池浩文、川村秀樹、高橋典彦、神山俊哉、武冨紹信

体外式超音波検査を用いた切除可能大腸癌の術前診断の意義
松井博紀、本間重紀、柴崎晋、皆川のぞみ、川村秀樹、高橋典彦、下國達志、西田睦、武冨紹信

腹腔鏡下大腸切除後の創感染予防に対する臍部無縫合閉鎖法
谷道夫、本間重紀、柴崎晋、皆川のぞみ、川村秀樹、高橋典彦、武冨紹信

鏡視下手術の基礎技術習得にむけての当科の取り組み
宮岡陽一、柴崎晋、川村秀樹、皆川のぞみ、本間重紀、高橋典彦、武冨紹信

初発症状としてOncologic emergencyを呈した小児悪性固形腫瘍破裂例の臨床的特徴と治療法
沢田尭史、岡田忠雄、本多昌平、湊雅嗣、武冨紹信

PARP6の高メチル化は肝芽腫の新しい予後因子である
湊雅嗣、本多昌平、岡田忠雄、武冨紹信

より良い灌流保存のためのより良い単純冷保存法～重水と水素ガスの新たな可能性
深井原、石川隆壽、島田慎吾、若山顕治、山下健一郎、嶋村剛、神山俊哉、藤堂省、武冨紹信

機械灌流保存を導入したマウス肝移植モデル
藤好真人、武冨紹信

ヘリウムガスによる肝冷保存再灌流障害軽減の試み
石川隆壽、深井原、島田慎吾、若山顕治、山下健一郎、嶋村剛、神山俊哉、藤堂省、武冨紹信

肝細胞癌におけるFABP5の新規バイオマーカーとしての有用性
大畑多嘉宣、横尾英樹、神山俊哉、若山顕治、折茂達也、柿坂達彦、敦賀陽介、蒲池浩文、武冨紹信

大腸癌微小環境下におけるTumor-associated macrophages（TAMs）の機能解析
大野陽介、角田健太郎、本間重紀、川村秀樹、高橋典彦、北村秀光、武冨紹信

大腸癌におけるtumor buddingとchorionic gonadotropin-β発現の検討
小丹枝裕二、本間重紀、西原広史、川俣太、柴崎晋、皆川のぞみ、川村秀樹、高橋典彦、武冨紹信

新規免疫抑制剤NK026680とdonor-specific transfusionの併用による免疫抑制効果
江本慎、柴崎晋、長津明久、小野仁、五十嵐瑠美、後藤了一、深井原、嶋村剛、藤堂省、武冨紹信、山下健一郎

マウス肝右葉選択的経門脈膵島移植に対する上腸間膜静脈クランプによる安全性の向上
小野仁、藤好真人、水上達三、山下健一郎、武冨紹信

生体肝移植における制御性Ｔ細胞を用いた免疫寛容誘導
山下健一郎、財津雅昭、長津明久、後藤了一、大浦哲、渡辺正明、青柳武史、鈴木友己、嶋村剛、場集田寿、奥村康、藤堂省

肝細胞癌に対する分子標的治療～外科医はどう使いこなすか～
武冨紹信

siRNA導入グラフトを用いたマウス肝移植モデルにおける遺伝子発現抑制効果の検討
水上達三、藤好真人、小野仁、植木伸也、蒲池浩文、神山俊哉、武冨紹信

腫瘍血管内皮におけるCXCR7の機能解析
山田健司、間石奈湖、大賀則孝、秋山廣輔、樋田泰浩、川本泰輔、Towfik Alam Mohammad、高橋典彦、神山俊哉、樋田京子、武冨紹信

北海道における肝移植を含めた劇症肝炎治療に対する取り組み
青柳武史、嶋村剛、腰塚靖之、高橋徹、後藤了一、古舘馨、山本真由美、太田稔、山下健一郎、武冨紹信

エストロゲンレセプター陽性乳癌における血清性ホルモン濃度と臨床病理学的因子との相関
金沢亮、細田充主、山本貢、中野基一郎、武冨紹信、山下啓子

緊急手術を必要とした腹腔内リンパ管腫の治療法―特に膿瘍形成例と難治性蛋白漏出性胃腸症併発例に対して―

岡田忠雄、本多昌平、湊雅嗣、武冨紹信

2014.4.3-5　第114回日本外科学会定期学術集会（京都）
生体肝移植における制御性T細胞を用いた免疫寛容誘導（シンポジウム）
山下健一郎、財津雅昭、長津明久、後藤了一、大浦哲、渡辺正明、青柳武史、鈴木友己、嶋村剛、場集田寿、奥村康、藤堂省

新規免疫抑制剤NK026680とdonor specific transfusionの併用による免疫抑制効果
江本慎、柴崎晋、長津明久、小野仁、五十嵐瑠美、後藤了一、青柳武史、深井原、嶋村剛、藤堂省、武冨紹信、山下健一郎

抗CD80抗体、抗CD86抗体下共培養により誘導される免疫抑制性細胞の同定
長津明久、山下健一郎、江本慎、旭火華、財津雅昭、小倉正臣、小野仁、常俊雄介、後藤了一、五十嵐瑠美、場集田寿、奥村康、武冨紹信、藤堂省

2014.4.23-26　第100回消化器病学会総会（千代田区）
消化器癌内視鏡外科手術の最先端 大腸癌同時性肝転移に対する腹腔鏡下一期的肝大腸切除術
神山俊哉、柿坂達彦、若山顕治

2014.5.8-10　第51回日本小児外科学会学術集会（大阪市）
胆道閉鎖症減黄手術における術後合併症の検討と留意点：特に術後肝内胆管拡張例を除いて
岡田忠雄、本多昌平、湊雅嗣、武冨紹信

短腸症候群に対して内科的・外科的治療に難渋している２幼児例
本多昌平、岡田忠雄、湊雅嗣、武冨紹信

VPシャント機能不全による腸閉塞治療中に髄液仮性嚢胞内出血をきたし緊急手術を要した１例
本多昌平、岡田忠雄、湊雅嗣、武冨紹信

肝芽腫における新規予後予測因子としてのDNAメチル化異常の同定
湊雅嗣、本多昌平、岡田忠雄、檜山英三、武冨紹信

腹腔鏡下摘出術が有用であった遊離卵巣嚢腫（autoamputated ovarian cyst）
豊島雄二郎、岡田忠雄、本多昌平、宮城久之、湊雅嗣、近藤享史、武冨紹信

術前画像診断にて遊離副脾茎捻転が疑われた１例
加藤紘一、岡田忠雄、本多昌平、湊雅嗣、武冨紹信

拡張胆管が門脈を圧排・閉塞し門脈圧亢進症を呈した先天性胆道拡張症の１例
近藤享史、本多昌平、藤澤空彦、湊雅嗣、岡田忠雄、武冨紹信

横隔膜近傍まで口側盲端を認め診断に苦慮したGross C先天性食道閉鎖症の１例
佐戸川弥紀、湊雅嗣、近藤享史、藤澤空彦、本多昌平、長和俊、武冨紹信

胆道閉鎖症葛西手術々後に生じた肝梗塞の１例
柴田賢吾、岡田忠雄、本多昌平、湊雅嗣、武冨紹信

NSEが高値を呈した腎原発胎児型横紋筋肉腫の１例
蔵谷勇樹、岡田忠雄、本多昌平、湊雅嗣、武冨紹信

2014.5.24　北海道シーメンスフォーラム2014（札幌市）
移植医療の現状と臨床検査のかかわり
嶋村剛

2014.5.29-30　第50回日本肝臓学会総会（新宿区）
WFA+-M2BPは総合的な肝線維化マーカーとしてHCC患者の術後予後を予測する
藤好真人、深井原、横尾英樹、神山俊哉、久野敦、成松久、溝上雅史、武冨紹信

2014.6.5-6　第50回日本肝癌研究会（京都市）
大腸癌多発肝転移に対する積極的な外科治療戦略
横尾英樹、神山俊哉、柿坂達彦、折茂達也、若山顕治、敦賀陽介、蒲池浩文、武冨紹信

HBV関連肝細胞癌手術症例の術後再発に関する検討
柿坂達彦、神山俊哉、横尾英樹、折茂達也、若山顕治、敦賀陽介、蒲池浩文、武冨紹信

肝内胆管癌切除症例の予後因子、治療戦略の検討
折茂達也、神山俊哉、横尾英樹、柿坂達彦、若山顕治、敦賀陽介、蒲池浩文、武冨紹信

肝切除後TACE不能/不応再発肝細胞癌に対するアイエーコール動注＋シーケンシャル経口抗癌剤療法の試み
若山顕治、神山俊哉、横尾英樹、柿坂達彦、折茂達也、敦賀陽介、蒲池浩文、武冨紹信

当科における肝移植後肝癌再発症例の検討
腰塚靖之、高橋徹、後藤了一、青柳武史、太田稔、山下健一郎、嶋村剛、武冨紹信

2014.6.11-13　第26回日本肝胆膵外科学会学術集会（和歌山市）
HCCに対する肝移植術後管理
武冨紹信

成人間生体肝移植における術後短期の予後予測
嶋村剛、藤好真人、山下健一郎、青柳武史、後藤了一、高橋徹、腰塚靖之、神山俊哉

浸潤性膵管癌の術前治療 当科における局所進行膵癌に対する術前放射線化学療法の検討
蒲池浩文、敦賀陽介、若山顕治、折茂達也、柿坂達彦、横尾英樹、神山俊哉、武冨紹信

多発性大腸癌肝転移の治療方針
横尾英樹、神山俊哉、柿坂達彦、折茂達也、若山顕治、敦賀陽介、蒲池浩文、武冨紹信

99mTc-GSAシンチグラフィーとCTの3D fusion画像を用いた機能的肝切除率の算出
敦賀陽介、蒲池浩文、若山顕治、折茂達也、柿坂達彦、横尾英樹、神山俊哉、武冨紹信

人工血管を用いた肝切除症例の検討
折茂達也、神山俊哉、横尾英樹、柿坂達彦、若山顕治、敦賀陽介、蒲池浩文、武冨紹信

肝右葉巨大肝癌に対する、ベッセルシーリングシステムを用いた右横隔膜切除、肝右葉受動先行右系肝葉切除
若山顕治、神山俊哉、横尾英樹、柿坂達彦、折茂達也、敦賀陽介、蒲池浩文、武冨紹信

肝エキノコックス症に対する腹腔鏡下肝切除術
柿坂達彦、神山俊哉、横尾英樹、折茂達也、若山顕治、敦賀陽介、

蒲池浩文、武冨紹信

2014.6.14　第20回北海道内視鏡外科研究会（札幌市）
当科における腹腔鏡下肝外側区切除術の工夫
柿坂達彦、神山俊哉、横尾英樹、折茂達也、若山顕治、敦賀陽介、蒲池浩文、武冨紹信

当教室の後期研修医に対する初期鏡視下教育プログラムの効果
柴崎晋、川村秀樹、吉田雅、本間重紀、高橋典彦、武冨紹信

腹腔鏡下経皮的腹膜外ヘルニア閉鎖術（LPEC法）の現状と今後の課題
本多昌平、湊雅嗣、近藤享史、武冨紹信

2014.6.19-20　第79回日本インターフェロン・サイトカイン学会学術集会（札幌市）
IL-6/STAT3シグナル経路による樹状細胞の機能制御とがん免疫治療への応用（Young Investigator's award）
大野陽介、大竹淳也、金海俊、岸川拓斗、寺田聖、角田健太郎、喜田俊行、高橋典彦、武冨紹信、北村秀光

肝細胞癌におけるFABP5発現の意義
大畑多嘉宣、横尾英樹、神山俊哉、若山顕治、折茂達也、柿坂達彦、敦賀陽介、蒲池浩文、武冨紹信

2014.6.21　第25回北海道肝がん研究会（札幌市）
右心房腫瘍栓を伴う肝細胞癌に対する外科的治療
若山顕治、神山俊哉、横尾英樹、柿坂達彦、折茂達也、敦賀陽介、蒲池浩文、武冨紹信

2014.6.27　第36回日本癌局所療法研究会（八尾市）
肝細胞癌再発に対するアイエーコール動注＋経口抗癌剤療法
若山顕治、神山俊哉、横尾英樹、柿坂達彦、折茂達也、敦賀陽介、蒲池浩文、曽山武士、作原祐介、阿保大介、武冨紹信

2014.7.3-4　第32回日本肝移植研究会（新宿区）
肝細胞癌に対する肝移植適応 - 全国集計をもとに -
嶋村剛

2014.7.5　第105回日本臨床外科学会北海道支部総会（函館市）
99mTc-GSAシンチグラフィーとCTの3D fusion画像が手術時期決定に有用であった胆嚢管癌の一例
敦賀陽介、蒲池浩文、若山顕治、折茂達也、柿坂達彦、横尾英樹、神山俊哉、武冨紹信

梅種子嵌頓によりイレウスを発症した直腸癌の１例
柏倉さゆり、本間重紀、柴崎晋、吉田雅、川村秀樹、高橋典彦、武冨紹信

非整復下での待機的腹腔鏡下切除が可能であった大腸癌腸重積症の３例
柴田泰洋、本間重紀、柴崎晋、吉田雅、川村秀樹、高橋典彦、武冨紹信

下大静脈閉塞を伴った多包性エキノコックス症の１例
千田圭悟、神山俊哉、横尾英樹、柿坂達彦、折茂達也、若山顕治、加藤拓也、敦賀陽介、蒲池浩文、武冨紹信

2014.7.15-17　第69回日本消化器外科学会総会（郡山市）
データベース報告：NCDデータに基づいた肝切除術におけるリスク評価
武冨紹信、宮田裕章、柿坂達彦、横尾英樹、友滝愛、今野弘之、後藤満一、若林剛、森正樹

肝細胞癌における門脈侵襲・予後・再発予測因子としての腫瘍マーカー：AFPとPIVKA-IIの積＝AP-factorの検討
神山俊哉、横尾英樹、柿坂達彦、折茂達也、若山顕治、敦賀陽介、蒲池浩文、武冨紹信

血管合併切除を要する局所進行肝門部胆管癌における血管確保手技
蒲池浩文、敦賀陽介、若山顕治、折茂達也、柿坂達彦、横尾英樹、山下健一郎、神山俊哉、武冨紹信

大腸癌多発肝転移に対する外科切除のタイミング
横尾英樹、神山俊哉、柿坂達彦、折茂達也、若山顕治、敦賀陽介、蒲池浩文、武冨紹信

HBV関連肝細胞癌手術症例の術後再発に関する検討
柿坂達彦、神山俊哉、横尾英樹、折茂達也、若山顕治、敦賀陽介、蒲池浩文、武冨紹信

99mTc-GSAシンチグラフィーとCTの3D fusion画像を用いた残肝機能予測
敦賀陽介、蒲池浩文、若山顕治、折茂達也、柿坂達彦、横尾英樹、神山俊哉、武冨紹信

ICG蛍光法とニードルガイディングテクニックを併用した肝亜区域切除術
折茂達也、神山俊哉、横尾英樹、柿坂達彦、若山顕治、敦賀陽介、蒲池浩文、武冨紹信

99mTc-GSAシンチグラフィを用いた肝障害度別換算ICGR15による肝予備能の評価
若山顕治、神山俊哉、横尾英樹、柿坂達彦、折茂達也、敦賀陽介、蒲池浩文、武冨紹信

直腸癌局所再発に対する外科治療
高橋典彦、柴崎晋、皆川のぞみ、本間重紀、川村秀樹、武冨紹信

点滴挿入部の各種ドレッシング培養から見たグラム陰性桿菌カテーテル由来血流感染のリスクと対策
川村秀樹、柴崎晋、皆川のぞみ、本間重紀、高橋典彦、武冨紹信、高橋周作、石津寛之、高橋昌宏

人工肛門造設予定部を利用した単孔式腹腔鏡下直腸切断術
本間重紀、柴崎晋、皆川のぞみ、川村秀樹、高橋典彦、武冨紹信

80歳以上の高齢者胃癌に対する腹腔鏡下胃切除術の有用性
柴崎晋、川村秀樹、皆川のぞみ、本間重紀、高橋典彦、高橋周作、高橋昌宏、武冨紹信

高リスク大腸癌患者に対する腹腔鏡下大腸切除術
皆川のぞみ、本間重紀、柴崎晋、川村秀樹、高橋典彦、武冨紹信

体外式超音波検査による大腸癌術前診断
正司裕隆、本間重紀、柴崎晋、皆川のぞみ、川村秀樹、高橋典彦、下國達志、西田睦、武冨紹信

臍部無縫合閉鎖による腹腔鏡下大腸切除後創感染予防
加藤紘一、本間重紀、柴崎晋、皆川のぞみ、川村秀樹、高橋典彦、武冨紹信

腹腔鏡下脾摘出術を施行した脾Sclerosing angiomatoid nodular transformationの一例
太田拓児、坂本譲、梅本浩平、片山知也、桑原博昭、今裕史、田村元、小池雅彦、赤坂嘉宣

2014.8.22　第27回小切開・鏡視外科学会（函館市）
腹腔鏡下肝切除の完全鏡視下手術までの軌跡―Bridgeとしての小切開・鏡視補助下手術を経て―
神山俊哉

単孔式大腸切除術における臍部創感染予防
吉田雅、本間重紀、柴崎晋、川村秀樹、高橋典彦、武冨紹信

腹腔内腫大リンパ節生検での術式選択―臍小切開生検と腹腔鏡下生検
江本慎、倉内宣明、砂原正男、常俊雄介、笠島浩行、原豊、鈴木伸作、遠山茂、木村純

2014.8.23　第16回北海道肝イメージ研究会（札幌市）
特異な画像所見を示し診断に苦慮した肝内胆管癌再発の１例
若山顕治、神山俊哉、横尾英樹、柿坂達彦、折茂達也、敦賀陽介、蒲池浩文、武冨紹信

2014.8.27　第14回肝不全懇話会（札幌市）
生体肝移植へのスイッチを検討中に脳死肝移植を施行できたPBCの１症例
腰塚靖之、川村典生、高橋徹、後藤了一、鈴木友己、山下健一郎、武冨紹信、嶋村剛

2014.8.28-30　第52回日本癌治療学会学術集会（横浜市）
当科における肝細胞癌に対する腹腔鏡下肝切除術の成績
柿坂達彦、神山俊哉、横尾英樹、折茂達也、若山顕治、敦賀陽介、蒲池浩文、武冨紹信

肝胆膵癌の標準治療
武冨紹信

ソナゾイドを用いた造影超音波によるセンチネルリンパ節の同定及び良悪性診断の検討
松澤文彦、永生高広、阿部厚憲、鈴木崇史、濱口純、尾本きよか、佐藤麻美、大村雅子、高田裕美子、藤部綾子、竹田千恵、加賀輝美、田村悦哉、及能健一

2014.9.6　第101回北海道外科学会（札幌市）
巨大卵巣転移を伴った直腸癌の一切除例
稲葉洋文、本間重紀、吉田雅、柴崎晋、川村秀樹、高橋典彦、武冨紹信

高度肺動脈狭窄症合併Alagille症候群に対して生体肝移植術を施行した１例
吉田祐一、高橋徹、腰塚靖之、後藤了一、青柳武史、小杉山清隆、武田充人、山下健一郎、嶋村剛、武冨紹信

S8c肝細胞癌に対する腹腔鏡下肝切除の工夫
坂本聡大、神山俊哉、横尾英樹、柿坂達彦、折茂達也、若山顕治、加藤拓也、敦賀陽介、蒲池浩文、武冨紹信

下膵十二指腸動脈瘤に正中弓状靭帯症候群を合併した２例の治療経験
加藤拓也、蒲池浩文、敦賀陽介、若山顕治、折茂達也、柿坂達彦、横尾英樹、神山俊哉、若狭哲、大岡智学、阿保大介、作原祐介、武冨紹信

局所コントロール不能となり準緊急にて乳房切除術を施行したHER2陽性局所進行乳癌の１例
石川倫啓、市之川一臣、石田直子、山本貢、細田充主、菅野宏美、武冨紹信、山下啓子

2014.9.6-7　第115回日本消化器病学会北海道支部例会（札幌市）
胃大腸重複癌に対してReduced port surgeryにより同時切除を施行し得た3例
太田拓児、川村秀樹、本間重紀、吉田雅、柴崎晋、高橋典彦、武冨紹信

肝細胞癌切除後再発におけるソラフェニブ治療の有効性
横尾英樹、神山俊哉、柿坂達彦、折茂達也、若山顕治、敦賀陽介、蒲池浩文、武冨紹信

2014.9.6　第91回日本小児外科学会北海道地方会（札幌市）
治療に難渋しているHirschsprung病術後腸閉塞の一例
藤澤空彦、本多昌平、湊雅嗣、近藤享史、岡田忠雄、武冨紹信

短腸症候群の１幼児例　～外科的治療の次の一手は？～
近藤享史、本多昌平、藤澤空彦、湊雅嗣、岡田忠雄、武冨紹信

2014.9.10-12　第50回日本移植学会総会（新宿区）
当科における肝移植後C型肝炎再発例の治療成績の検討
後藤了一、山下健一郎、腰塚靖之、高橋徹、青柳武史、太田稔、夏井坂光輝、小川浩司、中馬誠、鈴木友己、神山俊哉、坂本直哉、武冨紹信、嶋村剛

当科における肝移植後de novo悪性腫瘍の検討
腰塚靖之、高橋徹、後藤了一、青柳武史、柏浦愛美、山本真由美、岡本花織、太田稔、山下健一郎、武冨紹信、嶋村剛

当院での血管グラフトによる門脈再建を伴った肝移植症例の検討
谷道夫、腰塚靖之、川村典生、高橋徹、後藤了一、青柳武史、柏浦愛美、山本真由美、岡本花織、太田稔、山下健一郎、武冨紹信、嶋村剛

マウス肝移植における酸素化機械灌流法の導入と非冷温保存の実現
藤好真人、武冨紹信

プロテアソーム阻害薬ボルテゾミブのマウス膵島移植における早期グラフト障害抑制効果
小野仁、旭火華、腰塚靖之、渡辺正明、江本慎、深井原、嶋村剛、武冨紹信、藤堂省、山下健一郎

NK026680とdonor-specific transfusionによる免疫修飾効果
江本慎、柴崎晋、長津明久、小野仁、後藤了一、青柳武史、深井原、武冨紹信、嶋村剛、藤堂省、山下健一郎

小児肝移植後のグラフト線維化におけるリンパ球クロスマッチ検査の意義
青柳武史、山下健一郎、腰塚靖之、高橋徹、後藤了一、畑中佳奈子、米岡麻記、武冨紹信、嶋村剛

2014.9.13　第35回日本大腸肛門病学会　北海道地方会（札幌市）
Conversion therapyによりR0切除しえたAFP産生大腸癌同時性肝転移の一例
吉田祐一、本間重紀、柴崎晋、吉田雅、川村秀樹、高橋典彦、若山顕治、折茂達也、柿坂達彦、敦賀陽介、横尾英樹、蒲池浩文、神山俊哉、武冨紹信

2014.9.20　第６回日本Acute Care Surgery学会学術集会（青森市）
巨大肝細胞癌手術症例の治療成績
柿坂達彦、神山俊哉、横尾英樹、折茂達也、若山顕治、敦賀陽介、蒲池浩文、武冨紹信

抗血栓療法患者の中等度急性胆嚢炎に対するPTGBD後待機的腹腔鏡下胆嚢摘出術の有効性
柴崎晋、高橋典彦、吉田雅、本間重紀、川村秀樹、高橋典彦、武冨紹信

2014.9.25-27　第73回日本癌学会学術総会（横浜市）
DNAメチル化解析による肝芽腫の新規予後予測マーカーの確立
本多昌平、湊雅嗣、鈴木拓、春田雅之、金子安比古、檜山英三、武冨紹信

IL-6/STAT3シグナル経路は樹状細胞機能制御を介して癌微小環境下におけるTh1細胞の活性化能を低下させる。
大野陽介、北村秀光、大竹淳矢、金海俊、寺田聖、角田健太郎、喜多俊行、高橋典彦、武冨紹信

肝細胞癌におけるFatty Acid Binding Protein5発現の臨床的意義
大畑多嘉宣、横尾英樹、神山俊哉、武冨紹信

肝細胞癌におけるAPC-binding protein EB1の予後・再発予測因子としての有用性
相山健、折茂達也、横尾英樹、大畑多嘉宣、畑中佳奈子、畑中豊、松野吉宏、神山俊哉、武冨紹信

CXCR7を標的とした新規血管新生阻害療法の可能性
山田健司、間石奈湖、秋山廣輔、大賀則孝、川本泰輔、進藤正信、高橋典彦、神山俊哉、樋田泰浩、武冨紹信、樋田京子

2014.10.2-4　第27回日本内視鏡外科学会総会（盛岡市）
当科における腹腔鏡下胃全摘の手順・再建と成績
川村秀樹、柴崎晋、吉田雅、本間重紀、高橋典彦、武冨紹信、高橋周作、高橋昌宏

直腸癌に対するReduced port surgery ～周術期および腫瘍学的安全性の検討～
本間重紀、吉田雅、柴崎晋、川村秀樹、高橋典彦、武冨紹信

当教室の後期研修医に対する初期鏡視下教育プログラム
柴崎晋、川村秀樹、吉田雅、本間重紀、高橋典彦、武冨紹信

単孔式大腸切除術の臍部無縫合閉鎖法による創感染予防
吉田雅、本間重紀、柴崎晋、川村秀樹、高橋典彦、武冨紹信

大腸癌による成人腸重積症に対し非整復下での待機的腹腔鏡下切除が可能であった３例
大平将史、本間重紀、柴崎晋、吉田雅、川村秀樹、高橋典彦、武冨紹信

胃･大腸癌重複癌に対してReduced port surgery（Dual-port法）により同時切除を施行した３例
川俣太、川村秀樹、本間重紀、吉田雅、柴崎晋、高橋典彦、武冨紹信

待機的腹腔鏡下手術が可能であった梅種子嵌頓による直腸癌イレウスの１例
近藤享史、本間重紀、柴崎晋、吉田雅、川村秀樹、高橋典彦、武冨紹信

2014.10.4　第44回日本超音波医学会　北海道地方会(札幌市)
体外式腹部超音波検査による結腸癌壁深達度診断の試み
深作慶友、本間重紀、柴崎晋、西田睦、吉田雅、川村秀樹、高橋典彦、武冨紹信

2014.10.11　第34回北海道ストーマリハビリテーション研究会学術集会（札幌市）
ストーマの変形によって発見された大腸癌の一例
安藤貴士、佐野修平、近藤享史、吉田雅、柴崎晋、本間重紀、川村秀樹、高橋典彦、武冨紹信

2014.10.17-19　第52回日本人工臓器学会（札幌市）
急性肝不全症に対する肝移植の適応とタイミング
武冨紹信

2014.10.23-26　JDDW2014（第18回日本肝臓学会大会）(神戸市)
NBNC肝がんの諸問題 非B非C型肝細胞癌切除例の検討
横尾英樹、神山俊哉、武冨紹信

2014.10.23-26　JDDW2014（第12回日本消化器外科学会大会）(神戸市)
The causes of graft loss after liver transplantation.
Tohru Takahashi、Kenichiro Yamashita、Tsuyoshi Shimamura

腹腔鏡下残胃全摘の検討
川村秀樹、柴崎晋、皆川のぞみ、本間重紀、高橋典彦、高橋周作、高橋昌宏、武冨紹信

高齢者胃癌に対する腹腔鏡下胃切除術の有用性に関する検討
柴崎晋、川村秀樹、皆川のぞみ、本間重紀、高橋典彦、高橋周作、高橋昌宏、武冨紹信

体外式超音波検査を用いた大腸癌術前診断の試み
深作慶友、本間重紀、柴崎晋、皆川のぞみ、川村秀樹、高橋典彦、下國達志、西田睦、武冨紹信

腸重積を伴う大腸癌に対し整復せずに待機的腹腔鏡下切除が可能であった３例
大平将史、本間重紀、柴崎晋、皆川のぞみ、川村秀樹、高橋典彦、武冨紹信

肝細胞癌におけるFABP5発現の意義
大畑多嘉宣、横尾英樹、神山俊哉、若山顕治、折茂達也、柿坂達彦、敦賀陽介、蒲池浩文、武冨紹信

2014.10.25　北海道医学会市民公開シンポジウム（札幌市）
ロボット支援下腹腔鏡手術の現状と将来の展望 大腸癌（特に直腸癌について）
本間重紀、吉田雅、柴崎晋、川村秀樹、高橋典彦、武冨紹信

2014.11.7-8　第69回日本大腸肛門病学会学術集会（横浜）
重症全身合併症を有する症例に於ける腹腔鏡下大腸切除の安全性に関する検討
市川伸樹、本間重紀、脇坂和貴、武冨紹信

長期生存しえた直腸癌が原因のフルニエ症候群の１例
石川隆壽、本間重紀、柴崎晋、川村秀樹、高橋典彦、武冨紹信

大腸癌手術検体を用いたヒト化担癌マウスの作成と基礎研究応用への可能性
大野陽介、吉田雅、柴崎晋、本間重紀、川村秀樹、高橋典彦、武冨紹信

大腸癌におけるβ-hCG発現は癌細胞の間質やリンパ管への浸潤に関与する
小丹枝裕二、本間重紀、西原広史、川俣太、吉田雅、柴崎晋、川村秀樹、高橋典彦、武冨紹信

2014.11.13-14　第25回日本消化器癌発生学会総会（福岡市）
Ohata T、Yokoo H、Kamiyama T、Wakayama K、Orimo T、Kakisaka T、Tsuruga Y、Kamachi H、Taketomi A. Fatty Acid Binding Protein 5 promotes tumor progression through epithelial-mesenchymal transition inhepatocellular carcinoma

IL-6シグナル経路による樹状細胞の機能制御と癌細胞の免疫逃避
大野陽介、北村秀光、大竹淳也、金海俊、吉田雅、柴崎晋、本間重紀、川村秀樹、高橋典彦、武冨紹信

B-hCG expression in colorectal cancer correlates with tumor budding
小丹枝裕二、本間重紀、西原広史、川俣太、吉田雅、柴崎晋、川村秀樹、高橋典彦、武冨紹信

OCIAD2の高メチル化は肝芽腫の新しい予後因子である
湊雅嗣、本多昌平、岡田忠雄、檜山英三、鈴木拓、武冨紹信

肝細胞癌におけるAdenomatous polyposis coli結合蛋白EB1の予後・再発予測因子としての有用性
相山健、横尾英樹、折茂達也、大畑多嘉宣、畑中佳奈子、畑中豊、松野吉宏、若山顕治、柿坂達彦、敦賀陽介、蒲池浩文、神山俊哉、武冨紹信

局所進行膵癌に対する術前補助化学放射線療法後の切除検体における癌幹細胞マーカーの免疫組織化学的解析
水上達三、蒲池浩文、三橋智子、敦賀陽介、畑中豊、神山俊哉、松野吉広、武冨紹信

腫瘍血管内皮マーカー CXCR7の腫瘍血管内皮における機能解析
山田健司、間石奈湖、大賀則孝、秋山廣輔、樋田泰浩、川本泰輔、高橋典彦、神山俊哉、樋田京子、武冨紹信

大腸癌浸潤・転移におけるchorionic gonadotropin-βの機能解析とその臨床応用
川俣太、本間重紀、小丹枝裕二、西原広史、吉田雅、柴崎晋、川村秀樹、高橋典彦、武冨紹信

2014.11.15　北海道ロボット支援鏡視下手術研究会第４回学術集会（札幌市）
大腸癌に対するロボット支援手術の現状
本間重紀、吉田雅、柴崎晋、川村秀樹、高橋典彦、武冨紹信

2014.11.19　第８回肝臓内視鏡外科研究会（郡山市）
当科における腹腔鏡下肝外側区切除術の工夫
柿坂達彦、神山俊哉、横尾英樹、折茂達也、若山顕治、敦賀陽介、蒲池浩文、武冨紹信

2014.11.20-22　第76回日本臨床外科学会総会（郡山市）
腹腔鏡下大腸切除術における臍部無縫合閉鎖法による創感染予防効果
高橋典彦、本間重紀、柴崎晋、吉田雅、川村秀樹、武冨紹信

腹腔鏡下胃全摘術後のV-Loc™180を使用した食道空腸吻合
柴崎晋、川村秀樹、吉田雅、本間重紀、高橋典彦、高橋周作、高橋昌宏、武冨紹信

高度狭窄進行大腸癌に対する術前成分栄養剤投与の検討
吉田雅、本間重紀、柴崎晋、川村秀樹、高橋典彦、武冨紹信

急速増大した胃脾間膜原発デスモイド腫瘍に対し腹腔鏡補助下に摘出した１例
谷道夫、川村秀樹、柴崎晋、吉田雅、皆川のぞみ、本間重紀、高橋典彦、武冨紹信

Conversion therapyによりR0切除しえたAFP産生大腸癌同時性肝転移の一例
沢田尭史、本間重紀、柴崎晋、吉田雅、川村秀樹、高橋典彦、若山顕治、折茂達也、柿坂達彦、敦賀陽介、横尾英樹、蒲池浩文、神山俊哉、武冨紹信

FDG-PETが診断に有用であったMuir-Torre症候群の２例
加藤拓也、本間重紀、柴崎晋、吉田雅、川村秀樹、高橋典彦、秦洋郎、野田実香、武冨紹信

梅種子嵌頓により発症した直腸癌イレウスの１例
柏倉さゆり、本間重紀、柴崎晋、吉田雅、川村秀樹、高橋典彦、武冨紹信

抗凝固剤過量投与に起因した非外傷性腸間膜血腫の１例
松井博紀、本間重紀、柴崎晋、吉田雅、皆川のぞみ、川村秀樹、高橋典彦、武冨紹信

臍静脈Patch graft再建により切除し得た下大静脈原発平滑筋肉腫の一例
深作慶友、神山俊哉、若山顕治、折茂達也、敦賀陽介、柿坂達彦、横尾英樹、蒲池浩文、武冨紹信

2014.11.22-25　第61回日本臨床検査医学会学術集会（福岡市）
肝臓外科領域における血清WFA+-M2BPの有用性
藤好真人、武冨紹信

2014.11.27　北海道大学大学院医学研究科新任教授セミナー（札幌）
肝移植における免疫抑制療法 ―免疫抑制から免疫寛容へ ―（講演）
山下健一郎

2014.11.29　第106回日本臨床外科学会北海道支部例会（札幌市）
肝切除術における術前腸管処置のSSI発生に及ぼす影響についての検討
折茂達也、神山俊哉、横尾英樹、柿坂達彦、若山顕治、敦賀陽介、蒲池浩文、武冨紹信

胆嚢摘出から26年後に発症した遺残胆嚢管癌の１例
坂本聡大、蒲池浩文、敦賀陽介、若山顕治、折茂達也、柿坂達彦、横尾英樹、神山俊哉、武冨紹信

上腹部を占拠する巨大肝血管腫の一切除例
千田圭悟、神山俊哉、横尾英樹、柿坂達彦、折茂達也、若山顕治、敦賀陽介、蒲池浩文、武冨紹信

外傷後短腸症候群により高度栄養障害をきたしている胃癌患者の１手術例
近藤享史、川村秀樹、柴崎晋、吉田雅、本間重紀、高橋典彦、武冨紹信

不安定狭心症を合併した進行大腸癌に対し冠血行再建を先行した２切除例
吉田祐一、本間重紀、柴崎晋、吉田雅、川村秀樹、高橋典彦、松居喜郎、武冨紹信

家族性アミロイドポリニューロパチー症例を2ndドナーとしたドミノ肝移植における手術手技
志智俊介、腰塚靖之、川村典生、高橋徹、後藤了一、山下健一郎、武冨紹信、嶋村剛

2014.12.7　日本小児科学会北海道地方会第291回例会(札幌市)
腹腔鏡下経皮的腹膜外ヘルニア閉鎖術（LPEC法）の現状と問題点
本多昌平、藤澤空彦、湊雅嗣、武冨紹信

《学会発表（国際学会)》

2014.1.23-26　14th Annual State of the Art Winter Symposium of the American Society of Transplant Surgeons (Miami)
Low Disease Recurrence Rates after Liver Transplantation (OLT) for Non-Alcoholic Steatohepatitis (NASH). (Poster)
Kawamura N、Nazzal M、El-Gazzaz G、Spaggiari M、Fujiki M、Diago Uso T、Aucejo F、Hashimoto K、Quintini C、Winans C、Fujiwara S、Eghtesad B、Miller C、Fung J、Kelly D.

2014.3.14-15　The 1st International Workshop for Clinical Tolerance (Boston)
A Clinical Trial of Regulatory T cell-based Immunotherapy for Tolerance Induction in Living Donor Liver Transplantation. “Invited speaker”.
Yamashita K and Todo S.

2014.4.5-9　American Association for Cancer Research Annual Meeting 2014 (San Diego)
IL-6/STAT3-dependent immunosuppressive function of tumor infiltrating dendritic cells in colorectal cancer. (Poster)
Yosuke Ono、Jyunya Ohtake、Shun Kaneumi、Takuto Kishikawa、Satoshi Terada、Kentaro Sumida、Kazutaka Masuko、Toshiyuki Kita、Norihiko Takahashi、Akinobu Taketomi、Hidemitsu Kitamura

2014.4.11-13　The 12th Congress of the International Society for Experimental Microsurgery (Kyoto)
A mouse model of liver transplantation after sub-normothermic oxygenated machine perfusion. (Oral presentation)
Masato Fujiyoshi、Akinobu Taketomi

Portal venous pressure modulation by temporal SMV ligation in mouse cell transplantation model. (Poster)
Hitoshi Ono、Masato Fujiyoshi、Akinobu Taketomi

2014.5.30-6.4　2014 American Society of Clinical Oncology Annual Meeting (Chicago)
A pilot study for cellular detection of circulating tumor cells and disseminated tumor cells of patients with hepatocellular carcinoma. (Poster)
Nozomi Minagawa、Hideyasu Sakihama、Nozomi Kobayashi、Susumu Shibasaki、Kenji Wakayama、Tatsuya Orimo、Kakisaka Tatsuhiko、Tsuruga Yosuke、Shigenori Homma、Yokoo Hideki、Kamachi Hirofumi、Norihiko Takahashi、Toshiya Kamiyama、Akinobu Taketomi

Overexpression of Fatty Acid Binding Protein 5 promotes tumorigenesis in hepatocellular carcinoma. (Poster)
Takanori Ohata、Hideki Yokoo、Toshiya Kamiyama、Kenji Wakayama、Tatsuya Orimo、Tatsuhiko Kakisaka、Yosuke Tsuruga、Hirofumi Kamachi、Akinobu Taketomi

2014.6.4-7　The 2014 Joint International Congress of ILTS、ELITA & LICAGE (London)
Preoperative Prediction of Short-Term Prognosis after Adult-to-Adult Living Donor Liver Transplantation: A Way to Zero-Mortality. (Poster)
Tsuyoshi Shimamura、Masato Fujiyoshi、Tomomi Suzuki、Kenichiro Yamashita、Takeshi Aoyagi、Ryoichi Goto、Tohru Takahashi、Yasuyuki Koshizuka、Masahiko Taniguchi、Hiroyuki Furukawa、Satoru Todo.

Successful Withdrawal of Immunosuppression by a Cell Therapy Using Donor Ag-pulsed Tregs in Living Donor Liver Transplantation: An Update on Clinical Trial. “Plenary session”.
Yamashita K、Goto R、Zaitsu M、Nagatsu A、Oura T、Watanabe M、Aoyagi T、Suzuki T、Shimamura T、Kamiyama T、Sato N、Sugita J、Hatanaka K、Bashuda H、Okumura K、Todo S.

2014.6.25-28　The 14th World Congress of Endoscopic Surgery & The 22nd Congress of the European Association of Endoscopic Surgery (Paris)
Two Cases of Laparoscopic Gastrectomy After Coronary Artery Bypass Grafting Using The Right Gastroepiploic Artery. (Poster)
Hideki Kawamura、Susumu Shibasaki、Nozomi Minagawa、Shigenori Homma、Norihiko Takahashi、Masahiro Takahashi、Akinobu Taketomi

Single Port Laparoscopy-Assisted Abdomino-Perineal Resection Using the Planned Site of Stoma. (Poster)
Shigenori Homma、Susumu Shibasaki、Nozomi Minagawa、Hideki Kawamura、Norihiko Takahashi、Akinobu Taketomi

The Efficacy of Umbilical Closure without Epidermal-Suturing on Surgical Site Infections After Laparoscopic Colorectal Surgery. (Poster)
Susumu Shibasaki、Shigenori Homma、Nozomi Minagawa、Hideki Kawamura、Norihiko Takahashi、Akinobu Taketomi

2014.6.25-28　16th World Congress on Gastrointestinal Cancer (Barcelona)
Safety analysis of FOLFOX as adjuvant chemotherapy for stage III colon cancer in North Japan multicenter phase II study (NORTH/HGCSG1003). (Poster)
Norihiko Takahashi、Satoshi Yuki、Hiraku Fukushima、Toshiaki Shichinohe、Takahide Sasaki、Takaya Kusumi、Fumitaka Nakamura、Takuto Miyajima、Ichiro Iwanaga、Kazuteru Hatanaka、Kazuyoshi Oomori、Kazuhito Misawa、Naoto Senmaru、Kazuhiro Iwai、Masahiko Koike、Toshiki Shinohara、Tsuyoshi Fukushima、Koichi Ohno、Miki Tateyama、Naoki Nishimoto、Youichi M. Ito、Yoshito Komatsu.

2014.7.26-31　World Transplant Congress 2014 (25th International Congress of the Transplantation Society) (San Franciso)
A Real-time Immunological Monitoring in Living Related Liver Transplant Recipients. (Poster)
Goto R、Zaitsu M、Oura T、Wakayama K、Tsunetoshi Y、Shibasaki S、Nagatsu A、Emoto S、Igarashi R、Aoyagi T、Suzuki T、Shimamura T、Todo S、Yamashita K.

Liver Transplantation Using Pediatric Organ Donation After Circulatory Death - An Analysis of the National Registry. (Oral presentation)
El-Gazzaz G、Schold J、Nazzal M、Kawamura N、Spaggiari M、Hashimoto K、Quintini C、Aucejo F、Kelly D、Fujiki M、Winans C、Diago Uso T、Miller C、Fung J、Eghtesad B.

Inducion of Operational Tolerance by a Cell Therapy using Donor Ag-pulsed Tregs in Living Donor Liver Transplantation. "Plenary session"
Yamashita K、Goto R、Zaitsu M、Nagatsu A、Oura T、Watanabe M、Aoyagi T、Suzuki T、Shimamura T、Kamiyama T、Sato N、Sugita J、Hatanaka K、Demetris AJ、Bashuda H、Okumura K、Todo S.

Immunomodulation induced by a novel immunosuppressant, NK026680 plus donor specific transfusion permits a long-term cardiac allograft survival in mice. "Poster session"
Emoto S、Goto R、Shibasaki S、Nagatsu A、Ono H、Igarashi R、Aoyagi T、Fukai M、Shimamura T、Saiga K、Taketomi A、Todo S、Yamashita K.

2014.9.5-7　ILCA 2014 International Liver Cancer Association 8th Annual Conference (Kyoto)
Fatty Acid Binding Protein 5 indicates poor prognosis through epithelial-mesenchymal transition in hepatocellular carcinoma. (Poster)
Takanori Ohata、Hideki Yokoo、Toshiya Kamiyama、Kenji Wakayama、Tatsuya Orimo、Tatsuhiko Kakisaka、Yosuke Tsuruga、Hirofumi Kamachi、Akinobu Taketomi

3rd International Conference on IMMUNE TOLERANCE 2014 28-30 September Amsterdam、The Netherlands
Yamashita K、Goto R、Zaitsu M、Nagatsu A、Oura T、Watanabe M、Aoyagi T、Suzuki T、Shimamura T、Kamiyama T、Sato N、Sugita J、Hatanaka K、A.J.Demetris、Bashuda H、Okumura K、Todo S. A clinical trial of cell-therapy based on donor antigen-pulsed regulatory T cells for induction of operational tolerance in living donor liver transplantation

2014.9.28-30　The 3rd International Conference on Immune Tolerance 2014 (Amsterdam)
A clinical trial of cell-therapy based on donor antigen-pulsed regulatory T cells for induction of operational tolerance in living donor liver transplantation.
Yamashita K、Goto R、Zaitsu M、Nagatsu A、Oura T、Watanabe M、Aoyagi T、Suzuki T、Shimamura T、Kamiyama T、Sato N、Sugita J、Hatanaka K、Demetris AJ、Bashuda H、Okumura K、Todo S.

2014.10.4-6　2nd International Consensus Conference on Laparoscopic Liver Resection (Morioka)
Laparoscopic hepatectomy in Hokkaido University Hospital.
Toshiya Kamiyama、Tatsuhiko Kakisaka、Tatsuya Orimo、Kenji Wakayama、Hideki Yokoo、Yosuke Tsuruga、Hirofumi Kamachi、Akinobu Taketomi

2014.11.7-11　AASLD Liver Meeting 2014 (Boston)
Sub-normothermic machine perfusion for graft selection and therapies in a mouse liver transplantation model. (Oral presentation)
Masato Fujiyoshi、Akinobu Taketomi (AASLD Liver Transplant and Hepatobiliary Surgery Fellow Award 2014)

Non-alcoholic fatty liver disease (NAFLD) recurrence after liver transplant (OLT) for non-alcoholic steatohepatitis (NASH). (Poster)
Kawamura N、Nazzal M、El-Gazzaz G、Spaggiari M、Fujiki M、Diago Uso T、Aucejo F、Hashimoto K、Quintini C、Winans C、Eghtesad B、Miller C、Fung J、Alkhouri N、Kelly D.

Fatty Acid Binding Protein 5 promotes tumor progression through epithelial-mesenchymal transition in hepatocellular carcinoma. (Poster)
Takanori Ohata、Hideki Yokoo、Toshiya Kamiyama、Akinobu Taketomi

Adenomatous polyposis coli-binding protein EB1 as an important predictive factor for the prognosis and recurrence in hepatocellular carcinoma. (Poster)
Takeshi Aiyama、Tatsuya Orimo、Hideki Yokoo、Takanori Ohata、Kanako Hatanaka、Yutaka Hatanaka、Yoshihiro Matsuno、Kenji Wakayama、Tatsuhiko Kakisaka、Yosuke Tsuruga、Hirofumi Kamachi、Toshiya Kamiyama、Akinobu Taketomi

2014年論文一覧

《論文発表》
Nakahashi S, Furukawa H, Shimamura T, Todo S, Gando S. APRV in patients with atelectasis after liver transplantation. Anaesth Intensive Care 2014: 42(1):138-40.

Kamiyama T, Tahara M, Nakanishi K, Yokoo H, Kamachi H, Kakisaka T, Tsuruga Y, Matsushita M, Todo S. Long-term outcome of laparoscopic hepatectomy in patients with hepatocellular carcinoma. Hepatogastroenterology 2014:61(130):405-9.

Noguchi K, Kawamura H, Ishizu H, Okada K. Dramatic resolution of bullous pemphigoid after surgery for gastric cancer: A case report. Int J Surg Case Rep 2014;5(4):212-4.

Honda S, Okada T, Miyagi H, Minato M, Taketomi A. High drain amylase and lipase values predict post-operative pancreatitis for choledochal cyst. Afr J Paediatr Surg 2014;11(2):124-7.

Shibasaki S, Takahashi N, Toi H, Tsuda I, Nakamura T, Hase T, Minagawa N, Homma S, Kawamura H, Taketomi A. Percutaneous transhepatic gallbladder drainage followed by elective laparoscopic cholecystectomy in patients with moderate acute cholecystitis under antithrombotic therapy. J Hepatobiliary Pancreat Sci 2014;21(5):335-42.

Kawamura H, Takahashi N, Tahara M, Takahashi M, Taketomi A. Laparoscopic gastrectomy after coronary artery bypass grafting using the right gastroepiploic artery: a report of two cases. Asian journal of

endoscopic surgery 2014:7(3):251-255.

Kakisaka T, Kamiyama T, Yokoo H, Orimo T, Wakayama K, Tsuruga Y, Kamachi H, Harada T, Kato F, Yamada Y, Mitsuhashi T, Taketomi A. Hand-assisted laparoscopic splenectomy for sclerosing angiomatoid nodular transformation of the spleen complicated by chronic disseminated intravascular coagulation: a case report. Asian J Endosc Surg 2014; 7(3):275-8.

Oura T, Yamashita K, Suzuki T, Watanabe M, Hirokata G, Wakayama K, Taniguchi M, Shimamura T, Furukawa H, Todo S. A technique for orthotopic liver transplantation in cynomolgus monkeys. Transplantation 2014; 98(6): 58-60.

Mizukami T, Kamachi H, Mitsuhashi T, Tsuruga Y, Hatanaka Y, Kamiyama T, Matsuno Y, Taketomi A. Immunohistochemical analysis of cancer stem cell markers in pancreatic adenocarcinoma patients after neoadjuvant chemoradiotherapy. BMC Cancer 2014 Sep;21;14:687.

Fujisawa S, Muraji T, Sakamoto N, Hosaka N, Matsuda S, Kawakami H, Hirai M, Yanai T. Positive C4d staining of the portal vein endothelium in the liver of patients with biliary atresia: A role of humoral immunity in ongoing liver fibrosis. Pediatr Surg Int 2014:30(9):877-81.

Kawamura H, Takahashi N, Homma S, Minagawa N, Shibasaki S, Takahashi M, Taketomi A. Assessment of Postoperative Symptoms after Laparoscopy-assisted Distal Gastrectomy for Stage I Gastric Cancer. International Surgery 2014 Sep-Oct;99(5):645-9.

Kawamata F, Homma S, Minagawa N, Kawamura H, Takahashi N, Taketomi A. Comparison of single-incision plus one additional port laparoscopy-assisted anterior resection with conventional laparoscopy-assisted anterior resection for rectal cancer. World J Surg. 2014 Oct;38(10):2716-23.

Kawamura H, Takahashi N, Takahashi M, Taketomi A. The difference of microorganisms of injection site covering various dressings –inspection of a risk of catheter-related blood stream infection caused by gram negative bacilli. Surgery Today 2014:44(12): 2339-2344.

Asahi Y, Kamiyama T, Nakanishi K, Yokoo H, Tahara M, Usui A, Funakoshi T, Sato M, Sasaki A, Matsuno Y, Taketomi A, Todo S. Chondroma of the diaphragm mimicking a giant liver tumor with calcification: report of a case. Surg Today 2014;44(12):2361-5.

Orimo T, Kamiyama T, Yokoo H, Kakisaka T, Wakayama K, Tsuruga Y, Kamachi H, Taketomi A. : Usefulness of artificial vascular graft for venous reconstruction in liver surgery. World J Surg Oncol 2014: 23;12:113.

Yamada Y, Ochiai T, Boskovic S, Nadazdin O, Oura T, Schoenfeld D, Cappetta K, Smith RN, Colvin R, Madsen JC, Sachs D, Benichou G, Cosimi AB, Kawai T. Use of CTLA4Ig for Induction of Mixed Chimerism and Renal Allograft Tolerance in Nonhuman Primates. Am J Transplant 2014; 14(12): 2704-12.

Takahashi T, Tibell A, Ljung K, Saito Y, Gronlund A, Osterholm C, Holgersson J, Lundgren T, Ericzon BG, Corbascio M, Kumagai-Braesch M. Multipotent mesenchymal stromal cells synergize with costimulation blockade in the inhibition of immune responses and the induction of foxp3+ regulatory T cells. Stem Cells Transl Med 2014:3(12):1484-94.

Shimada S, Fukai M, Wakayama K, Ishikawa T, Kobayashi N, Kimura T, Yamashita K, Kamiyama T, Shimamura T, Taketomi A, Todo S. Hydrogen sulfide augments survival signals in warm ischemia and reperfusion of the mouse liver. Surg Today. 2014 Nov 2. [Epub ahead of print] [doi] 10.1007/s00595-014-1064-4

Kamiyama T, Yokoo H, Kakisaka T, Orimo T, Wakayama K, Kamachi H, Tsuruga Y, Yamashita K, Shimamura T, Todo S, Taketomi A. Multiplication of alpha-fetoprotein and protein induced by vitamin K absence-II is a powerful predictor of prognosis and recurrence in hepatocellular carcinoma patients after a hepatectomy. Hepatol Res 2014 Nov 10. [Epub ahead of print] [doi] 10.1111/hepr.12451

Shibasaki S, Takahashi N, Homma S, Nishida M, Shimokuni T, Yoshida T, Kawamura H, Oyama-Manabe N, Kudo K, Taketomi A. Use of transabdominal ultrasonography to preoperatively determine T-stage of proven colon cancers. Abdom Imaging 2014 Nov 16. [Epub ahead of print] [doi] 10.1007/s00261-014-0296-5

Shimamura S, Kamiyama T, Todo S. Open Hepatic Left Lateral Sectionectomy for Live Donor Transplantation. ACS Multimedia Atlas of Surgery: Liver Surgery Volume, 2014 American College of Surgeons.

本多昌平、新開真人、武浩志、北河徳彦、望月響子、平田義弘、薄井佳子、大浜用克：胎便性腹膜炎の治療方針　一期的根治術と多期的根治術．こども医療センター医学誌43巻１号P3-9（2014.01）

石川隆壽、柴崎晋、本間重紀、川村秀樹、高橋典彦、武冨紹信：CTで診断しえた化学療法施行中に発症した虫垂憩室炎の１例．日本外科系連合学会誌：39巻１号P101-105（2014.02）

嶋村剛、太田稔、山下健一郎：【薬物性肝障害の新展開－疑問点の集約とその解決を探る】治療　薬物性劇症肝不全に対する肝移植．肝・胆・膵　68巻２号P272-278（2014.02）

山下健一郎、渡辺正明、腰塚靖之、高橋徹、蔵谷大介、小倉正臣、吉田雅、旭燁、小野仁、深井原、蒲池浩文、鈴木友己、嶋村剛、武冨紹信、梅澤一夫、藤堂省：【肝胆膵領域におけるNF-κB研究の最前線】肝再生におけるNF-κBの作用　膵島移植におけるNF-κB活性抑制の有用性．肝・胆・膵　68巻4号 P569-582（2014.04）

谷口雅彦、深井原、鈴木達也、内田浩一郎、古川博之：【肝胆膵領域におけるNF-κB研究の最前線】肝再生におけるNF-κBの作用　肝移植におけるNF-κB活性の功罪．肝・胆・膵　68巻4号 P563-568（2014.04）

若山顕治、神山俊哉、武冨紹信：【最新の消化器癌術前術後化学療法】肝細胞癌　消化器外科 37巻4号 P447-455（2014.04）

花本尊之、石黒友唯、高橋周作、廣瀬邦弘、佐治裕、神山俊哉：左側胆嚢に対して単孔式腹腔鏡下胆嚢摘出術を施行した1例．外科　76巻4号P448-451（2014.04）

小丹枝裕二、皆川のぞみ、本間重紀、中西一彰、数井啓蔵、服部淳夫：重複胃に発生した胃癌の1例．日本臨床外科学会雑誌第75巻5号P1276-1281（2014.05）

嶋村剛：脳死と臓器移植（解説）．血液事業37巻1号Page119-121（2014.05）

江川裕人、嶋村剛、藤堂省：肝癌移植症例におけるABO血液型不適合脱感作療法のインパクト．日本消化器病学会雑誌111巻5号P892-898（2014.05）

本多昌平、岡田忠雄、宮城久之、湊雅嗣、高橋典彦、武冨紹信：小児腹腔鏡下経皮的腹膜外ヘルニア閉鎖術（LPEC法）．北海道外科雑誌59巻1号P33-36（2014.06）

坂本譲、細田充主、三橋智子、山本貢、田口和典、武冨紹信、山下啓子：乳癌にてラジオ波焼灼療法と放射線照射後にpost-radiation sarcomaを生じた1例．北海道外科雑誌59巻1号P44-47（2014.06）

武冨紹信：肝胆膵癌の標準治療　日本癌治療学会誌49巻2号Page395-399（2014.06）

佐藤直樹、柿坂達彦、敦賀陽介、武冨紹信：【見逃すな、寄生虫感染症！】発症すると治療が困難な寄生虫感染症　多包性エキノコックス症　臨床と微生物 41巻4号 359-366,（2014.07）

横尾英樹、神山俊哉、柿坂達彦、折茂達也、若山顕治、敦賀陽介、蒲池浩文、武冨紹信：【術後合併症への対処法 Surgical vs Non-Surgical-いつどのように判断するか？】肝胆膵領域 肝胆道切除後出血への対処法　臨床外科69巻7号 P834-839（2014.07）

深井原、嶋村剛、武冨紹信：【臓器保存】よりよい臓器灌流のための臓器保存法と再灌流時治療：重水、水素、ヘリウムの生物活性　Organ Biology 2014, 21（2）, P159-165（2014.07）

石川隆壽、高橋典彦、柴崎晋、本間重紀、川村秀樹、武冨紹信：二期的腹腔鏡手術により治療しえた重症間質性肺炎を併存した同時性大腸癌肝転移の1例．日本外科系連合学会誌：39巻4号P728-733（2014.08）

柴崎晋、戸井博史、津田一郎、中村貴久、長谷泰司：絞扼性イレウスの術前CT所見に関する検討．外科：76巻8号P899-903（2014.08）

川村秀樹、柴崎晋、吉田雅、本間重紀、高橋典彦、武冨紹信、高橋周作、高橋昌宏：当科における長期成績と手術経験から考える進行胃癌に対する腹腔鏡下胃切除の妥当な適当と技術的問題点．癌の臨床：60巻4号P433-439（2014.08）

小野仁、高橋学、河合朋昭、小林清二、小笠原和宏、草野満夫：成人特発性大腸腸重積の1例．日本臨床外科学会雑誌第75巻8号P2248-2251（2014.08）

武冨紹信：生体肝移植における肝静脈再建の工夫　手術 68巻9号　P1222-1226（2014.08）

岡田忠雄、本多昌平、湊雅嗣、長和俊、武冨紹信：【神経症候群（第2版）-その他の神経疾患を含めて-】先天異常/先天奇形　染色体異常・先天奇形症候群　肢先端脳梁症候群．日本臨床　別冊神経症候群IV P478-480（2014.09）

敦賀陽介、神山俊哉、折茂達也、若山顕治、柿坂達彦、横尾英樹、蒲池浩文、武冨紹信：【肝胆膵領域における術前ストラテジー】総論 門脈圧亢進症合併肝癌の術前管理　外科 76巻11号P1223-1226（2014.11）

柿坂達彦、神山俊哉、若山顕治、横尾英樹、折茂達也、敦賀陽介、蒲池浩文、山下健一郎、嶋村剛、武冨紹信：【外科切除適応の境界領域-Borderline resectable cancerへの対応】がん種別の治療指針 肝癌　臨床外科 69巻12号P 1351-1356（2014.11）

若山顕治、神山俊哉、横尾英樹、柿坂達彦、折茂達也、敦賀陽介、蒲池浩文、曽山武士、作原祐介、阿保大介、武冨紹信：肝細胞癌再発に対するアイエーコール動注＋経口抗癌剤療法　癌と化学療法　41巻12号Page1503-1505（2014.11）

藤澤空彦、連利博、矢内俊裕、松田諭、川上肇、平井みさ子、小池和俊、加藤啓輔：小児における脾血管筋脂肪腫．小児外科46巻12号Page1274-1278（2014.12）

研究費一覧

種別	事業名	研究者	代表･分担	交付額	研究課題名
科研費	挑戦的萌芽研究	武冨　紹信	代表	1,300,000	siRNAを用いた肝移植グラフトの革新的体外治療法の開発
厚労科研	厚生労働科学研究費補助金 肝炎等克服実用化研究事業（B型肝炎創薬実用化等研究事業）	武冨　紹信	分担	15,000,000	人工キメラ遺伝子と肝臓特異的な輸送担体の開発を基盤とした肝臓内HBVDNA不活化を目指した新規治療法の開発（溝上班）
厚労科研	厚生労働科学研究費補助金 肝炎等克服実用化研究事業（肝炎等克服緊急対策研究事業）	武冨　紹信	分担	2,500,000	C型肝炎の病態の解明と肝癌発症制御法の確立に関する研究（松浦班）
厚労科研	厚生労働科学研究費補助金 肝炎等克服実用化研究事業（肝炎等克服緊急対策研究事業）	武冨　紹信	分担	1,000,000	次世代シーケンシング・ゲノムワイド関連解析を用いたC型肝炎治療に伴う肝病態進展軽快、肝発癌に関わる宿主因子の解析（坂本班）
厚労科研	厚生労働科学研究委託費 肝炎等克服実用化研究事業（肝炎等克服緊急対策研究事業）	武冨　紹信	分担	1,000,000	ゲノム網羅的解析によるB型肝炎ウイルス感染の病態関連遺伝子の同定と新規診断法の開発（徳永班）
厚労科研	厚生労働科学研究委託費　肝炎等克服実用化研究事業（肝炎等克服緊急対策研究事業）	武冨　紹信	分担	500,000	多施設共同研究による肝移植後肝炎ウイルス新規治療の確立と標準化（前原班）
厚労科研	厚生労働科学研究委託費　肝炎等克服実用化研究事業（肝炎等克服緊急対策研究事業）	武冨　紹信	分担	40,300,000（総額）	肝疾患病態指標血清マーカーの開発と低侵襲かつ効率的に評価・予測する新規検査系の実用化（成松班）
その他	受託研究　バイエル薬品株式会社	武冨　紹信	代表	3,688,417	肝細胞癌患者を対象とした肝動脈化学塞栓療法後のソラフェニブ投与の有無ならびにソラニフェブ投与開始時期が予後へ与える影響を検討する国際共同前向き介入
その他	研究成果展開事業　研究成果最適展開支援プログラム A-STEP	武冨　紹信	分担	1,000,000	診断・治療のための穿刺支援ロボットシステムの開発
その他	公益財団法人 上原記念生命科学財団	武冨　紹信	代表	5,000,000	体外灌流下核酸投与による革新的肝グラフト保存法開発
科研費	基盤研究（S）	神山　俊哉	分担	1,500,000	網羅的糖鎖解析による新規癌マーカーの探索と診断技術の開発
その他	JSPS研究拠点事業(アジア・アフリカ学術基盤形成型)	神山　俊哉	分担	300,000	東アフリカおよびインドにおける疾患予防・診断技術の開発
科研費	基盤研究（B）	嶋村　剛	代表	4,000,000	臓器不足解消を目指した画期的脂肪肝グラフト修復法の開発
科研費	挑戦的萌芽研究	嶋村　剛	代表	1,400,000	シャペロン分子により生存シグナルを増強させる画期的な肝グラフト修復法の開発
厚労科研	厚生労働科学研究費委託費　難治性疾患等実用化研究事業（免疫アレルギー疾患等実用化研究事業（移植医療技術開発研究分野)）	嶋村　剛	分担	5,000,000（総額）	脳死ドナーにおける多臓器摘出に関する教育プログラムの確立（古川班）
科研費	挑戦的萌芽研究	高橋　典彦	代表	800,000	肝細胞癌血管内皮の多様性と新規分子標的薬への応用
科研費	基盤研究（C）	中西　一彰	代表	1,600,000	新規バイオマーカー APC結合蛋白EB1の肝細胞癌発癌進展における分子機構の解明
科研費	基盤研究（C）	蒲池　浩文	代表	300,000	消化器癌におけるMesothelin分子発現の意義と癌悪性度との関係
その他	受託研究　熊本大学	横尾　英樹	代表	96,154	大腸癌の肝転移巣における抗癌剤効果規定因子に関する研究
その他	公益信託 檜刀会外科医学研究助成基金	横尾　英樹	代表	400,000	肝細胞癌新規バイオマーカー候補E-FABPの血清マーカーとしての確立
その他	日本イーライリリー	横尾　英樹	代表	500,000	新規バイオマーカー APC結合蛋白EB1の肝細胞癌発癌進展における分子機構の解明
科研費	基盤研究（A）	山下健一郎	代表	4,000,000	体外誘導免疫制御性リンパ球を用いた細胞治療による免疫寛容誘導に関する研究
科研費	挑戦的萌芽研究	山下健一郎	代表	1,500,000	細胞治療を併用した新しい免疫寛容誘導法に関する基礎的研究
厚労科研	厚生労働科学研究費委託費　難治性疾患等実用化研究事業（免疫アレルギー疾患等実用化研究事業（移植医療技術開発研究分野)）	山下健一郎	分担	7,693,000（総額）	制御性T細胞治療による臨床肝移植における免疫寛容誘導法の多施設共同研究（藤堂班）
その他	共同研究　日本化薬株式会社	山下健一郎	代表	1,841,305	ＮＫ０２６６８０を用いた制御性樹状細胞の誘導および細胞移入による免疫抑制効果の検討
その他	日本イーライリリー	深井　原	代表	500,000	癌細胞の生存シグナルタンパクのリン酸化に対するエネルギー代謝プロファイルの影響
科研費	基盤研究（C）	崎浜　秀康	代表	700,000	消化器癌の微小転移同定システムの臨床応用
科研費	基盤研究（C）	本間　重紀	代表	1,800,000	大腸癌浸潤・転移におけるHCGβの機能解析とその臨床応用
科研費	若手研究（B）	本多　昌平	代表	800,000	Ｇｅｎｅｔｉｃ・Ｅｐｉｇｅｎｅｔｉｃ解析を統合した肝芽腫予後予測マーカーの確立
厚労科研	厚生労働科学研究費委託費　難治性疾患等実用化研究事業（免疫アレルギー疾患等実用化研究事業（移植医療技術開発研究事業)）	本多　昌平	分担	7,026,000（総額）	生体並びに脳死下小腸移植技術の確立と標準化の研究（福澤班）
厚労科研	厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患等政策研究事業（難治性疾患政策研究事業）	本多　昌平	分担	200,000	小児期からの希少難治性消化管疾患の移行期を包含するガイドラインの確立に関する研究（田口班）
その他	公益財団法人 がんの子どもを守る会 治療研究助成	本多　昌平	代表	400,000	肺芽腫のシスプラチン耐性に関わるDNAメチル化異常の解明と予後予測分子マーカーの確立
科研費	若手研究（B）	柿坂　達彦	代表	1,100,000	血漿タンパク質LRGの翻訳後修飾に着目した膵癌早期診断マーカーの解析
その他	MSD株式会社	柿坂　達彦	代表	500,000	糖鎖プロファイル解析による肝細胞癌浸潤・転移の解明
科研費	若手研究（B）	後藤　了一	代表	1,100,000	ヒト化マウス血管移植モデルにおけるヒトアナージー細胞の慢性拒絶反応抑制効果の検討
科研費	若手研究（B）	若山　顕治	代表	1,200,000	体外でタンパク質を発現させる画期的な心グラフト機能修飾法の開発

2014年の年表・年間行事

2014年の年表・年間行事

月	医局行事	学会	研究会・特別講演・セミナーなど
1月	1.6　仕事始め 1.25　教室総会	1.23-26　14th Annual State of the Art Winter Symposium of the American Society of Transplant Surgeons 1.26　日本小児肝癌スタディグループ研究会2014	1.25　第１回医工連携セミナー 1.31　第１回北海道肝胆膵内視鏡外科セミナー
2月	2.2　消化器外科Ⅰ・Wet-labo開催	2.12　第12回肝不全懇話会 2.15　第44回日本小児消化管機能研究会 2.22　第100回北海道外科学会（主催） 2.28　第39回北海道小児がん研究会	2.1　第２回札幌VTRカンファレンス 2.21　第２回北海道小児外科フォーラム
3月	3.1　第８回医局対抗バスケットボール大会 3.6　第３回鏡視下縫合結紮コンペ 3.12　岡田忠雄先生教授就任祝賀会 3.14・15　第４回北海道アドバンスセミナー 3.19　病棟送別会 （人事異動）	3.1　第26回代用臓器・再生医学研究会 3.1-2　第114回日本消化器病学会北海道支部例会 3.6-7　第50回日本腹部救急外科学会 3.7-8　第41回膵・膵島移植研究会 3.8　第90回日本小児外科学会北海道地方会 3.20-22　第86回日本胃癌学会	
4月	（人事異動） 後期研修医10名が入局 4.4　第一外科同門親睦会 4.16　7-2病棟歓迎会	4.3-5　第114回日本外科学会総会 4.5-9　American Association for Cancer Research Annual Meeting 2014 4.11-13　The 12th Congress of the International Society for Experimental Microsurgery 4.23-26　第100回消化器病学会総会	4.19　第２回北海道サージカルアカデミー
5月	5.24-25　医局旅行（定山渓）	5.8-10　第51回日本小児外科学会学術集会 5.24　北海道シーメンスフォーラム2014 5.29-30　第50回日本肝臓学会総会 5.30-6.4　2014 American Society of Clinical Oncology Annual Meeting	5.10　北海道肝がん治療フォーラム 5.21　第４回消化器外科セミナー 5.23　第１回北海道手術手技研究会
6月	6.7　北海道大学第一外科同門会『楡刀会』総会平成26年度新入会員歓迎会 6.14　Wet-labo講習会 6.21　アニマルラボ 6.22　医局対抗野球大会 6.29　外科系講座合同研修説明会	6.4-7　The 2014 Joint International Congress of ILTS、ELITA & LICAGE 6.5-6　第50回日本肝癌研究会 6.11-13　第26回日本肝胆膵外科学会学術集会 6.12-15　第59回日本透析医学会学術集会・総会 6.14　第20回北海道内視鏡外科研究会 6.19　第39回日本外科系連合学会 6.19-20　第79回日本インターフェロン・サイトカイン学会学術集会 6.21　第25回北海道肝がん研究会 6.25-28　The 14th World Congress of Endoscopic Surgery & The 22nd Congress of the European Association of Endoscopic Surgery 6.25-28　16th World Congress on Gastrointestinal Cancer 6.27　第36回日本癌局所療法研究会	6.24　第７回消化器外科Ⅰ・モーニングレクチャー
7月	7.6　アニマルラボ 7.26　人材確保委員会 7.31　第４回鏡視下縫合結紮コンペ	7.3-4　第32回肝移植研究会 7.5　第105回日本臨床外科学会北海道支部総会 7.15-17　第69回日本消化器外科学会総会 7.26-31　World Transplant Congress 2014(25th International Congress of the Transplantation Society)	7.11　北海道周術期栄養管理セミナー 7.22　第８回消化器外科Ⅰ・モーニングレクチャー 7.25　第２回北海道消化器癌カンファレンス 7.26　第１回Hokkaido Hepatology Seminar
8月		8.22　第27回小切開・鏡視外科学会 8.23　第16回北海道肝イメージ研究会 8.27　第14回肝不全懇話会 8.28-30　第52回日本癌治療学会学術集会 8.31　第34回日本大腸肛門病学会北海道地方会	8.9　第１回北海道ヘルニア倶楽部 8.19　第９回消化器外科Ⅰ・モーニングレクチャー
9月	9.12　消化器外科Ⅰ・医局説明会 9.21　医局対抗野球大会（２回戦） 9.24　佐藤直樹先生の送別会	9.5-7　ILCA 2014 International Liver Cancer Association 8th Annual Conference 9.6　第101回北海道外科学会 9.6　第91回日本小児外科学会北海道地方会 9.6-7　第115回日本消化器病学会北海道支部例会 9.10-12　第50回日本移植学会総会 9.13　第35回日本大腸肛門病学会　北海道地方会 9.20　第６回日本Acute Care Surgery学会学術集会 9.25-27　第73回日本癌学会学術総会 3rd International Conference on IMMUNE TOLERANCE 2014	9.6　第３回北海道サージカルフォーラム
10月	10.18　アニマルラボ	10.2-4　第27回日本内視鏡外科学会総会 10.4-6　2nd International Consensus Conference on Laparoscopic Liver Resection 10.4　第44回日本超音波医学会　北海道地方会 10.11　第34回北海道ストーマリハビリテーション研究会学術集会 10.17-19　第52回日本人工臓器学会 10.23-26　JDDW2014 10.25　北海道医学会市民公開シンポジウム	10.3　第２回北海道周術期管理フォーラム 10.8　第５回消化器外科Ⅰセミナー 10.10　第２回　North Japan Cancer Forum
11月	11.8　関連施設連絡会議 11.26　高橋典彦先生お祝いの会 11.23.30　医局対抗サッカー大会	11.7-11 AASLD Liver Meeting 2014 11.7-8　第69回日本大腸肛門病学会学術集会 11.13-14　第25回日本消化器癌発生学会総会 11.15　第７回日本ヘルニア学会北海道支部総会 11.15　北海道ロボット支援鏡視下手術研究会第４回学術集会 11.19　第８回肝臓内視鏡外科研究会 11.20-22　第76回日本臨床外科学会総会 11.22-25　第61回日本臨床検査医学会学術集会 11.29　第106回日本臨床外科学会北海道支部例会 11.27-29　第24回日本内視鏡外科学会総会 11.30-12.1　第55回日本小児血液・がん学会学術集会	11.7　第３回北海道サージカルインフェクションフォーラム 11.29　Surgical Oncology Meeting
12月	12.6　第21回外科集談会 12.6　北海道大学第一外科同門会『楡刀会』忘年会 12.11　第５回鏡視下縫合結紮コンペ 12.12　北海道大学病院手術室忘年会 12.17　7-2病棟忘年会 12.26　仕事納め	12.7　日本小児科学会北海道地方会第291回例会	

1/25 第１回医工連携セミナーが開催されました。

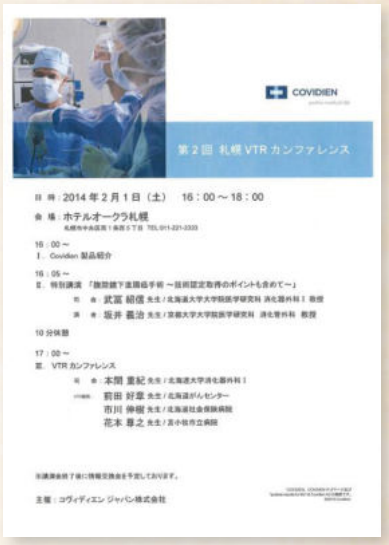
2014年１月25日（土）16時よりホテルオークラ札幌にて、第１回医工連携セミナーが開催されました。一般演題は『日本内視鏡外科学会技術認定審査合格に向けて～どこを指摘され､どのように改善したか～』をテーマに､胃部門で旭川厚生病院の柳田先生が、大腸部門で皆川のぞみ先生にご発表頂きました。また、特別講演として法政大学理工学部機械工学科　医療・福祉ロボティクス研究室・教授・石井千春先生に、『最近の医工連携の動向』についてご講演頂きました。

1/31 第１回　北海道肝胆膵内視鏡外科セミナー

2014年１月31日（金）、19時から第一回北海道肝胆膵内視鏡外科セミナーがセンチュリーロイヤルホテルで開催され、岩手医科大学外科学講座教授の若林剛先生をお招きし「腹腔鏡下肝切除は本当に普及するのか」という演題名で特別講演していただきました。

会場はほぼ満席の状態で腹腔鏡下肝切除に対する関心の高さがうかがわれました。

2/1 第２回　札幌VTRカンファレンスが開催されました。



2014年２月１日（土）16時より、ホテルオークラ札幌にて、第２回札幌VTRカンファレンスが開催されました。今回は京都大学大学院消化管外科教授の坂井義治先生をお招きして、『腹腔鏡下直腸癌手術～技術認定取得のポイントも含めて～』についてご講演頂きました。技術認定のポイントや直腸の解剖につき非常にわかりやすくお話いただき、大変勉強になりました。また、VTRカンファレンスでは、今年度技術認定審査に提出した、北海道がんセンターの前田好章先生、北海道社会保険病院の市川伸樹先生、苫小牧市立病院の花本尊之先生に動画を供覧して頂き、坂井先生を中心にディスカッサーの先生方に多くのアドバイスを頂き、こちらも大変勉強になりました。

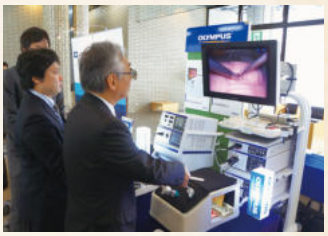
2/21 第２回北海道小児外科フォーラム

2014年２月21日（金）19時から第２回北海道小児外科フォーラムが札幌パークホテルで開催されました。

特別講演として京都府立医科大学大学院小児外科教授の田尻達郎先生に「小児がんの集学的治療における小児外科の役割」と題して講演していただき、小児がん治療における集学的治療の中での外科治療の位置づけについて実例を挙げながら非常に分かりやすくお話いただき、大変勉強になりました。

2/22 第100回北海道外科学会が開催されました。

2014年２月22日（土）、北海道大学学術交流会館において、第100回北海道外科学会が開催されました。記念すべき第100回となる本大会は当科主催（武冨紹信会長）にて行われました。若手を中心に100題を超える演題が発表され、大変盛況の中無事終了いたしました。今回は企業ブースにてハンズオンセミナーも開催されており、こちらも大勢の方々が参加されておりました。本会は若手の登竜門と位置づけられる学会であり、今後とも発展していくことを願っております。



2/22 第100回北海道外科学会特別講演会

2014年２月22日（土）に北海道学術交流会館にて第100回北海道外科学会（会長　武冨紹信教授）が行われました。

また、100回を記念して京王プラザホテルにて北海道大学名誉教授　田邊達三先生、さらに東京大学肝胆膵外科・人工臓器移植外科教授の國土典宏先生をお招きして記念講演会が催されました。

その後、記念懇親会が行われさらなる北海道の外科の発展を誓いながら会を終了しました。

2/22 第100回北海道外科学会記念懇親会

2014年2月22日（土）北海道学術交流会館にて第100回北海道外科学会（会長　武冨紹信教授）が行われました。

また、100回を記念して京王プラザホテルにて北海道大学名誉教授　田邊達三先生、さらに東京大学肝胆膵外科・人工臓器移植外科教授の國土典宏先生をお招きして記念講演会が催されました。

その後、記念懇親会が行われさらなる北海道の外科の発展を誓いながら会を終了しました。

3/1 第８回医局対抗バスケットボール大会

2014年３月１日に東区体育館で第８回医局対抗バスケットボール大会が行われました。毎年行われて今回で８回目となりました。当科では昨年は4位とカップを逃す結果となっていました。今年も多数の関連病院からの御参加をありがとうございました。また西部先生、今先生、お忙しい中応援に来てくださり誠にありがとうございました。

予選リーグは脳神経外科、消化器外科Ⅱ（他科合同チーム）でしたが、２勝し、例年通り、決勝トーナメントに進出となりました。

トーナメント１回戦は優勝候補の整形外科でしたが、力の差が徐々に出始め勝利はつかめませんでした。

３位決定戦の相手は第二内科。前半はリードして終了。後半は札幌社会保険総合病院の中川先生、当科の准教授である神山先生も出場し、勝利を掴み取りました。

今年の結果は３位で，２年ぶりのカップを取得しました。これで打ち上げ、「カップで飲める…」なんてことは多分しませんが。なにはともあれ強豪消化器外科Ⅰが戻ってきました。

医局対抗バスケ始まったころは優勝候補と言われ、優勝していましたが、最近は優勝候補になれておりません。一歩一歩進んで、また優勝したいと思っております。来年は当科が幹事でありますが、今年よりも良い成績、ぜひ優勝を掴みたいと思います。今後ともよろしくお願いします。

重ねて今回応援に来てくださった秘書さん、看護師さん、関係者の方々ありがとうございました。来年もカップゲットできるよう頑張りますので、応援に来ていただければ幸いです。「来年もカップで～」、ではなくて、美酒を飲みましょう！！

3/6 第３回鏡視下縫合結紮Competitionが開催されました。

2014年3月6日に第一外科医局内カンファレンスルームにおいて、第３回鏡視下縫合結紮Competitionが開催されました。当科後期研修医８名、初期研修医３名が参加されました。前回同様多数の教室員が見守り、巨大スクリーンを見ながら、非常に緊張感のある中で行われました。普段の練習でなれた状況とはかなり異なり、戸惑う人が多かったように思います。そのためか、タイムが悪化するものが多かったように思われました。普段の練習環境と異なる状況というのは、今後改善しなければならない点と思いました。

そんな中､金沢先生が見事優勝されました。3回を通じての最高タイムをマークし、年間優勝者にも選ばれました。おめでとうございました。高級ネーム入り白衣が授与される予定です。

なお、３回を通じての最高タイムは、１位金沢先生、２位正司先生、３位谷先生でした。一方で、３回の平均タイムは、圧倒的に大平先生が速く、以下、正司先生、金沢先生と続きました。これで今年度のコンペは終了しますが、大学を出た後も是非定期的に研鑽を積んで欲しいものです。１年間お疲れ様でした。また、医局員の皆様には貴重な時間を頂きましてありがとうございました。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

3/14 第４回北海道アドバンスセミナーが川崎で開催されました。

2014年3月14日（金）、3月15日（土）、当科消化管グループの川村秀樹先生、本間重紀先生、砂川市立病院の横田良一先生を講師としてお招きし、参加者が経験した腹腔鏡下手術の動画を使ってカンファレンスを行いました。

翌日は、ブタを用いて腹腔鏡補助下幽門側胃切除術、腹腔鏡下低位前方切除術を行いました。密度の濃い研修で、非常に有意義な時間が過ごせました。

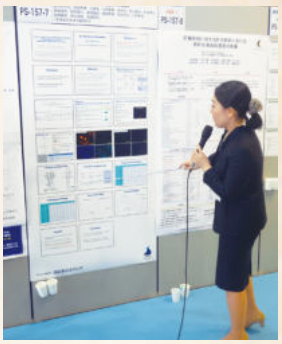
２日間病棟業務ならびに当直業務を担当してくださった先生方、このような機会をもうけていただいたスタッフの皆様に感謝申し上げます。

4/3 第１１４回日本外科学会定期学術集会

2014年4月3日（木）～ 5日（土）に第114回日本外科学会定期学術集会が桜の満開の時期と重なった京都にて開催されました。

教室からは30演題が発表され、湊雅嗣先生（小児グループ所属　演題名：「PARP6の高メチル化は肝芽腫の新しい予後因子である」）が若手優秀演題賞を受賞致しました。

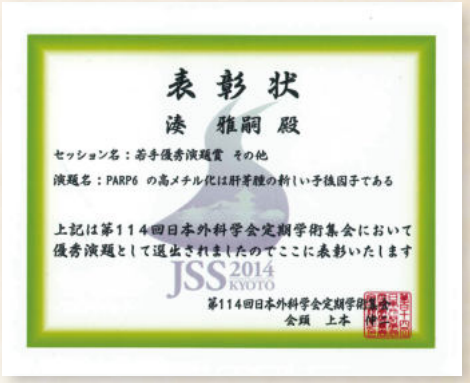
また、関連施設からも数演題が出され活発な議論が展開されました。



4/3 湊雅嗣君（平成21年入局）が第114回日本外科学会若手優秀演題賞を受賞しました。

2014年４月に京都で開催された第114回日本外科学会定期学術集会において、当科大学院生の湊雅嗣君（平成21年入局）が若手優秀演題賞を受賞しました。

研究演題は「PAPR6の高メチル化は肝芽腫の新しい予後因子である」です。おめでとうございます。これからの益々の研鑽を期待したいと思います。



4/4 第一外科同門親睦会が開催されました。

日本外科学会（第114回定期学術集会）にあわせ、2014年４月４日、京都がんこ三条店にて一外科同門親睦会を開きました。先輩の先生方も含め約40名が出席し、近況などを報告し合いながら盛大な会となりました。若い先生も先輩の先生の話に耳を傾けかなり刺激を受けたようでした。

4/16 消化器外科Ⅰ新入局員・新大学院生歓迎会

2014年4月16日　消化器外科Ⅰ新入局員・新大学院生 歓迎会が開催されました。今年も多くの新入局員そして新大学院生がやってまいりました。そして病棟の新しい看護師さんもやってまいりました。そんな皆さんを歓迎するこの会は総勢70名を超える大きなものとなりました。ご覧の通り雰囲気のよい宴会に仕上がっていると思います。実習の学生も参加し，入局宣言や入局考えてます宣言が多く聞かれ，さらにお酒が美味しくなった一夜でございました。

4/19 第２回北海道サージカルアカデミーが開催されました。

2014年4月19日（土）にノボテル札幌において第２回北海道サージカルアカデミーとして視鏡下手術educationセミナーが開催されました。今回は鏡視下外科手術の教育をテーマとし、一般演題として当教室における教育プログラムに関し教室の柴崎が、市中病院における教育の実際を小樽掖済会病院の大野啓祐先生に発表していただきました。特別講演は大学全体で横断的に教育プログラムを行っている東京医科歯科大学低侵襲医療センターの小嶋一幸教授にご講演を行っていただきました。50席の会場に対し46名の先生方にご出席していただき、大変盛況に開催することができました。ご参加いただいた各先生にこの場にてお礼を申し上げます。鏡視下手術の指導がこれから益々重要になってくると実感する会でした。

5/10 北海道肝がん治療フォーラムが開催されました。

2014年５月10日(土)に北海道肝がん治療フォーラムが開催されました。一般演題の他、京都大学肝胆膵・移植外科　准教授である波多野悦郎先生をお招きして、肝がん治療についてご講演していただきました。波多野先生の決してあきらめない姿勢がひしひしと伝わり我々も心を新たにした次第です。

5/16 教室・関連施設から５名が日本内視鏡外科学会技術認定医に合格しました。

本年度の日本内視鏡外科学会技術認定医の合格者が発表され、教室・関連施設から５名が合格しました。

これからの益々の研鑽を期待します。

第10回日本内視鏡外科学会技術認定合格者（敬称略）

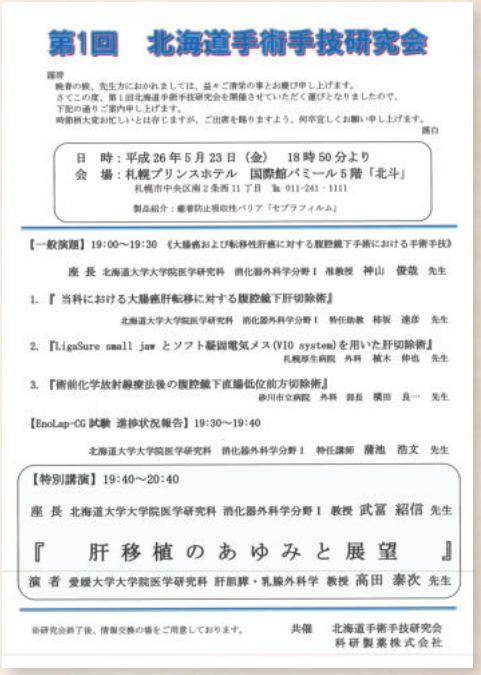
市川　伸樹　北海道社会保険病院（現岩見沢市立病院）　平成15年卒
今　　裕史　KKR札幌医療センター　平成3年卒
砂原　正男　市立函館病院　平成6年卒
前田　好章　北海道がんセンター　平成5年卒
柳田　尚之　JA北海道厚生連旭川厚生病院　平成1年卒

5/21 第４回消化器外科セミナーが開催されました。

2014年５月21日（水）に第４回消化器外科セミナーが開催されました。札幌医科大学分子生物学講座　教授　鈴木拓先生に、noncoding RNAを中心に癌のエピジェネティクス異常についてご講演していただきました。癌のDNAメチル化異常に関する基礎研究の最先端に触れることができ、大変貴重な機会をいただきました。

5/23 第１回北海道手術手技研究会が開催されました。

2014年５月23日（金）に札幌プリンスホテルにて第１回北海道手術手技研究会が開催され、各施設から腹腔鏡下での手術手技のポイントを出していただき活発な討論がなされました。また、愛媛大学大学院肝胆膵・乳腺外科学　教授である高田　泰次先生をお招きし肝移植のあゆみについてご講演していただきました。会場も満席に近い状態で盛会のうちに終了いたしました。



5/24 平成26年度医局旅行を開催しました。

2014年５月24日から25日にかけて医局旅行が札幌郊外の定山渓温泉で開催されました。武冨教授体制になってから初めての開催でしたが、医局員、看護師、秘書含めて40名を超える大きなものとなりました。宴会も深夜遅くまで無礼講で盛り上がり、新入局員の先生方や新人の看護師さん方も上級の先生方と親睦を深めることができ、より一層消化器外科Ⅰの結束力が高まったと思います。来年度（あるいは今年中に？）も定期的に開催していきたいと考えております。

6/7 平成26年度同門会新入会員歓迎会

2014年６月７日（土）ニューオータニイン札幌にて、北海道大学第一外科同門会「楡刀会」総会ならびに新入会員歓迎会が開催されました。今年度は10名の新入会員を迎え、出席者数も116名と例年以上の出席者数で盛会のうちに終了いたしました。

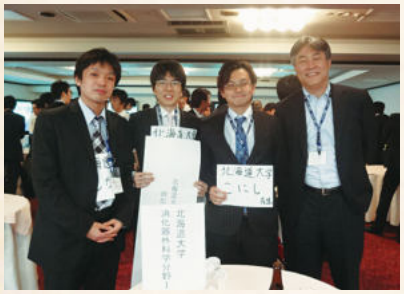
6/14 Wet-labo講習会が開催されました。

2014年６月14日（土）13時～ 17時まで、『ほくたけトレーニングセンター Village Plus』にて、Wet-labo講習会が開催されました。外科系に興味のある初期研修医や今年度入局した後期研修医を中心に30名超が参加されました。２部構成となっており、第１部では豚の皮膚や腸管を用いての真皮埋没縫合や腸管吻合など、臨床に近い基本的な手技を学ぶことができました。第２部では鏡視下での縫合結紮だけでなく、LAP-mentorやDaVinci mimicなども体験することができました。瞬く間に時間が過ぎてしまい、放っておけば何時間でも続けてしまいそうなほど参加者全員が熱中しておりました。また、上達も非常に早く、鏡視下縫合結紮技術は、始める前とは別人のように上手になっていました。

ご参加されました先生方の明日からの臨床に少しでも生かされることを期待するばかりです。今後もこのような機会はまだありますので、外科系に興味がある先生方は是非ご参加をお待ちしております。また、お忙しい中かけつけてご指導・ご協力頂きました関連病院の先生方にはこの場をお借りして厚く御礼申し上げます。

6/19 第39回日本外科系連合学会のSurgical SASUKEに参加しました。

2014年６月19日に東京で開催された第39回日本外科系連合学会（会長：東京慈恵会医科大学教授矢永勝彦先生）のSurgical SASUKEに北大一外科チームが参加しました。このSurgical SASUKEは若手外科医育成の目的で、各大学代表の若手外科医（卒後10年目まで）が医学知識や外科手技を競うものです。我が北大一外チームは予選ブロック２位で惜しくも決勝に進むことはできませんでしたが、大いに奮闘してくれました。



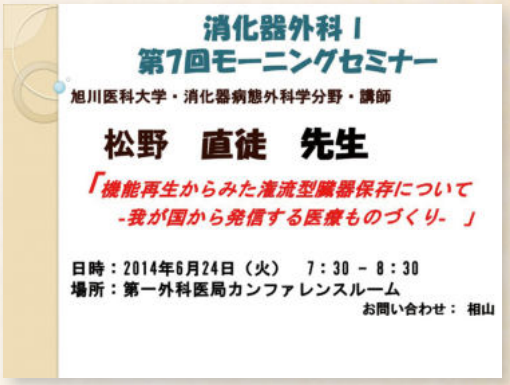
6/21 アニマルラボが開催されました。

2014年6月21日に福島県にあるエチコン研究センターへ上級医６名、後期研修医６名で豚を使った内視鏡手術のトレーニングに参加してきましたので、ご報告いたします。

豚の臓器を実際に用いたwet labは何度か経験したことがありましたが、生きた豚を手術したことは当然ありません。今回私たちは腹腔鏡下手術のうち、幽門側胃切除、直腸切除をタスクとして後期研修医全員が術者、助手を交互に代わりながら経験することができました。これまでスコピスト以外の経験はなく、お互いが初めて術者として適切な視野を要求したり、逆に夢中になりすぎて術野の展開が不十分でも進めてしまうことが何度かありました。その都度上級医よりアドバイスをいただきながら手術を進めることができました。朝10時から開始し、胃・直腸の手術を終えたところでちょうど終了の時刻となり、約６時間濃密なトレーニングができたと思います。後期研修医は日々Dry Boxで内視鏡手術のトレーニングを行ってますが、腔内結紮の難しさを改めて、今回生きた豚を手術して実感できました。今回感じた難しさや、できなかったことは次の機会までには克服できるようにトレーニングに励みたいと思います。

6/24 消化器外科Ⅰ第７回モーニングセミナーが開催されました。

2014年６月24日(火)第７回モーニングセミナーを開催しました。講師には日本の臓器保存分野を牽引していらっしゃる松野直徒先生（旭川医科大学消化器病態外科学分野・講師）にお越し頂き、レクチャーして頂きました。潅流型臓器保存分野の現状・問題点から、それを克服するための研究成果や報告、さらには最先端の治験情報まで広く教えて頂き、大変勉強になりました。

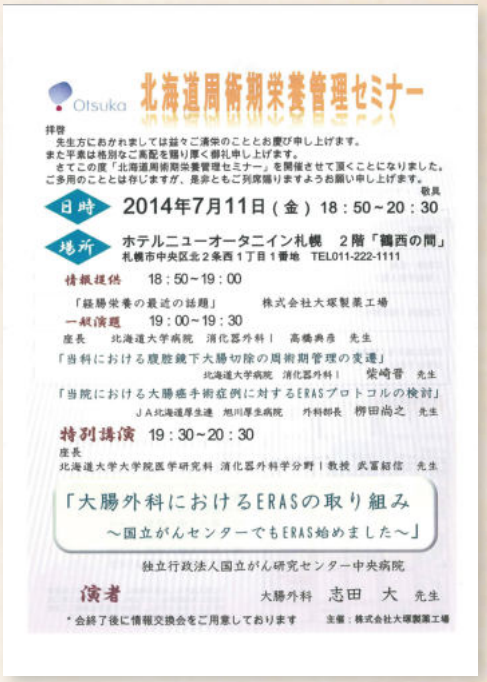


7/11 北海道周術期栄養管理セミナーが開催されました。

2014年７月11日（金）19時より、ホテルニューオータニイン札幌にて、北海道周術期栄養管理セミナーが開催されました。一般演題として、当教室より柴崎が『当科における腹腔鏡下大腸切除の周術期管理の変遷』について、旭川厚生病院・柳田先生が『当院における大腸癌手術症例に対するERASプロトコルの検討』について、それぞれ発表いたしました。

また、墨東病院勤務時よりERASに積極的に取り組んでこられてきた、現国立がん研究センター中央病院・大腸外科・志田大先生をお招きいたしまして、『大腸外科におけるERASの取り組み～国立がんセンターでもERAS始めました～』の演題名で特別講演を賜りました。志田先生の取り組まれているERASというものが、患者さんやそこに関わる全ての医療従事者みんなが笑顔になることを目指した総合的な術後回復支援プログラムのようであると小生は理解し、大変勉強になるとともに、外科医の独りよがりになりがちであった当教室の周術期管理を見直す必要性を実感いたしました。会場には、医師だけでなく、看護師、薬剤師、栄養師など、非常に多職種の方々がお集まりになり、満席の中で盛況のうちに終了いたしました。

その後は、志田先生を囲んでの情報交換会となり、ここでも熱い議論が交わされ、大変有意義なセミナーとなりました。



7/16 第69回日本消化器外科学会総会が郡山市にて開催されました。

2014年７月16日(水) ～ 18日(金)まで、福島県郡山市にて、第69回日本消化器外科学会総会が開催されました。当教室からも多数の先生方が参加し、病棟がもぬけのからとなるグループもありました。懇親会ではフラダンスもあり、福島の夜を満喫することができました。今回は6年生の大木君も参加され、刺激をうけていた様子でした。以下は大木君の感想です。今後も継続して学生の皆さんにこのような場を提供できれば、と思います。

第69回日本消化器外科学会総会に参加して

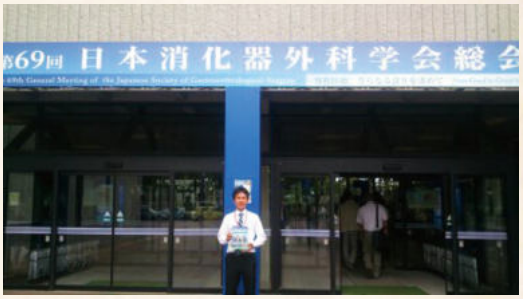
医学部６年　大木　聡悟

今回、初めて全国学会というものに参加させていただきました。将来的に、学会に参加すると考えていましたが、それがどのようなものなのか知りませんでした。

会場は３つに分かれており、講演会場も多数あり、自分の聞きたいものを選び、拝聴できるシステムとなっていました。それぞれの演題は、専門性の高いもので、内容は正直なところわかったり、わからなかったりでした。(ほとんどわかりませんでしたが。)

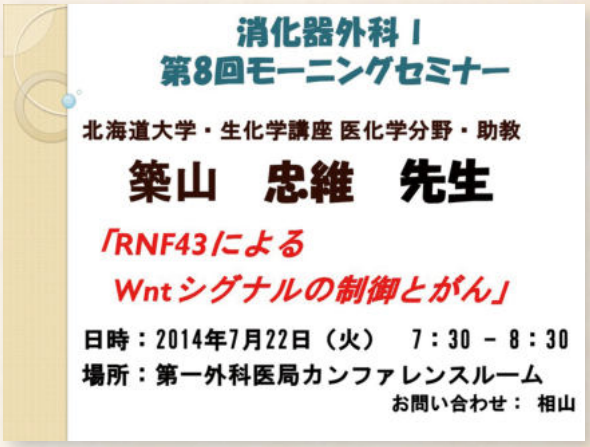
その中で、研修医、学生の発表ブースがありました。学生の発表は聞けませんでしたが、研修医の先生方の発表を聞くことが出来ました。１つか２つ上の先生方が、もう学会で発表なさってる姿を見て、自分が１年か２年後にはそこで発表できるのか不安に感じました。早くから、学会発表などに積極的に参加されている先生がいて、どのような発表しているのか、自分で実際に聞くことが出来たことが、１番の収穫でした。まだまだ先だろうと考えていた学会での発表をこんなに早くから行っている先生方の存在を知り、自分も負けないように頑張ろうと思いました。

貴重な機会を与えて下さり、本当にありがとうございました。



7/22 消化器外科Ⅰ第８回モーニングセミナーが開催されました。

2014年７月22日第８回モーニングセミナーを開催しました。講師には北海道大学の生化学講座医化学分野・助教の築山忠維先生をお招きし、レクチャーして頂きました。大腸癌や肝癌などにおいてよく知られているWntシグナル伝達系は、複雑でなかなか理解しにくい印象があり我々臨床医には敬遠されがちな部分なのですが、それをとても分かりやすくまとめて頂きました。さらに、最近話題となっているRNF43とWntシグナル伝達系との関わり、加えてRNF43と癌との関わりについても詳しく教えて頂き、大変勉強になりました。



7/23 岡田忠雄先生（現北海道教育大学教授）が医学部医学科平成25年度優秀教員賞を受賞

この度、平成25年度北海道大学医学部医学科優秀教員賞を岡田忠雄先生が受賞されました。医学科５年生に対する臨床講義を行ったすべての教員の中から９人の教員が選考されました。日頃からの学生に対する懇切丁寧な指導が評価されましたものと思います。おめでとうございます。

7/25 第２回北海道消化器癌カンファレンスが開催されました。

2014年７月25日（金）、19時から第２回消化器癌カンファレンスが開催されました。今回は浜松医科大学第二外科の今野裕之先生をお招きし、GIST関する基礎から臨床に至る幅広い内容を講演していただき大変勉強になりました。内科の先生方も出席され大盛況のうちに終了いたしました。

第2回北海道消化器癌カンファレンス

2014. 7. 25 (FRI.) 18:45-20:00

【場所】札幌グランドホテル 3階「GINSEN」

製品説明 18:45-19:00

「ロンサーフ®配合錠 T15・T20」
大鵬薬品工業㈱ 札幌支店医薬三課 齊藤周平

特別講演 19:00-20:00

【座長】
北海道大学大学院医学研究科 消化器外科学分野Ⅰ
教授 武冨 紹信 先生

「GIST診療の現状と今後の展開」
浜松医科大学 外科学第二講座
教授 今野 弘之 先生

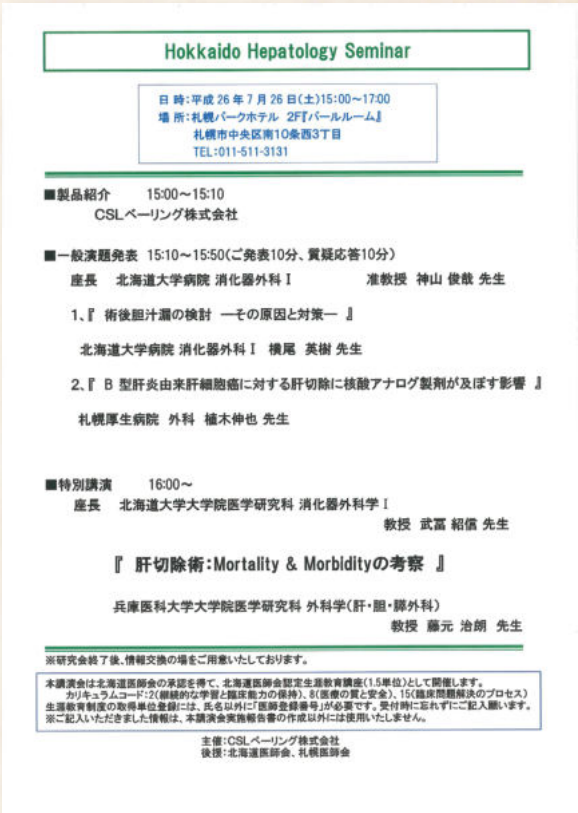
＊本講演会は北海道医師会の承認を得て、「北海道医師会認定生涯教育講座(1単位)」として開催致します。カリキュラムコードは、1(専門職としての使命感)、9(医療情報)となります。
＊ご芳名、医籍登録番号の記載にご協力下さいますようお願い致します。
ご記入頂きました情報は、本講演会実施報告にのみ使用致します。

主催 大鵬薬品工業株式会社
後援 北海道医師会 札幌市医師会

7/26 第１回Hokkaido Hepatology Seminarが開催されました。

2014年７月26日（土）に札幌パークホテルにて第１回Hokkaido Hepatology Seminarが開催されました。

一般演題２題の後、兵庫医科大学肝胆膵外科学の藤本治朗先生をお招きし、「肝切除術：Mortality and Morbidity」の考察についてご講演していただきました。先生のお話から合併症をおこさないようにすること、また起こしてしまった場合の適切な対応が大事であることを痛感させられました。



Hokkaido Hepatology Seminar

日 時：平成 26 年 7 月 26 日(土)15:00～17:00
場 所：札幌パークホテル 2F『パールルーム』
札幌市中央区南10条西3丁目
TEL：011-511-3131

■製品紹介 15:00～15:10
CSLベーリング株式会社

■一般演題発表 15:10～15:50(ご発表10分、質疑応答10分)
座長 北海道大学病院 消化器外科Ⅰ 准教授 神山 俊哉 先生

1、『 術後胆汁漏の検討 ―その原因と対策― 』
北海道大学病院 消化器外科Ⅰ 横尾 英樹 先生

2、『 B 型肝炎由来肝細胞癌に対する肝切除に核酸アナログ製剤が及ぼす影響 』
札幌厚生病院 外科 植木伸也 先生

■特別講演 16:00～
座長 北海道大学大学院医学研究科 消化器外科学Ⅰ
教授 武冨 紹信 先生

『 肝切除術：Mortality & Morbidityの考察 』

兵庫医科大学大学院医学研究科 外科学(肝・胆・膵外科)
教授 藤元 治朗 先生

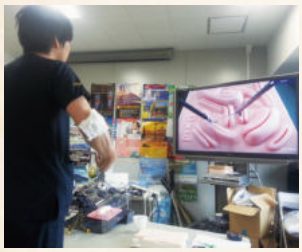
※研究会終了後、情報交換の場をご用意いたしております。

本講演会は北海道医師会の承認を得て、北海道医師会認定生涯教育講座(1.5単位)として開催します。
カリキュラムコード：2(継続的な学習と臨床能力の保持)、5(医療の質と安全)、15(臨床問題解決のプロセス)
生涯教育制度の取得単位登録には、氏名以外に「医師登録番号」が必要です。受付時に忘れずにご記入願います。
※ご記入いただきました情報は、本講演会実施報告書の作成以外には使用いたしません。

主催：CSLベーリング株式会社
後援：北海道医師会、札幌医師会

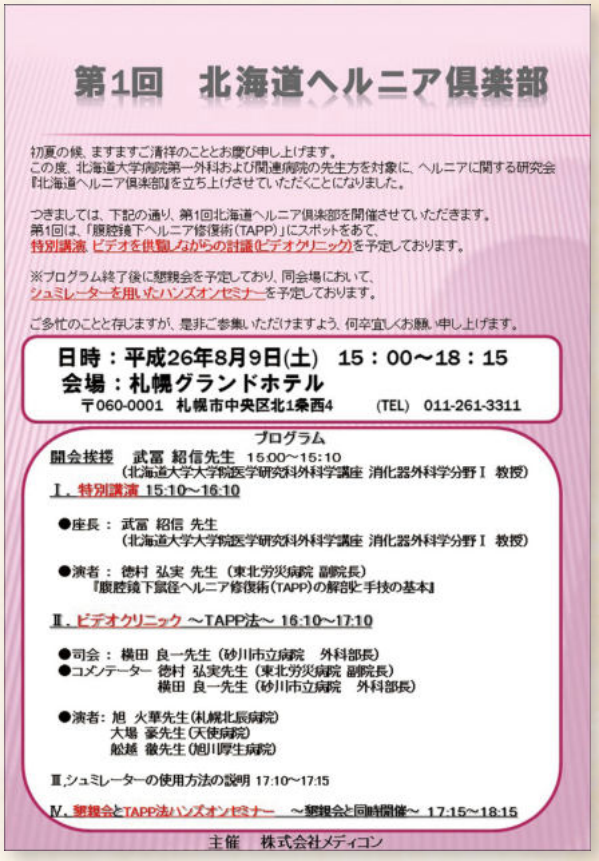
7/31 今年度第１回目の鏡視下縫合結紮Competitionが開催されました。

2014年7月31日（木）に消化器外科Ⅰ・医局内カンファレンスルームにおいて、今年度第一回鏡視下縫合結紮Competitionが開催されました。当科後期研修医８名、初期研修医２名、学生（５年生）２名が参加されました。教授以下多数の教室員が見守り、巨大スクリーンを見ながら、普段以上の緊張感の中で行われました。３分以上は打ち切り、普段と違う状況下、遠近感をつかみづらい、という難しい条件下でしたが、昨年同様に熱戦が繰り広げられました。接戦を制したのは、昨年に引き続いてまたしても学生で、５年生の黒沢君でした。かなり頻繁にトレーニングに通っていた成果がでたものと思われます。おめでとうございます。賞品であるネーム入り術衣が近日中にプレゼントされる予定です。次回は11月に予定しています。皆さんの更なる成長を期待しています。



8/9 第１回北海道ヘルニア倶楽部が開催されました。

2014年８月９日（土）15時より、札幌グランドホテルにて第１回北海道ヘルニア倶楽部が開催されました。特別講演として、東北労災病院副院長・徳村弘実先生をお招きし、『腹腔鏡下鼠径ヘルニア修復術（TAPP）の解剖と手技の基本』についてご講演頂きました。その後、当教室同門の先生方によるビデオクリニックが行われました。さらにはシミュレーターを用いたハンズオンセミナーも行われ、大盛況の中終了いたしました。この会を通して、今後当教室でもTAPPが普及していくことを期待したいと思います。


第1回　北海道ヘルニア倶楽部

初夏の候、ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。
この度、北海道大学病院第一外科および関連病院の先生方を対象に、ヘルニアに関する研究会『北海道ヘルニア倶楽部』を立ち上げさせていただくことになりました。

つきましては、下記の通り、第1回北海道ヘルニア倶楽部を開催させていただきます。
第1回は、「腹腔鏡下ヘルニア修復術（TAPP）」にスポットをあて、
特別講演 ビデオを供覧しながらの討議(ビデオクリニック)を予定しております。

※プログラム終了後に懇親会を予定しており、同会場において、
シュミレーターを用いたハンズオンセミナーを予定しております。

ご多忙のことと存じますが、是非ご参集いただけますよう、何卒宜しくお願い申し上げます。

日時：平成26年8月9日(土)　15：00～18：15
会場：札幌グランドホテル
〒060-0001　札幌市中央区北1条西4　(TEL)　011-261-3311

プログラム

開会挨拶　武冨 紹信先生　15:00～15:10
(北海道大学大学院医学研究科外科学講座 消化器外科学分野Ⅰ 教授)

Ⅰ. 特別講演 15:10～16:10

●座長：武冨 紹信 先生
(北海道大学大学院医学研究科外科学講座 消化器外科学分野Ⅰ 教授)

●演者：徳村 弘実 先生（東北労災病院 副院長）
『腹腔鏡下鼠径ヘルニア修復術(TAPP)の解剖と手技の基本』

Ⅱ. ビデオクリニック ～TAPP法～ 16:10～17:10

●司会：横田 良一先生（砂川市立病院　外科部長）
●コメンテーター 徳村 弘実先生（東北労災病院 副院長）
横田 良一先生（砂川市立病院　外科部長）

●演者：旭 大華先生(札幌北辰病院)
大場 豪先生(天使病院)
舩越 徹先生(旭川厚生病院)

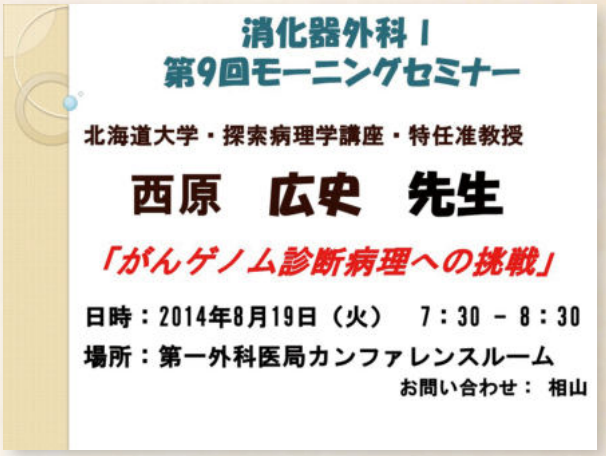
Ⅲ.シュミレーターの使用方法の説明 17:10～17:15

Ⅳ. 懇親会とTAPP法ハンズオンセミナー　～懇親会と同時開催～ 17:15～18:15

主催　株式会社メディコン

8/19 第９回消化器外科Ｉモーニングセミナーが開催されました。

2014年８月19日（火）に第９回モーニングセミナーが開催されました。講師には北海道大学探索病理学講座　特任准教授　西原広史先生をお招きし、「がんゲノム診断病理への挑戦」という内容でレクチャーして頂きました。



9/6 羽田力先生（市立三笠総合病院）が北海道外科学会奨励賞を受賞！

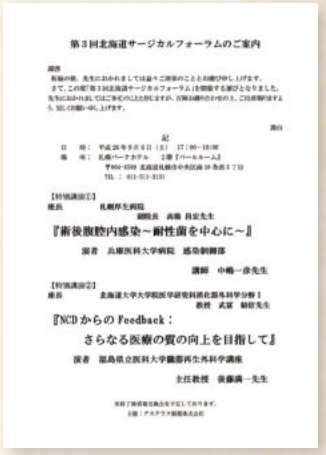
この度、2014年北海道外科学会奨励賞を羽田力先生が受賞されました。おめでとうございます。北海道外科雑誌に掲載された論文の中から選ばれたもので、日ごろの臨床上の工夫が評価されました。これからの益々のご研鑽を期待しています。

9/6 第３回北海道サージカルフォーラムが開催されました。

2014年９月６日に第３回北海道サージカルフォーラムが札幌パークホテルにて開催されました。

今回は兵庫医科大学感染制御部の中島一彦先生より耐性菌を中心とした術後腹腔内感染のお話をしていただきした。さらに福島県立医科大学臓器再生外科学の後藤満一教授よりNCDがどのように活用されるのかをわかりやくお話していただきました。

医療の質の向上につながっていく具体的な例をとりあげてくださいましたので我々も大変参考になりその重要性を再認識させられた次第です。



9/12 平成26年度消化器外科Ⅰ 医局説明会が開催されました。

2014年９月12日18時より、北海道大学消化器外科Ⅰ医局にて、主に初期研修医・後期研修医を対象とした医局説明会が本年も行われました。各関連施設、大学より研修医、大学生で約40名が参加され、医局長・横尾英樹より消化器外科Ⅰ入局後の研修プログラム、教育方針などにつき説明がありました。また、その夜は親睦を深めるために懇親会が開催され、大学病院スタッフだけでなく、各関連施設スタッフの先生方にも参加していただき、総勢約80名と、大盛況の中行われました。当日に入局の決意表明された研修医もおり,入局を悩んでいる研修医も各スタッフから様々な意見を聞くことができたと思います。ご参加頂きました研修医・学生の皆様の今後のご活躍を期待するとともに、当日にご尽力頂きました関連施設の諸先生方にもこの場をお借りして厚く御礼申し上げます。

9/21 平成26年度医局対抗野球大会

先日行われた医局対抗野球大会の結果をご報告致します。

１回戦は６月22日に北大B球場で行われ、対戦相手は皮膚科でした。札幌厚生病院の高橋昌宏先生、KKR札幌医療センターの今裕史先生をはじめ、湊先生、医局秘書のみなさんや病棟の看護師さんたちも応援に来てくださったおかげで、見事コールド勝ちすることができました。

２回戦は９月21日に屯田西公園で、対戦相手は産婦人科でした。石黒先生、谷先生、入局候補の研修医の先生方も参加していただきましたが、残念ながら10対３で負けてしまいました。

１回戦は機動力を生かした走塁で勝つことができましたが，２回戦は相手投手を攻略できず、敗れました。負けてしまいましたが、怪我もなく終えることができ、また多くの方々に応援していただき、ありがとうございました。打ち上げの飲み会も盛り上がり、ますます医局員や病棟スタッフの交流を深めることができました。

9/29 佐藤直樹先生の送別会を行いました。

2014年９月24日（水）に９月一杯で定年退職となりました、北海道大学病院手術部准教授　佐藤直樹先生の送別会が開かれました。

佐藤直樹先生は長年、エキノコックスの臨床、研究に従事され世界のトップリーダーとして活躍されてこられました。

我々も先生のご功績に恥じることなく頑張らなければという思いを強く致しました。

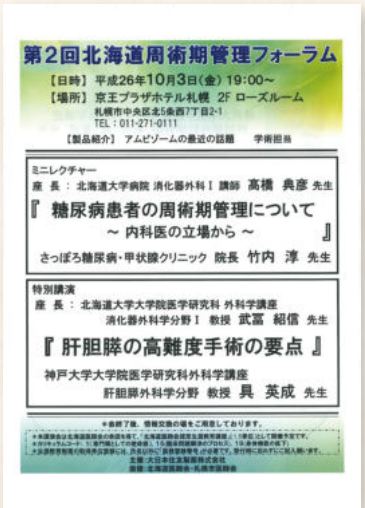
長い間本当にお疲れ様でした。

10/3 第２回北海道周術期フォーラムが開催されました。

2014年10月３日（金）19時より、京王プラザホテルにて第２回北海道周術期フォーラムが開催されました。

ミニレクチャーとしてさっぽろ糖尿病・甲状腺クリニック院長の竹内淳先生から「糖尿病患者の周術期管理について」、特別講演として神戸大学大学院 肝胆膵外科教授の具英成先生から「肝胆膵の高難度手術の要点」をご講演していただきました。

竹内先生からは糖尿病管理について参考になることが多く、また具先生のお話から高度進行癌に対する先生の意気込みが伝わってくる内容で盛況のうちに会を終了することができました。


第２回北海道周術期管理フォーラム
【日時】平成26年10月3日(金) 19:00～
【場所】京王プラザホテル札幌 2F ローズルーム
札幌市中央区北5条西7丁目2-1
TEL：011-271-0111
【製品紹介】アムビゾームの最近の話題　学術担当
ミニレクチャー
座長：北海道大学病院 消化器外科Ⅰ 講師 高橋 典彦 先生
『糖尿病患者の周術期管理について ～内科医の立場から～』
さっぽろ糖尿病・甲状腺クリニック 院長 竹内 淳 先生
特別講演
座長：北海道大学大学院医学研究科 外科学講座 消化器外科学分野Ⅰ 教授 武冨 紹信 先生
『肝胆膵の高難度手術の要点』
神戸大学大学院医学研究科外科学講座 肝胆膵外科学分野 教授 具 英成 先生

特別講演要旨
神戸大学大学院医学研究科外科学講座
肝胆膵外科学分野 教授 具 英成 先生
『肝胆膵の高難度手術の要点』

10/10 第２回North Japan Cancer Forumが開催されました。

2014年10月10日（金）19時より、メルキュールホテルにて第2回North Japan Cancer Forumが開催されました。

一般演題として、KKR札幌医療センターの谷道夫先生、渓和会江別病院の大森一吉先生、札幌厚生病院の松本哲先生より、カペシタビンを中心とした、抗癌剤使用の検討を発表していただきました。

また、特別講演として藤田保健衛生大学医学部外科学（肝臓・脾臓）講座主任教授の杉岡篤先生から「レネック被膜に基く新しい肝切除術式」をご講演いただきました。膜解剖を理解した精緻な手術法をわかりやすいイラストとそれに基いた手術動画を見せていただきました。会場は満席で、一部立ち見が出るほどの盛況のうちに会を終了することができました。

10/18 第２回アニマルラボが開催されました。

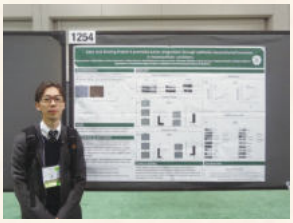
2014年10月18日（土）に第２回アニマルラボが開催されました。神奈川県川崎市にあるトレーニングセンターにて、今年度２回目となる内視鏡トレーニングが行われました。今回は上級医６名、後期研修医４名の参加となりました。

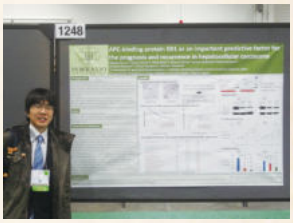
ラボでは、麻酔を施した豚を対象とし、腹腔鏡下における縫合結紮、幽門側胃切除術、高位前方切除術をタスクとして約６時間の濃厚なトレーニングを行いました。私達のチームは後期研修医３人の構成で、腹腔鏡下幽門側胃切除術を執刀するのは初めての経験でありましたが、３人で意見を出し合い、また上級医のアドバイスを受けながら、進めることができました。残念ながら完遂することはできませんでしたが、自分達の判断で視野を作り、切離し、止血し、手術を進めていく体験はかけがえのない経験となりました。今後この経験が、日々の手術や術書の見方を変えて、さらに高い学習効果をもたらすものと感じております。ご指導頂いた上級医の先生方、このような機会を頂きました皆様にこの場をお借りして厚く御礼申し上げます。

11/7 学会報告（AASLD Liver Meeting 2014）

2014年11月7日（金）～ 11日（火）にAASLD（American Association for the Study of Liver Diseases）主催のLiver Meeting 2014がボストンで開催され、昨年に引き続き今年も当科から４名（藤好真人先生、川村典生先生、大畑多嘉宣先生、相山健）が参加し発表して参りました。特に藤好先生はSub-normothermic machine perfusion preservation for graft selection and therapy in a mouse liver transplantation modelをParallel Sessionで発表され、The Liver Meeting 2014 Abstract Travel Awardを受賞されました（写真はひとつ前のお知らせに掲載）。

内容は近年日本で承認されました核酸アナログ製剤よりもさらに効果を発揮する製剤の発表や脂質代謝異常に起因する肝炎に関する発表が多かった印象ですが、海外での肝癌に関する研究発表も多少あり大変勉強させていただきました。来年も発表できるよう精進して参りたいと思います。



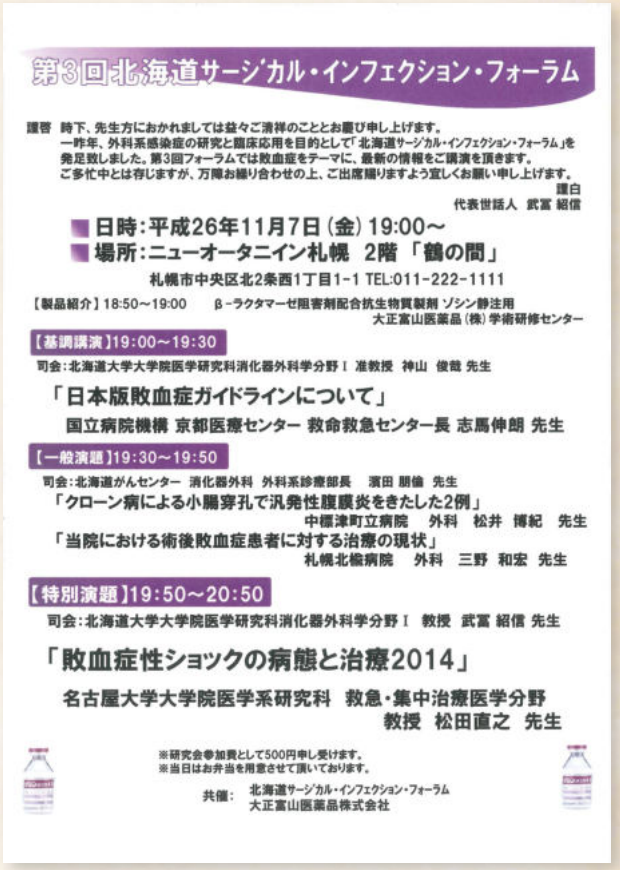


11/7 第３回北海道サージカルインフェクションフォーラムが開催されました。

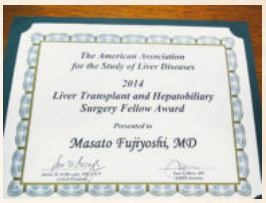
2014年11月７日（金）ニューオータニイン札幌にて、第３回北海道サージカルインフェクションフォーラムが開かれました。

一般演題として松井先生、三野先生に発表していただいたほか、基調講演として国立病院機構　京都医療センター救急救命センター長　志馬伸朗先生に、特別演題として名古屋大学大学院医学研究科救急・集中治療医学分野教授　松田直之先生に敗血症性ショックに関する演題をご発表していただきました。

すぐに明日からの臨床に応用できる内容で大変参考になりました。



11/7 藤好真人君がAASLD2014にてaward受賞！



2014年11月７日（金）～ 11日（火）にボストンで開催されたLiver Meeting 2014（AASLD）にて藤好真人君（平成15年入局）がThe Liver Meeting 2014 Abstract Travel Award を受賞しました。

世界初の体外灌流下保存グラフトを用いたマウス肝移植モデル作成が評価され、

Liver Transplant and Hepatobiliary Surgery Fellow部門では２名のみの受賞でした。

今後の益々の活躍を期待します。

11/8 平成26年度北海道大学消化器外科Ⅰ関連施設会議が開催されました。

11月８日（土）、臨床大講堂にて関連施設連絡会議が開催されました。各施設からの現状報告をしていただきましたが、時間調整などから十分な発表ができない施設もありましたことお詫び申し上げます。

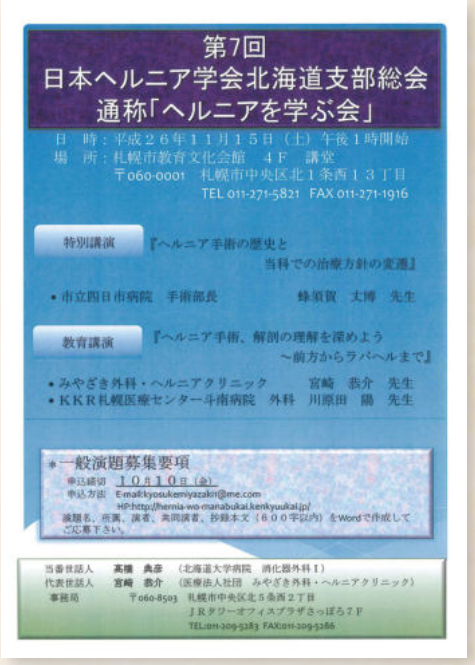
長時間にわたる会議でしたが、各施設で情報共有できたことは大変有意義であったと思います。

11/15 日本ヘルニア学会北海道支部総会が開催されました。

去る2014年11月15日（土）、当科講師高橋典彦を当番世話人とし第７回日本ヘルニア学会北海道支部総会が札幌市教育文化会館で開催されました。

例年にまして70名を超える多くの参加者にご来場いただき、熱いディスカッションで盛り上がりました。

関係者の方々、参加いただいた先生方、どうも有難うございました。



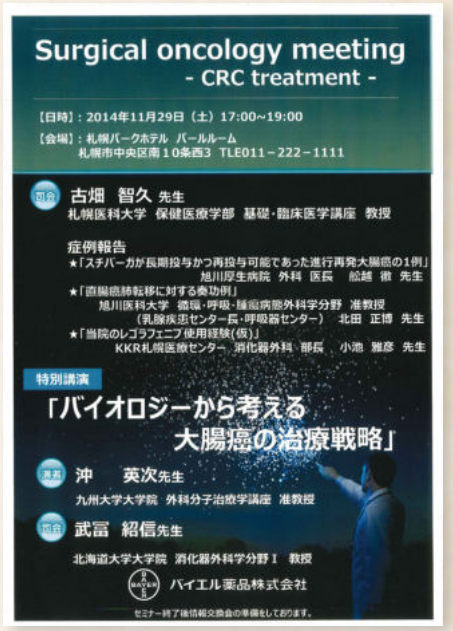
11/26 高橋典彦先生　お祝いの会

2014年12月１日（月）より、高橋典彦先生が手術部准教授に昇任することが決定し、ささやかながらメルキュールホテルにてお祝いの会を開きました。

消化管グループを長い間引っ張ってこられましたので我々としては残念な気持ちもありますが、手術部でのさらなるご活躍を祈念し会を終了いたしました。

11/29 Surgical Oncology Meetingが開催されました。

2014年11月29日（土）17時から札幌パークホテルにてSurgical Oncology Meetingが開催されました。一般演題として、旭川厚生病院・舩越徹先生、旭川医科大学・北田正博先生、KKR札幌医療センター・小池雅彦先生よりそれぞれレゴラフェニブの臨床使用経験につきご発表頂きました。また、特別講演として九州大学外科分子治療学講座准教授の沖英次先生に「バイオロジーから考える大腸癌の治療戦略」と題してご講演して頂きました。レゴラフェニブの基礎から臨床試験の解析結果、さらには実臨床での使用例とわかりやすくお話いただき、参考になることが多く非常に有意義な時間となりました。多くの方がご参加され、盛況のうちに会を終了することができました。



11/30 第18回医局対抗サッカー大会

今年度はサッカー経験者の入局者が例年より多く選手層の厚みが増したと密かに喜んでいたのですが、当日はなかなかメンバーが揃わず結局は例年通りの少ない人数での体力勝負となりました。参加されたことのある方は分かると思いますが、かなり体力的にきつい大会となっていますので、どなたでも構いませんので来年はぜひ時間を作って頂いて参加して頂けるとうれしいです。また、この時期の結婚は控えて頂ければ幸いです。

さて、本年度の内容ですが、個人的にはなんとかして連覇をしたいという気持ちで臨んだ大会ではありましたが、やはりその道は甘くなく、一昨年も昨年も決勝でしのぎを削り合った整形外科と準決勝で早々に対決することとなりました。前半に１点をとられ、後半にそれを取りかえしというかなり緊迫かつ白熱した試合展開となったのですが、残念ながら最後に1点を取られてしまい惜しくも準決勝で敗退し、最終的に整形外科が優勝し、我々は3位で大会を終えることとなりました。

最後に、寒い中応援してくださった方々に感謝いたします。来年は優勝しましょう！

決勝トーナメント参加メンバー

予選リーグ参加メンバー

12/6 第21回外科集談会が開催されました。

2014年12月６日札幌グランドホテルにて第21回外科集談会が開催されました。

今回のテーマは「ERASプロトコールを取り入れた術前・術後管理の工夫」ということで、各施設から導入後の改善点は問題点などを発表してもらい、活発な議論がなされました。

今後の診療の参考になったのではないかと思います。

12/6 平成26年度同門会忘年会

2014年12月６日に同門会幹事会、講演会、忘年会がニューオータニイン札幌で開かれました。

講演会では川村典生先生が「Cleveland Clinic transplantation center への臨床留学～アメリカの専門医育成プログラムの経験」という演題名でアメリカでの留学経験を発表いたしました。

引き続いての忘年会は130名以上の先生方が参加し大変な盛り上がりを見せ、まさに1年を締めくくる最高の会でありました。

12/11 今年度第２回目の鏡視下縫合結紮Competitionが開催されました

2014年12月11日（木）に消化器外科Ⅰ・医局内カンファレンスルームにおいて、今年度第２回鏡視下縫合結紮Competitionが開催されました。当科後期研修医８名、学生（５年生）２名が参加されました。教授以下多数の教室員が見守り､巨大スクリーンを見ながら、普段以上の緊張感の中で行われました。３分以上は打ち切り、普段と違う状況下、遠近感をつかみづらい、という難しい条件下でしたが、３分以上の打ち切り者は１人もいませんでした。全員タイムの向上を認め、見た目も非常にスムーズになっており、普段の練習による効果を実感したものと思われます。接戦を制したのは、前回に引き続いてまたしても学生で、５年生の松本君でした。頻繁にトレーニングに通っていた成果がでたものと思われます。おめでとうございます。賞品であるネーム入り術衣が近日中にプレゼントされる予定です。次回は来年３月に予定しています。皆さんの更なる成長を期待しています。

関連病院紹介

関連病院総手術件数（2006年～2013年）

▼施設名▼		2006年			2007年			2008年			2009年			2010年			2011年			2012年			2013年		
		全身麻酔	脊椎麻酔	局所麻酔	全身麻酔	脊椎麻酔	局所麻酔	全身麻酔	脊椎麻酔	局所麻酔	全身麻酔	脊椎麻酔	局所麻酔	全身麻酔	脊髄麻酔	局所麻酔	全身麻酔	脊髄麻酔	局所麻酔	全身麻酔	脊髄麻酔	局所麻酔	全身麻酔	脊椎麻酔	局所麻酔
がんセンター北海道	乳腺外科	–	–	–	–	–	–	–	–	–	259	0	119	280	0	180	300	0	120	300	0	150	312	0	141
	消化器外科	724	2	149	787	3	115	443	7	59	501	4	57	526	3	47	206	3	37	286	0	31	282	1	47
	呼吸器外科																			261	0	16	245	0	21
市立札幌病院		562	43	94	556	65	152	568	46	138	544	36	156	604	34	161	625	33	217	617	48	223	609	38	280
岩見沢市立総合病院		317	78	54	318	77	57	303	60	62	332	77	37	383	73	43	311	71	34	328	75	35	313	28	19
市立苫小牧総合病院		324	63	30	425	80	27	463	63	40	426	62	36	395	50	28	424	42	16	355	18	22	371	14	16
釧路労災病院		621	10	81	672	5	122	575	6	99	645	4	87	639	4	93	590	3	73	629	1	43	663	3	42
札幌厚生病院		941	5	23	943	1	25	917	2	11	944	–	23	934	2	32	964	1	27	953	1	38	1034	0	32
旭川厚生病院		571	142	27	641	79	29	773	54	23	694	70	8	652	80	16	719	0	0	702	0	0	711	5	12
帯広協会病院		464	120	67	394	109	59	390	100	37	474	0	36	427	0	20	436	3	22	459	10	10	438	13	12
KKR札幌医療センター		552	3	84	560	0	45	602	0	46	708	0	49	740	0	26	704	0	90	720	0	6	693	2	36
JCHO札幌北辰病院（社保総合）		491	4	34	461	5	41	422	3	26	430	1	27	360	0	22	387	0	21	383	0	22	320	0	33
日鋼記念病院		738	86	50	708	60	37	574	60	53	560	39	34	583	31	24	540	33	22	514	35	22	602	23	23
市立函館病院		659	66	86	622	63	77	682	52	61	775	18	96	765	21	89	683	32	69	703	32	72	641	60	83
北海道医療センター		391	6	73	331	3	57	358	2	53	405	6	72	484	1	58	415	5	48	440	12	49	463	2	39
市立稚内病院		190	51	3	209	37	5	198	49	10	171	45	5	226	42	7	226	32	2	225	11	0	240	0	0
士別市立病院		144	52	75	137	39	83	89	36	85	84	41	75	91	46	79	123	26	76	147	1	91	106	2	100
砂川市立病院		285	86	13	293	110	5	396	12	7	397	10	3	370	0	30	395	7	32	430	5	34	389	3	35
小樽市立病院		217	39	76	251	37	112	260	31	117	235	38	114	244	26	130	265	38	137	276	29	135	299	31	105
市立千歳市民病院		217	40	22	226	39	6	201	41	5	225	21	10	206	40	6	245	4	12	201	25	5	215	17	9
網走厚生病院		316	33	31	365	22	40	360	11	45	352	7	23	312	12	27	315	4	19	316	6	22	316	6	12
JCHO北海道病院（北海道社保）		469	6	40	426	7	35	451	5	26	381	7	25	399	3	14	450	3	11	385	2	3	424	–	8
天使病院		441	7	26	398	4	21	404	2	17	363	–	24	407	1	20	412	0	14	407	0	12	489	0	13
渓和会江別病院		205	60	102	236	54	140	215	57	169	243	53	181	210	61	180	213	83	219	253	50	127	261	49	262
札幌北楡病院		520	20	431	556	7	660	570	10	639	471	14	744	563	14	741	548	30	768	479	20	720	345	6	840
北晨会恵み野病院		301	6	62	318	6	42	304	11	35	350	5	50	339	0	28	343	0	14	329	1	20	314	2	27
苫小牧日翔病院		225	30	76	214	25	88	215	8	95	217	7	100	198	29	83	193	11	99	213	4	102	200	6	115
市立美唄病院		56	38	106	38	33	116	41	46	128	41	32	102	41	35	124	25	16	124	1	4	120	3	4	33
市立三笠総合病院		70	24	95	80	22	101	71	25	115	63	26	118	50	27	126	53	24	68	50	16	98	56	15	124
斜里町国保病院		30	14	7	13	20	11	17	13	24	0	0	0	12	7	5	22	18	21	16	10	23	21	15	32
町立中標津病院		124	29	22	144	5	18	153	9	22	165	19	14	165	21	11	168	19	11	218	3	4	193	1	3
十勝いけだ医療センター		0	6	12	1	4	2	0	2	2	0	4	1	0	0	0	0	0	0	*	*	*	*	*	*
厚岸町立病院		18	17	25	23	28	21	14	35	24	5	9	12	0	10	8	0	7	7	*	*	*	*	*	*
長万部町立病院		0	0	12	0	0	20	–	–	29	–	–	22	0	0	27	0	0	12	0	0	0	*	*	*
せたな町立国保病院		0	1	60	0	0	60	–	–	60	–	–	60	0	0	65	0	0	65	*	*	*	*	*	*
森町国保病院		0	2	216	0	0	200	0	0	200	0	0	100	0	0	100	0	0	100	0	0	0	0	0	200
西さっぽろ病院（旧河西外科）		0	0	0	60	109	61	62	111	79	74	103	94	72	64	175	124	65	166	166	56	142	169	40	131
静和記念病院		211	1	15	191	0	37	159	0	37	164	0	29	148	0	24	150	0	21	144	2	14	121	0	15
洞爺協会病院		57	7	100	75	2	100	52	–	100	57	5	100	46	7	70	62	2	70	69	9	100	61	–	100
網走中央病院		23	17	不明	0	0	0	12	19	–	12	23	–	24	21	不明	29	13	不明	–	–	–	–	–	–
北札幌病院		2	6	14	0	6	21	2	2	16	0	8	20	0	6	31	0	9	23	0	3	28	0	1	26
札幌北クリニック																				–	–	–	–	–	–
北海道対がん協会																				0	0	0	–	–	–
すずかけセントラル																				–	–	–	74	2	40
はまなす医院																				2	1	20	4	–	22
静仁会静内病院																				83	6	66	–	–	–
総計		12,042	1,359	3,163	12,297	1,389	3,595	11,885	1,231	3,614	12,077	992	3,396	12,149	942	3,505	11,969	788	3,432	12,060	496	2,625	11,997	389	3,088

旭川厚生病院

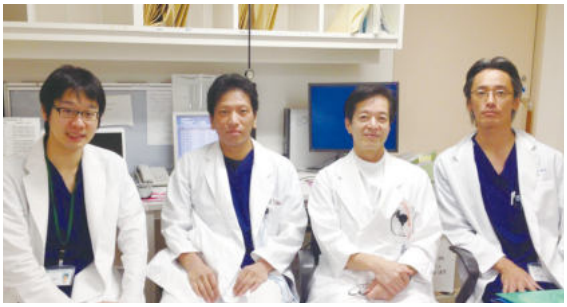
前列両端は研修医です。前列左二人目より柳田・中野・赤羽、
後列左より梅本・舩越・木村・蔵谷です。

旭川厚生病院外科は、昨年同様、北大一外から７名、旭川医大二外から２名、他１名からなります。（若手医師１名は呼吸器外科兼任）。当院の病床総数は539床、外科病棟は３階東病棟59床です。ここ最近は稼働率も良く、臨時入院の患者が外科病棟に入れず、他科の病棟を借りることも多いくらいです（かといって、外科の売り上げが劇的にのびているわけでもありませんが…）。

消化器外科全般を診療対象とし、上下部消化管、肝胆膵、ヘルニア、乳腺、と多岐にわたります。食道がん、膵・胆道がん、肝がんなど高難度手術も少なくありません。ここ数年の年間手術症例数は700例余りです。胃癌・胆石が減少傾向、大腸癌・ヘルニアが増加傾向です（胃癌手術の減少傾向は大体どこの施設でも同様でしょうか）。腹腔鏡手術への取り組みは昨年同様積極的に行っています。柳田が昨年ようやく技術認定医をとりましたので今までほぼ一人で行っていたLDGを他のスタッフにも指導していきたいと考えていますが、症例数が減少傾向なのが悩みの種です。LAC、ラパヘルは昨年赴任した舩越が中心となり、定型化、指導に熱心に取り組んでいます。また今後、食道を腹腔鏡下に行うべく動き始めております。

（文責：柳田尚之）

網走厚生病院



【スタッフ数】４人（西川眞副院長、下國達志先生、長津明久、木井修平：2014年度）
【病床数】309床（うち外科34床）
【年間手術件数】341件（全身麻酔318件、局所麻酔23件：2014年１月～12月）
【病院の特色】風光明媚なオホーツク地方の拠点病院である当院は、網走市において最も高い建造物であり、知床連山やオホーツク海を一望することができます。中でも９階のデイルームから望む流氷の景色は一見の価値があります。医療過疎が進む斜網地区（網走市、美幌町、大空町、斜里町、小清水町、清里町）の医療を担っており、当科に加え、消化器内科・循環器内科・産婦人科・小児科・整形外科・眼科・耳鼻科が外来、入院対応を行っております。当科では地域のニーズに対応すべく消化器、呼吸器、および乳腺の手術治療と化学療法、内分泌療法を行っております。
【近況】地方に於いても質の高い医療を提供するため、適切な症例があれば大学のスタッフの先生方に手術協力を頂いております。また、他地区と同様鏡視下手術の定着を図っており、2014年には全手術に対する鏡視下手術の割合が48.2%となりました（2011年：22.7%、2012年：40.1%、2013年：42.9%）。若手の教育にも力を入れており、今年度勤務の木井先生の術者件数は９ヶ月間で約100件となっております。　（文責：長津明久）

岩見沢市立総合病院

2014年度の岩見沢市立総合病院外科は中島保明院長はじめ伊藤浩二副院長・上泉洋・横山良司・市川伸樹・辻健志・大平将史の総勢７名です。内視鏡外科学会の技術認定を取得した市川医長が赴任し内視鏡下外科手術の割合が格段に増えました。若い先生が出来るだけ手術を執刀出来るような配分を常に配慮しています。消化器疾患、肺疾患・甲状腺・乳腺疾患など幅広く手術を行っています。

当院では42床の外科病棟だけでなく40床の透析病棟、250人が治療を受ける透析センターも外科管理です。透析に２名の専属医師（稲垣尚人・田中徳彦）もおりますが、緊急血液浄化・内シャント手術・PTAなどを中心に合同で治療にあたっています。MOFの治療は集中して当院に来ます。

岩見沢市・夕張市・美唄市・三笠市・南幌町・由仁町・長沼町・栗山町・月形町の４市５町を含む南空知地区の総面積は2,563㎢で東京都全体の2,187㎢を上回り、総人口175,000人で、当院はこの中心的役割を担っています。札幌からも近く、新千歳空港も裏道を通ると１時間ほどで行くことが出来、アクセスは良好です。豪雪地帯であり札幌に行かなくても十分に毎日雪祭りの雰囲気を楽しむことが出来ます。

（文責：上泉　洋）

小樽市立病院

2014年12月１日、小樽市立病院は地上７階地下１階、21診療科を備えた総病床数388床（一般302床、精神80床、結核４床、感染２床）の新病院に生まれ変わりました。今後さらに診療科の増加も予定されておりまさに成長期の病院といえます。もともと小樽市の自治体病院は「市立小樽病院」と「小樽市立・脳・循環器・こころの医療センター」に別かれていましたが、紆余曲折18年ようやく２つの市立病院が統合新築されました。屋上にはヘリポートを有し、北海道がん診療連携指定病院、災害拠点病院、初期被ばく医療機関として指定され小樽後志医療圏の拠点病院として地域を牽引する役目を担っています。ハイブリッド手術室、バイオクリーンルーム、さらに３テスラMRI、最新PET-CTを完備、心臓血管外科、脳外科とともに高度医療の実践の場として活動しています。

2014年外科の総手術件数は490件（全身麻酔350件、腰椎麻酔18件、局所麻酔122件）、今年は新築効果もあり手術件数は増加しています。特に複数化にまたがる疾患が増えました。ここ数年腹腔鏡手術の割合はうなぎのぼりに上昇し、緊急手術も可能な限り腹腔鏡で対応しています。現在外科スタッフは正職員４名（権藤寛副院長、越前谷勇人主任医療部長、渡辺義人医療部長、藤好直外科医長）、嘱託医１名（川俣孝前副院長）で手術や化学療法の他、研修医６名（１年目３名、２年目３名）の教育と指導に当たっています。

（文責：越前谷勇人）

帯広協会病院

左より　許先生、阿部先生、金沢先生、及能先生、永生、渋谷先生

帯広協会病院はスタッフ６名（及能院長・阿部副院長・許部長・永生主任医長・渋谷医員・金沢医員）で十勝管内の急性期病院の一つとして地域に貢献しています。手術症例は年々増加しており平成26年はとうとう500例以上になりました。消化管手術に関しては昨年より大学からご指導を頂いて腹腔鏡を積極的に導入しており現在定期の大腸癌手術においては腹腔鏡率が80%を超えました。当院の方針として手術は基本的にできうる限り修練医が行い（現在では渋谷医師（５年目）・金沢医師（４年目））手術症例数および手術内容も充実しています。ただそれなりに忙しいので元気で体力のある修練医を待っています。また学会発表も積極的に行っており今年度はとうとう英語論文もPublishされました。

帯広は天気がよく雪が少なく食事もおいしい暮らしよいところです。立地的にも札幌は日帰り可能で、休日も月に週末完全フリーが２週以上あるので私自身は帯広生活を思いっきり満喫しています。飲み会も多いほうで外科スタッフだけではなく外来や病棟・検査の人たちとも定期的に行っています。最近帯広のお店もわかってきましたのでお近くにお立ち寄りの際は是非ご連絡ください。

（文責：永生高広）

独立行政法人労働者健康福祉機構釧路労災病院外科

８階西（外科）病棟NSにて
後列左から　河合朋昭　小林篤寿　島田慎吾　宮岡陽一
前列左から　鈴木崇史　小笠原和宏　小林清二

北は知床、東は納沙布岬まで、道東の医療圏は広大です。寒冷・過疎・高齢化を加えて４K地域の医療を釧路市が支えています。当院も、二次救急を含む地域医療の中核病院であり、がん診療連携拠点病院・地域医療支援病院・臨床研修指定病院としても地域から期待されています。

当科は、消化器・乳腺・緩和ケアを三本の柱として診療しています。小笠原副院長以下７名のスタッフで、定数52床の入院と１日平均70名の外来診療を行っています。2014年の手術実績は640件（全身麻酔581件）で、主な疾患は食道癌７例、胃癌44例、大腸癌120例、肝胆膵癌16例、乳癌55例、肺癌６例、虫垂炎43例、胆石症94例でした。悪性疾患が243例（38%）を占め、消化器・腫瘍内科と連携して数多くの診療を行っています。緩和ケア病床も担当し、予防・診断・治療からEnd of Life Careまで診療できる総合的な臨床外科医の育成を心掛けています。全国の労災病院とも共同研究を通じて連携を図りつつ、産業医や各学会専門医の資格取得のための環境も整っています。チャレンジ精神にあふれた外科医の来釧を楽しみにしています。

（文責：小笠原和宏）

KKR札幌医療センター

【スタッフ紹介】北大消化器外科分野Ⅰから赤坂院長、小池診療部次長、田村腫瘍外科部長、武田部長、今血液浄化センター長、小柳医師、谷医師がスタッフとして在籍しており、他に呼吸器外科として、熊本大出身の桑原部長、後期研修医の大槻医師、更に初期研修医１名の体制で診療を行っています。
【病床数】消化器一般外科・乳腺外科・呼吸器外科合わせて55床ほどです。
【手術件数】例年700件ほどの手術をこなしていますが、昨年は過去最高で730件を超えました。内訳は大腸癌100例、肺癌・乳癌も100例、胃癌は50例ほどです。胸部食道癌も３例ありました。
【病院の特色】形成外科・精神科を除く、全科が揃っており、救急にも力を入れている病院です。
【特に力を入れている分野】鏡視下手術には力を入れており、昨年今先生が技術認定医を取得したため、一層拍車がかかっています。大腸癌の90%以上、胃癌の50%以上、肺癌の90%以上が鏡視下手術となっています。さらに鼠径ヘルニア・虫垂炎もほとんど鏡視下手術となっています。
【近況】本年度赴任した小柳医師は、膵頭十二指腸切除、腹腔鏡下胃手術、腹腔鏡下低位前方切除など一人前の外科医となっており、全く術者経験なかった谷医師は、既に開腹胃切除、腹腔鏡下結腸切除も多数執刀しています。

（文責：小池雅彦）

渓和会江別病院

渓和会江別病院は1988年、故品田佳秀先生が中心となり開院、以後江別市・当別市などの地域の急性期医療の中核を担って26年になります。外科は理事長兼院長である南田猛先生のもと、副院長の大森一吉先生を中心に、部長・野村克先生、医長・佐々木彩実先生、同じく医長・佐藤正法の計５名で外科・透析診療を行っております。

日本外科学会専門医、消化器外科学会専門医、がん治療認定医、臨床研修医等の研修施設認定を受けております。全麻手術は2014年は290例で、胃癌20例、大腸癌44例の他、PD等の胆膵悪性腫瘍手術も13例、肝切除術８例、さらに食道癌の手術も年によりますが数例経験できます。一方で、若手向けの胆石・胆嚢炎・総胆管結石、ヘルニア、急性虫垂炎等の良性疾患の手術もコンスタントに入る他、透析用の内シャント造設術、腸閉塞症手術、乳腺・甲状腺、肺癌、腎摘、気胸手術など症例がバラエティに富んでいるのが特徴です。

外科で手術した悪性腫瘍の患者さんは原則外科でフォローしますので、化学療法の経験も積むことができます。また、月に数回の災害救急当番日の当直の時には、肘内障・骨折から吐下血、心肺停止まで実践的な救急医療を経験できます（土日の救急当番の際には大学の若手の先生方に大変お世話になっております）。外科医として戦う臨床能力を鍛えるには非常に良い病院と思います。

（文責：佐藤正法）

札幌北クリニック

札幌北クリニックは、昨年３月にご逝去された今忠正先生が、昭和45年４月に北区に開設した透析専門クリニックで、昨年開院40年を迎えました。現在透析ベッド数は45床で、月水金は夜間透析を含めた３クール、火木土は２クールの体制で外来透析患者さんを診療しております。常勤医師は院長、増子佳弘、顧問、大平整爾の２名で、第一外科の諸先生や他科の非常勤医師の方々にお手伝いに来ていただき、なんとか支えられております。

他にNs、CE、事務などのスタッフが約30名おります。

手術関連ですが、バスキュラーアクセスの局所麻酔手術を年間15件くらい行っており、その他にエコーを活用したインターベンション治療を30件ほど行っております。

第一外科では人工臓器をテーマに研究していた歴史があり、現在も関連病院で外科が透析を管理している施設が複数あります。医局の若い先生方に透析を理解してもらいたいという今忠正先生の意向により、開設以来たくさんの第一外科の先生に関わっていただきました。これからもご支援よろしくお願いします。

（文責：増子佳弘）

札幌厚生病院外科

2014年度は、教室からは高橋昌宏、高橋弘昌、石津、益子、秦、高橋周作、田原、植木、１ヶ月交代での出張医の９名と、田中（東京医大Ｓ63年卒）、山上（旭川医大Ｈ５年卒）、久慈（自治医大Ｈ11年卒）、谷岡（高知医大Ｈ17年卒）、松本（旭川医大Ｈ18年卒）の５名、計14名で診療しました。また、嘱託医として安達武彦先生に乳がん検診を担当していただきました。

甲状腺は高橋弘昌、乳腺は秦・田中、呼吸器は田中、胃は高橋昌宏・高橋周作・松本、大腸は高橋昌宏・益子・山上・久慈、肝胆膵は石津・田原・植木、ヘルニアは谷岡と臓器別に中心となる医師を決め、それぞれの専門性を高めるよう努めました。同時に、若い医師にはなるべく多くの症例を経験させるよう努めており、今年度は植木、谷岡の二人が無事、消化器外科学会の専門医に認定されました。

教室から武冨教授、川村先生、開成病院から高田先生、はまなす医院から工藤先生に手術応援をしていただき、おかげさまで2014年１月からの年間手術件数は1087件となりました。内訳は全身麻酔が1058件、局所麻酔が29件です。肝切除例が初めて100件を超しました。この場をお借りしてお礼をさせていただきます。

（文責：石津寛之）

札幌北楡病院

当院は白石区の環状通に面し、南郷通と国道12号線に近く利便性の良い病院です。一般・消化器外科の推進、移植医療の展開、人工臓器開発と臨床応用、高度先進医療技術の開発と実践を旗印に急性期医療施設として昭和60年に開院されました。総病床数は231床で外科を含め14の診療科があります。外科のスタッフは川村明夫、米川元樹、目黒順一、久木田和丘、小野寺一彦、堀江卓、飯田潤一、服部優宏、土橋誠一郎、後藤順一、三野和宏の11名で昨年より２名減りました。透析・血管外科チームと一般外科・消化器外科チームに分かれて診療に当たっていますがお互いに協力し合っています。2014年の外科手術件数は1164例で全身麻酔件数は348例でした。消化器外科は内視鏡外科を重点的に行っており、単孔を含めたReduced Port Surgeryも積極的に行っています。更に、ダヴィンチを用いたロボット支援手術を導入し、症例を積み重ねております。また、透析関連では内シャント造設、血管グラフト留置、Blood Accessトラブルに幅広く対応し道内の多くの透析施設からの信頼を得ております。今後ともよろしくお願いいたします。

（文責：服部優宏）

士別市立病院

士別市は、札幌と稚内のほぼ中間点に位置し、札幌から高速道路で２時間ほどの人口２万人の小さな市です。水と緑に囲まれた田園地帯で、夏は適度に暑く、朝夕は涼しいことから、オリンピック選手や実業団チームの合宿地となっています。冬は非常に寒さが厳しいので、トヨタやヤマハの寒冷地テストコースがあります。東はオホーツク海、西は日本海に挟まれ、海までの道はバイクのツーリングに最適です。

当院は街を見下ろす丘の上にあり、307床で開院しましたが、現在は150床で運営しております。そのうち外科は約30床で、透析センターも外科が担当しています。診療科は他に消化器内科、循環器、整形外科の常勤医がいて気軽に相談することができます。外科は山賀（写真左）と三國（写真右）の常勤二人体制ですが、週末は大学から当直を派遣して頂いているので交代で休みが取ることができます。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

二人で2014年は238例（全身麻酔127例）の手術がありました。大きな手術の時は前副院長の澤谷先生（写真後列）が手伝いに来てくれています。主な手術件数は、胃癌14例、結腸癌19例、直腸癌４例、胆石を除く肝胆膵の手術は17例で胆膵系の紹介が増えています。当院も医師不足の地方病院ですので、外科以外の症例も診ざるを得ない場合が多々あります。それも勉強にはなりますが、やはり若い外科医の方には外科手術、周術期管理に専念してもらいたいと考えています。透析や総合診療的な部分は我々年寄が担当しますので、若い方に是非士別に来て頂きたいと思います。　（文責：山賀昭二）

市立札幌病院　外科

外科スタッフ９名と後期研修医２名で診療を行っております。今年度から皆川・葛西の両医師が加わり診療体制に厚みが出ました。内視鏡外科技術認定医を取得した皆川医師のもと、下部直腸に対する鏡視下手術も始めました。また、前任地でラパヘルを立ち上げた葛西医師が当院のTAPPの立ち上げにも尽力してくれました。４月からは寺崎医師が加わり、ますますマンパワーが充実する予定です。2014年の手術件数は、全麻641件、腰麻24件でした。主なものとして、乳腺疾患：100例（一期再建７例を含む）、胃癌：47例（腹腔鏡下15例を含む）、結腸癌：70例（腹腔鏡下44例）、直腸癌：20例（腹腔鏡下10例）、胆摘：73例、肝切除：28例（原発12、転移16（大腸癌同時切除２例を含む））、PD：７例（膵癌３、PNET ２、IPMC １、胆管癌１）、DP：６例（膵癌１、IPMN ２、NET １）、食道手術：３例（食道破裂１、下部食道癌１、食道瘻造設１）、成人の鼠径・大腿ヘルニア：55例（TAPP37例を含む）、小児鼠径ヘルニア：23例、ヘルニアを除く小児手術は６例でした。院内のCVポート留置のほとんどを請け負っており、この一年では197件でした。地域の二次三治救急や外科的処置が必要な精神医療センターの患者さんにも対応しております。

（文責・大島隆宏）

市立千歳市民病院

千歳市は人口９万５千人、新興工業地帯および札幌のベッドタウンとして年々人口が増加しており、若い所帯（平均年齢41歳：全道若年１位）の多い地域です。当院は千歳市唯一の急性期総合病院で総病床数190床、外科は病床数20床、昭和42年の開院以来第一外科の諸先輩方が勤務されており、現在は川向裕司、福島剛、安念和哉、谷安弘の４名で診療にあたっております。

年間手術数は平均250件（全麻220 ～ 230件）で、消化器、乳腺、呼吸器全般にわたり標準的レベルの手術は行っておりますが、昨年度からは教室の先生方にもご指導いただきながら鏡視下手術を中心に外科としてのさらなるレベルアップを図っております。

千歳市および夕張までの南空知地区の救急医療の中心施設でもあり、外科においては365日24時間体制で交通外傷や腹部救急患者の対応にあたっており、昨年は247件の救急患者の受け入れを行いました。

小規模な病院ゆえに各診療科、各部門との風通しは良好で、緩和ケア、皮膚排泄ケア、癌化学療法看護の３分野の認定看護師も在籍しており、いずれの分野においても外科が中心的役割を果たしながら、病院理念である「より質の高い心あたたまる医療の実現」を目指しております。

（文責：福島　剛）

市立苫小牧病院

当院は、平成18年に新築された清潔感あふれる白亜の建物で、札幌市の南東約65km、苫小牧中心部の東側に位置しています。病床数は385あり、18の診療科を有する胆振地方の基幹病院です。救急対応している地域は、東は日高地方、西は白老、北は千歳近郊（早来、鵡川）となり、これらの総面積は約7725平方kmになります。これは宮崎県の面積（全国14位）にほぼ匹敵しており、救急要請から当院に到着するまで、２時間かかることも稀ではありません。

当院にとって平成26年度は、２つの大きな出来事がありました。まず、松岡伸一先生（57期）が新院長として４月に赴任されました。佐治副院長と共に、病院全体の運営を担っておられます。次に、札幌医大の麻酔科医４名が常勤医となったことです。昨年度までは、臨時手術の際苫小牧王子病院の医師に、日勤終了後に麻酔をかけていただくこともありました。今年はそういった心配なく、スムーズに臨時手術に対応してもらっています。

外科のスタッフは、院長と副院長を除いて４名（廣瀬、崎浜、花本、加藤紘）で日常診療にあたっています。

2014年の手術件数は385件（内全麻371）あり、その内定期は284件、臨時は101件でした。当科の特色は２つあります。まず鏡視下手術を積極的に行っていることです。原発胃癌30（鏡視下12）、結腸癌40（同26）、直腸癌17（同10）でした。次に、肺と肝臓に対する手術も行っている点です。肺疾患に対する鏡視下手術は32例であり、内18例が悪性肺腫瘍（原発、転移性）でした。また毎週水曜日、神山先生に手術の応援に来ていただいています。肝切除は７例（原発４、転移２、膿瘍１）でした。今後も近隣の医療機関と連携しながら、胆振～日高地方の基幹病院として、その役割を担っていきます。

（文責：崎浜秀康）

市立函館病院

（向かって左から）
小林（初期研修医２年目、平成27年４月入局予定）、砂原、木村、大野、常俊

市立函館病院は、万延元年（1860年）「箱館医学所」として創立した北海道初の官立病院で、26診療科、668床からなります。道南全域と下北半島北部を診療圏とする地域の基幹病院で、診療対象人口は約50万人です。地域がん診療連携拠点病院、災害拠点病院、臓器提供施設などの指定を受け、平成27年には、ドクターヘリの運用開始が予定されています。

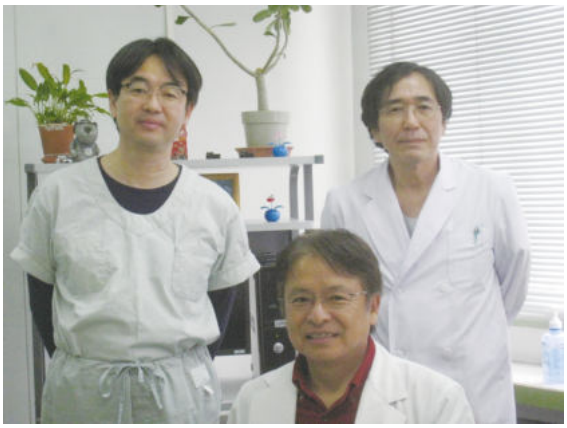
医師数は114人（うち初期研修医25人）、消化器外科・乳腺外科は10名で、うち４名が北海道大学第１外科、６名が弘前大学第２外科からの派遣です（平成27年度から北大が５名に増員）。北大が肝胆膵、弘大が消化管を担当し、若手はローテートします。手術数は年間800件前後で、３次の救命救急センターを併設しているため、緊急・重症症例が多い傾向にあります。

当院では、臨床研究を医療者の必須の業務と考え、病院が積極的に支援する体制が整っています。現在、「胃癌に対するセンチネルリンパ節生検の臨床導入」などに取り組んでいます。2014年は、論文発表（和文）２編、国際学会発表１題、外科学会、JDDWなどの全国学会・研究会発表は35題でした。

「多くの症例を経験したい」、「臨床研究にも取り組みたい」、さらに「専門医などの資格を短期間で取得したい」という方には当院がおすすめです。

（文責：砂原正男）

市立三笠総合病院



市立三笠総合病院は、炭鉱閉山後、人口が減少し少子高齢化が進んでいるなか、市民のニーズに応えるべく、総合的な医療を提供し続けています。総病床数は199床（一般91床・療養43床・精神65床）で、標榜診療科は12科（内科、循環器科、外科、整形外科、小児科、皮膚科、泌尿器科、耳鼻咽喉科、眼科、精神神経科、人工透析科、リハビリテーション科）です。常勤医は11人、うち外科医は、石黒敏史、羽田　力、内藤昌明の３人です。多くの高齢者が当院を頼りにしている状況のなか、手術、臨時の際の麻酔、術後の化学療法のほか、内視鏡などの検査、感染症、褥瘡の治療など、外科の業務は多岐にわたっています。昨年の手術は、全身麻酔36件（胃癌３件、結腸癌５件、直腸癌４件、直腸癌および乳癌１件、転移性肝癌１件、腎臓癌１件、胆石症６件、消化管穿孔による腹膜炎手術３件、虫垂炎１件、その他11件）、腰椎麻酔19件（鼠径ヘルニア11件、虫垂炎１件、その他７件）で減少傾向にありますが、昨年より、胆石症だけでなく、胃癌、結腸癌、直腸癌においても、症例を選び腹腔鏡手術を始めています。今年も、職員の方々が、病院正面の道路を挟んだ空地に雪像を作りました。今年は妖怪ウォッチで、昼は、併設された滑り台で子供たちが遊び、夜は、スポットライトに「おだいじに」の文字が浮かび上がります。寒さ厳しいなか心温まる光景です。

（文責：内藤昌明）

市立稚内病院

現在市立稚内病院は、橋本卓、菊地弘展、川俣太、杉山昴の４人で診療にあたっております。当院は広大な宗谷管内で唯一手術可能な施設であり、私たちは管内で発生するケガや病気を幅広くカバーし皆様の健康と生命を守るべく努力しております。

外科病床数は28床あり、年間手術件数は200-250くらいで推移しております。内臨時手術が約３割強を占めています。

また、2010年10月からは血液透析センターの業務も担当しており、約100名の血液透析患者さんの診療にも当たっています。月水金は２部、火木土は１部体制で行っております。

そのほか警察署より委託され、検案業務も施行しております。年間80前後の検案があり、様々な御遺体の検案を行っております。

循環器内科の常勤医が不在な為、循環器疾患が発生した場合には搬送業務を依頼される場合もあります。名寄まで片道約３時間、ドクターヘリの場合には豊富のヘリポートまで片道約１時間となります。

（文責：菊地弘展）

新札幌聖陵ホスピタル

「新札幌聖陵ホスピタル」は、昭和58年に開院した新札幌産婦人科病院（佐竹實先生：元札医助教授、現名誉理事長）を源流として、かつて教室の関連病院であった康信病院（教室では有里、青木、西部、片山らが出張した）の仲間を基盤に医療法人翔嶺館（理事長は佐竹博文先生）として平成15年に開院した。私は平成26年10月に就任した。

病棟は一般病床・障害者病床41床、年間局麻件数約120件。その他、高気圧酸素室、透析室も稼働している。現在、20床を増設開設し（平成27年４月オープン）、また近い将来にはグループ内の病床を移設増床する計画がある。

グループ内の病院は十勝の杜病院など全部で４施設、そのほかにヘルスケアセンターも９施設を有する。老人保健施設の訪問診療など高齢者の診療が中心である一方で、ジェネテイック薬剤の治験も数多く行われている。

外来ではUS、CT、MRIなどの諸検査はすぐに実施可能、結果も直ちに提供できるスピーデーな対応をとっている。地域の一般医療を幅広く担うほかに消化器病、肝臓、脳神経、などの学会専門医を配した疾患別外来・脳ドックや認知症外来も行われている。医師は私（院長）ほかに４名いるが、この春には偶然にも、松久忠史先生が参加してくれることとなった。関連の十勝の杜病院には片山富美夫先生がいる。

（文責：佐藤直樹）

JCHO札幌北辰病院

今年度から当院の名称は札幌社会保険総合病院からJCHO札幌北辰病院となりました。外科の診療は現在、佐々木院長、中川副院長、高橋、正村、旭、豊島の６名で行っております。病院全体の病床数は227床あり、そのうち外科は28床となっています。2014年の手術件数は368件で、内訳は主なもので、乳腺22例、胃29例、肝臓11例、胆嚢33例、胆管６例、膵臓３例、虫垂24例、大腸60例、ヘルニア86例でした。当院の特徴としては厚別区の拠点病院の一つとして機能しており、近隣クリニックからの虫垂炎およびヘルニアから各種癌の症例まで様々な疾患が紹介されています。さらには北広島、恵庭、長沼などからも多くの患者様が受診されています。また、腹腔鏡手術に力を入れており、昨年の腹腔鏡手術の割合は、胃切除87%、胃全摘44%、胆摘72%、結腸切除58%、直腸切除60%、鼠径ヘルニア手術27%、虫垂切除100%でありました。今年度には小児の鼠径ヘルニアに対しても腹腔鏡手術を導入しました。今後も最新の医療を取り入れ、地域医療拠点病院としての役割を果たしていきたいと考えています。

（文責：高橋　学）

JCHO北海道病院

岡田先生の初肝切後。
満足そうな岡田先生（左端）とにやにやしている沢田先生（右端）。
出血や胆汁の漏れがないか気が気でない中西（中央）は場所を変わってチェック中。

北海道社会保険病院は2014年度から地域医療機能推進機構（JCHO）北海道病院となりました。独立行政法人が直接経営・運営することとなり、多少融通が利かなくなりましたが、日常臨床にはさほど影響はありません。外科は25床で、2014年度は数井啓蔵部長のもと、中西一彰、片山知也、岡田尚樹、沢田尭史の５名で約420例の（うち全麻約410件）の手術を行いました。手術は例年どおり、ヘルニア、乳腺・甲状腺などの体表外科から下部食道から直腸までの消化管、肝胆膵、肺とバリエーションが豊富でした。今年は後腹膜腫瘍の当たり年で重さ５kgの脂肪肉腫や径20㎝のsolitary fibrous tumorなど計５例ほど経験しました。当科の特徴は若手にどんどん手術を執刀・経験してもらうことで、昨年度までは最若手が200例程度の症例を執刀できました。しかし2014年度より武冨教授､教室のご厚意により若手スタッフが１名増員となったため、それぞれ100例（岡田Dr）、120例（沢田Dr）となりました。その分やや厳しめの症例もトライしてもらっています。今年も当初は皮切もぎこちなかった沢田先生が、幽門側胃切除や右半結腸切除、肝部分切除などを立派にこなすようになりました。岡田先生にも胃全摘、残胃全摘、肝外側区切除等をやってもらいました。内視鏡手術は本年度も教室から毎週本間重紀先生に応援きていただき、技術認定習得を目標に指導してもらっています。昨年度、集中的に指導していただいた市川伸樹先生がみごと技術認定を取得できました。今後も引き続き、当科の内視鏡手術の定着、レベルアップのためにお願したいとおもいます。その他、肺切除（VATs葉切除）、肝切除（いわゆる高度技能手術や再肝切除）はそれぞれ毎年30～40例、安定して紹介され数井先生・中西がそれぞれ若手と一緒に手術することで技術を伝えたいと思っています。

2015年度も若手に技術・知識のみならず外科医・医者として大切な人間性・倫理観をしっかり指導し、育てていきたいと思っています。また我々、指導的立場の人間ももっと研鑽を積んでより良い医療を行いたいと思っています。

（文責：中西一彰）

すずかけセントラル病院

静岡県浜松市南区に位置するすずかけセントラル病院　外科　今井です。鈴木　友己先生と自分で2013年４月から消化器外科として勤務し、もうすぐ２年経過します。2013年度の手術件数は116件（全身麻酔74件、全身麻酔以外42件）、2014年度は４月～ 12月までの９か月で101件（全身麻酔79件、全身麻酔以外32件）の手術を施行しており、おそらく150件ほどになりそうです。手術体制としては2015年４月からは麻酔科医が２人常勤となり、さらに５月からは現在手術室が２室なのが３室に増築され、毎日手術可能な状況になります。この２年間で周囲の開業医からの紹介も徐々に増えてきており、2015年度は200件以上の手術件数を目標としています。手術件数を増やし、新しい人員の確保を合言葉に二人で頑張っております。また昨年度で日本外科学会、日本消化器外科の関連施設の認定は取得しました。浜松は日照時間も日本で一番の長さで晴れた日が本当に多く、運動にも適しております。また冬はめったなことでは雪が降りません。テレビで北海道の豪雪のニュースを見るたびに、今まで大変なところで働いていたのだと感じずにはいられません。雪にうんざりしている先生方には適していると思います。

（文責：今井　敦）

砂川市立病院

当院は札幌の北東約80kmに位置する、地域がん拠点病院、地域救命救急センターで、2010年10月新病院に移転し24時間対応365日対応しています。スタッフは田口宏一、横田良一、廣方玄太郎、巌築慶一、柴田賢吾の５名です。

年々手術件数は増加しており、2014年は473件行っております。腹腔鏡手術も増加しており、腹部手術356件のうち223件（63%）（大腸癌手術の82%：55/67件、胃癌手術の78%：55/67件、胆石症の84%：59/70件、虫垂炎の97%：32/33件、肝切除の56%：5/9件と多くの病気に対して施行）に行い、さらに適応拡大、若手指導に力を入れております。また進行下部直腸癌に対する術前化学療法（+放射線療法）は治療成績向上を目指し積極的に行っております。

癌患者への化学療法、緩和治療にも力をいれ、温熱療法など先端医療も導入し集学的な治療を行うよう取り組んでいます。

地域の中核病院として、また、北海道大学病院消化器外科Ⅰとの連携を密に行い、良質な医療を地域住民に提供できるよう努めております。

（文責：柴田賢吾）

医療法人静仁会　静仁会静内病院

静仁会静内病院は徳洲会グループの一員なので、電子カルテ導入・64列CT購入、薬剤の一括購入ができる。当院は人口24,288人（2014年末）の新ひだか町最大の医療機関で町内唯一の救急告示病院である。病床数199のケアミックスで、最大の特徴は井齋院長が推進する、現代医学ベースで漢方薬（超多成分薬剤システム）を診療に活用する「サイエンス漢方処方」であり、研修のため全国から初期・後期研修医、漢方専門医受験資格取得目的の医師が集まる。常勤医４名（院長、内科部長、内科医長２名）であったが、本年３月から外科の副院長（京都府立医大81年卒）と総合診療科医師（北大05年卒）が、４月から小児科部長（北大74年卒）と後期研修医（弘大12年卒）が加わり常勤医８名体制となる。副院長は２年前まで当院に在籍。12年の手術実績は全麻126例（外科80：胆摘11、鼠径ヘルニア10、虫垂切除８、気管切開６、結・直腸切除６、胃切除５など；整形外科46：骨折手術26、股関節人工骨頭５など）で、整形外科手術に堪能で、麻酔科標榜医の資格もあるので常時緊急手術が可能。当院は全国でもユニークな『総合外科』の研修ができる施設である。

（文責：井齋偉矢）

医療法人社団　静和会静和記念病院　外科

同門の川上理事長以下３名の先輩の外科に４月より私（川俣）が加わりました。グループ全体（４つの病院と介護施設等）の経営に多忙な理事長も、昆布温泉病院で週２度診療を継続されています。

当科は、草野院長、檀上先生、私（川俣）の３名、平均年齢62±23.8歳。やや高齢な印象ですが、檀上先生のパワー溢れる仕事ぶり、草野先生の世界に通ずる学術的なご指導は同門若手先生がたにもぜひ学んでいただきたく思います。

年間手術症例は全身麻酔190例、血管造影のTAE等も外科で施行。手術応援に嶋村先生、小児外科の本多先生、宮城先生が来院。今春改装の内視鏡室での内視鏡検査は当院の小野先生を中心に北大消化器内科、腫瘍内科の応援で年間約1000例。探索病理講座の西原教授により病理学的検査も実施し集学的治療が可能。特に消化器外科では、ICGでの消化管手術時の腫瘍同定法の臨床応用を展開。ちなみに、草野院長がChief Editorの“ICG Fluorescence Imaging and Navigation Surgery”-Springer Japanは今秋出版です。

「川俣君の参入でlegendと若手との良いcombinationが出来る。川俣君の活躍に期待大。」と院長。

ICG等の新手法による低侵襲外科手術、同時に学術発表にも注力し、外科平均年齢を下げる若手の先生に注目される病院を目指します。

末筆ながら、長年当院外科に勤務された中村先生が化学療法、緩和ケア領域の診療希望で東札幌病院に転出されました。この場を借りてこれまでの中村先生のご尽力に改めてお礼申し上げます。　（文責：川俣　太）

町立中標津病院

第一外科関連病院の中で最も東に位置する病院です。中標津空港に近く、札幌や東京へのアクセスも便利です。199床の地域中核病院で、外科・内科・小児科・整形外科・産婦人科・眼科・麻酔科・放射線科・皮膚科・透析科の常勤医と循環器科・耳鼻科の出張医で地域の医療を守っています。道の災害拠点病院にも指定されDMATチームを有し災害救急にも力を入れています。

外科は長渕（院長、S51卒）、中川（副院長、S61卒）、寺崎（医長・DMAT医師、H13卒）、松井（医員、H23卒）の４名で、外来・入院・救急・手術をこなしています。年間約200例弱の手術があり、昨年はその内７割を松井先生が執刀しています。若手や中堅の先生が緊急手術を含め一般病院での手術を経験するには最適の病院の一つと思います。ここ数年は鏡視下の胃、大腸手術に取り組んでおり、本間・川村先生のご指導で症例が増加しています。1.5T MRI、64列CTに加え外科外来にドップラーUSがあり、IVRの出来る放射線科医も常勤しており外科診断・治療の応援態勢も充分整っています。道外２回、道内２回の学会研修が可能で、外科系の種々の資格取得の支援もしています。若い先生方にとっては伸び伸び研修出来る環境と自負しています。　（文責：長渕英介）

天使病院

スタッフ：山本浩史（1986卒）、中山雅人（1989卒）、大場豪（2005卒）の３名です。退局された田口和典先生が乳腺外科を担っております。肝臓外科でお世話になった松下通明先生と後期研修医の奥村一慶は４月に異動になります。

病床数：260（外科38、小児外科は小児科管理）床。

年間手術件数：Total 487、うち成人247、小児240、悪性99、鏡視下手術240（前年137）、小児日帰り138、新生児30例を数えました。

病院の特色：周産期母子医療センターであり産科、小児科が充実しており、小児外科では母体搬送、NICUに連携し道内全域のニーズにこたえています。臨床研修にも力を入れており、2015年度は６人の初期研修医を迎える予定です。第１外科からの医学生も隔週で、全国からの学生、研修医の実習も積極的に受け入れ、入局者も多数輩出しております。

注力分野：ハイボリュームセンターに比べると、リスキーな症例が多く、安全第１に鏡視下手術の適応を広げています。

昨年からの変化、近況：上記のとおりです。

（文責：中山雅人）

洞爺協会病院

当院は、社会福祉法人北海道社会事業協会が設置する７病院（函館、小樽、余市、岩内、帯広、富良野、洞爺）の一つとして、昭和５年に創立された歴史と伝統のある病院で公的病院に指定され、地域医療に貢献しており周辺住民の方々に大変親しまれております。

当地は洞爺湖、有珠山、昭和新山等有す道内屈指の観光地であり、国内はもとより海外からの観光客も多く、救急告示病院として24時間診療している救急外来にも多数受診し、国際色豊かな病院となっています。

診療科は、内科、外科、整形外科、リハビリ科、泌尿器科、小児科、麻酔科、歯科口腔外科で、北海道大学、札幌医科大学の関連施設（北海道地域大学循環型専門研修プログラム関連教育病院）となっています。

外科スタッフは２名で、科を問わず何でも診るようにしています。外科全麻件数は年間60から70例で腸切始め鏡視下手術を積極的に取り入れています。血液透析も外科で管理しており、シャント手術、PTAとも当院で完結しております。年々患者数が増加している周辺地域の期待に答えるべく、透析ベッドを拡充し現在25床で約90人前後の透析患者さんの治療をしています。

外科に限らず幅広く知識と技術を身につけたい伸び盛りのあなたには最適の病院だと思います。　（文責：青木　茂）

医療法人社団養生館苫小牧日翔病院　外科

当院は一般168床、透析94床の中規模病院で、外科、内科、腫瘍内科、循環器内科、泌尿器科、整形外科、脳神経外科、麻酔科、地域で唯一の形成外科があります。しかし医局は総勢20名足らずと小さく、応援医師に頼っています。わが外科も教室から応援をいただき、日常診療と当直をしてもらって医局全体が大変助かっています。

当院の特徴のひとつとして、病棟ごとに薬剤師が配属され、投薬のヒヤリ・ハットを強力に抑止しており、安全な診療に貢献してくれています。

スタッフは熊谷（S53卒、理事長）、櫛田（S54卒、院長）、松久（H４卒、部長）と教室からの交代応援医師１名で、昨年秋から倉内（S59卒、部長）が加わりました。圓谷名誉理事長（S43卒）は内科診療をしています。

一般外科手術は主に倉内、松久、教室応援医師で行い、内シャント造設・経皮的血管形成術は熊谷、櫛田が担い、櫛田はひとり麻酔科医を補って麻酔もかけています。外科全麻手術件数は減少傾向が否めず平成26年度の全麻件数は秋までの６ヶ月年で60件ほどでしたが、11月以降の４ヶ月で60件を越え増加に転じました。当科はいま様々な改革を始めたところです。元々あるPotentialとして血液浄化、人工呼吸器管理がコメディカルの献身的な協力で自在に出来ることを武器に、内視鏡外科手術をより広範に導入し、ERAS protocolを駆使したHigh qualityな外科診療への飛躍を目指しています。　（文責：倉内宣明）

西さっぽろ病院　外科

当院の住所は札幌市西区山の手３条２丁目で、旧国道５号線から近く、また東西線琴似駅からも徒歩で７～８分の交通の便が良い位置にあります。1982年に理事長の河西紀夫が19床の河西外科医院としてスタートし、1985年に増床して56床の河西外科病院となり、外科・消化器科・肛門科の急性期病院として地域医療に貢献しております。2012年の内科開設（消化器内科医が１名着任）とともに病院名を西さっぽろ病院として今日に至っております。消化器や肛門外科を中心に透析（入院透析のみ）などの診療を行っています。地域医療に密着しているため、診療科を問わず高齢者の肺炎なども積極的に受け入れております。

近年の手術数は全体で350件程度、全身麻酔は160～170件です。腹腔鏡手術を積極的に取り入れ、胃癌・大腸癌をはじめ腸閉塞でも可能ならば応用しています。鼠径ヘルニア・虫垂炎はその多くを腹腔鏡で施行しております。肛門外科は50件程度で推移しています。そのほかCVポートやPEGも数多く手掛けております。外科メンバーは河西理事長・山田・上井・安原の４名ですが、本年４月からは安原が抜けて教室より１週間交代で大学院生が来てくれる予定です。他の施設と同様に外科医の高齢化が著しいですが何とか頑張って救急診療を継続しております。　（文責：上井直樹）

日鋼記念病院

脇坂和貴　喜納政哉
西越崇博（外科志望２年目研修医）
高田譲二　理事長 勝木良雄　院長 柳谷晶仁　副院長 浜田弘巳　本間友樹

日鋼記念病院は1911年に日本製鋼所に付設され、西胆振地域の工業地帯において高度専門医療の提供と地域医療機関との連携を実践し、2011年には創立100周年を迎えました。2013年に新築した手術室、ICU、救急センターもフル回転しております。メディカルクラークやドクターズクラークのサポート体制も充実しており医師が診療に集中できる環境です。

初期臨床研修プログラムの充実にも力を入れております。７年前に２名まで減った初期研修医も採用枠を少しずつ増やし、平成14年度は７名、次年度は６名の予定であります。

別館に緩和病棟(27床)があり専任者が終末期ケアをおこなっております。緩和ケア講習会も毎年当院で開催されており、研修医・ローテーターが受講していきます。

地域がん診療連携拠点病院・地域周産期母子医療センター・災害拠点病院としての役割を果たし、特にがん診療においては複数科による連携は科と科の垣根が低くスムーズな集学的治療が展開されております。医師54（外科５）名、病床数479（ICU ６、NICU ６）、平成26年１～12月の外科手術件数は550（全麻503、局麻47）件、年間の入退院患者数は1144名です。透析センター（23床）は外科で管理し、透析関連手術は67件ありました。腹腔鏡下手術は年々増加しており、虫切・胆摘を除いた腹腔鏡下手術は全年度40件から大きく増えて78件となりました。

このたび19年間当院に貢献してこられた浜田弘巳先生が、道立子ども総合医療・療育センター「コドモックル」に異動になりました。通常の診療業務はもちろん教育・感染対策・DMAT活動と数々の活動に尽力され、皆に惜しまれて退職されました。開催された送別会数は両手で足りなかったとか。後任として益子博幸先生がいらっしゃいました。更なる発展を目指し一丸となって邁進いたします。

（文責：喜納政哉）

医療法人はまなす

栗林　弘

工藤岳秋

工藤謙三

・はまなす医院(石狩市花畔)院長　工藤岳秋(74期)、会長　工藤謙三(46期)
・篠路はまなすクリニック（札幌市北区）院長　栗林　弘（45期）

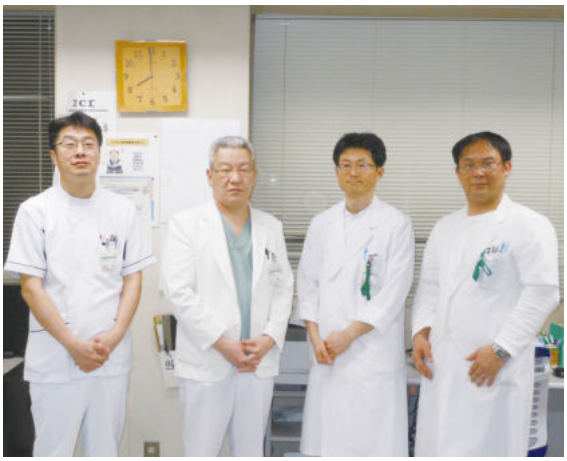
はまなす医院は上記２名の体制に加えて第一外科医局から出張医を派遣していただいており、血液透析とともに外科手術にも積極的に取り組んでいます。平成26年の総手術件数は67件、そのうち消化器関連は胃切、腸切、ラパ胆、ラパアッペ、鼠径ヘルニアなど22件でした。シャントについては外科手術が34件、PTAは109件とどちらも増加しました。

篠路はまなすクリニックはこれまで血液透析専門（52床）のサテライトでしたが平成26年５月から増築工事を行っており、27年４月から入院・手術・一般外来に対応する有床診療所となります。内視鏡・マルチスライスCTによる検査と腹腔鏡手術に対応する設備を整え、透析に加えて消化器外科診療にも力を入れていきます。札幌市中心部から離れており手術可能な入院施設は周辺に極めて少ない状況ですので、地域のニーズに応えられるよう、万全の準備を整えてオープン日を迎えたいと考えています。

今後とも医局、同門の皆様の御指導を賜れれば幸いです。

（文責：工藤岳秋）

北晨会恵み野病院



札幌から新千歳空港行きのJRに乗ると、北広島駅通過後５分ほどで左車窓に北晨会恵み野病院が現れます。恵庭市の住宅街である恵み野、この地が将来発展すると先見の明をもった故近藤博先生が、昭和61年に北晨会恵み野病院を開設しました。現在、当院の病床数は200床です。外科は中村貴久（副院長）、津田一郎、林　俊治、森田恒彦が診療にあたっています。みな外科医としてあぶらがのりきった40代です。さらに、病院に隣接する老健施設から長谷泰司先生の手術応援を仰ぐこともしばしばあります。北晨会の理念は『やさしさと温もりのある医療・介護の実践』であります。中村先生、森田先生は故近藤博先生から直接薫陶を受けており、その教えを今に引き継いでいます。当科の手術症例は年間330例程度で、主に胃癌、大腸癌を対象とした消化器外科であります。内視鏡外科の導入に関しては幽門側胃切除、結腸切除、直腸前方切除、鼠径ヘルニア、虫垂切除などで３－４年前から始まっております。対象はまだ症例を選んでおり、ガイドラインに準拠する姿勢をとっています。毎年、外科メンバーのだれかが日本内視鏡外科学会に演題を出し情報収集に励んでいます。

（文責：津田一郎）

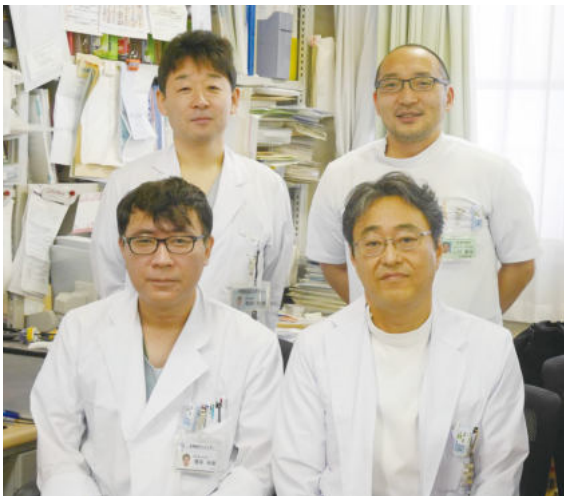
北海道医療センター

左から　坂本、高橋、小野（初期研修医）、植村、伊藤、蔵谷

北海道医療センターは27診療科を標榜し、全病床数は500床で、一般410（救急30）、精神40、結核50床で構成されています。３次救急の急性期から神経難病、結核などの慢性期疾患まで幅広く対応し、さらに精神科身体合併疾患など特殊な診療も担当しています。開院時は北大第１外科と北大第２外科とで、外科・呼吸器外科を一緒に担当していましたが、北大第２外科は昨年９月に外科から撤退しました。呼吸器外科は既に北大循環器・呼吸器外科に所属しております。従って現在は北大第１外科と北大循環器・呼吸器外科と共に診療する形に落ち着きました。外科の病床数は35床で、３階の外科・腎臓病センターにあります。平成25年の手術件数は504（全麻463)件でした。急性疾患が多く､臨時手術は全体の20%を占めております。急性虫垂炎、鼠径ヘルニア、胆石、急性腹症などの他にも、癌の治療にも力を入れております。内視鏡下手術は次第に向上し、手術数全体の中でその占める割合も増加してきております。

（文責：伊藤美夫）

北海道がんセンター消化器外科



スタッフ：濱田朋倫、篠原敏樹、二川憲昭、前田好章

私共の施設は、2000年代初頭に国立札幌病院から北海道がんセンターへ改称し、現在へ至っています。乳腺外科と呼吸器外科が独立していますので、純粋に消化器外科の悪性腫瘍手術中心の診療を行っています。近隣施設には、急性腹症・虫垂炎・胆石、等もいつでもwelcomeですよ、と事あるごとにアピールしているのですが、がん以外の疾患の割合はかなり低くなっています。

本業の癌手術は年間で、胃50-70件、大腸癌70-90件、肝切除（原発＋転移）20-30件、胆膵20-30件程度で微増の状況です。当科の特徴として、他科（婦人科、泌尿器科、等）との共同拡大手術、癌性イレウス等に対する症状緩和手術がそれぞれ年間20-30件程度あるのが特徴です。近隣に大病院が多い激戦区のなかでも少しずつ手術件数を増やしています。

全手術件数でみると年間300件強ですが、そのほとんどが消化器のmajor手術です。

手術は少ない出血量で、郭清のきちんとした質の高い手術を実践するよう努めています。腹腔鏡手術は結腸癌はbulkyなもの以外はほぼ全例を適応にしています。胃癌については原則早期胃癌から、進行癌へ適応を広げつつあります。

当院では2013年秋より泌尿器科でダビンチを使用したロボット支援手術が行われています。今後、消化器外科でも臨床研究として開始できるよう準備をしています。

研究テーマについては、以下のような項目については継続的に全国学会に発信しており、シンポジウム等上級演題・国際学会での発表機会も多くなっています。

・大腸癌集学的治療（Conversion肝転移切除、肝肺転移切除、Repeat肝転移切除、等）
・胃癌NAC後の外科治療
・3D-CT画像ナビゲーションによる腹腔鏡下大腸癌手術
・癌性イレウス等に対する症状緩和手術

これらの学術的活動を行うにはData baseの充実が不可欠であり、Data baseの整備に時間をかけています。国立札幌病院のころのパンチカードの時代からの受け継がれている自分達のデータで発表するというスタイルを大切にしています。この伝統を大切にしつつ今後とも、臨床・研究活動に精力的に取り組みたいと考えております。

（文責　前田好章）

北海道がんセンター乳腺外科

後列左から馬場、五十嵐、佐藤、渡邊、高橋、富岡、萩尾

北海道がんセンター乳腺外科は関連病院ではほぼ唯一の乳癌診療に特化した診療科です。診断、初期治療から転移再発乳癌の治療、緩和医療に至る診療にあたっています。

スタッフは、高橋將人（統括診療部長・平成元年卒）、渡邊健一（医長・平成元年卒）、富岡伸元（平成３年卒）、佐藤雅子（平成７年卒）、馬場基（平成15年卒）、萩尾加奈子（平成23年卒）の常勤医６名と五十嵐麻由子（非常勤・平成14年卒）の計７名で、高橋、渡邊、富岡、馬場の４名が第一外科同門です。

2014年は、新規乳癌手術312例、全手術数504例、病床数30床、平均外来数81.6名、年間の乳癌化学療法施行4000件超で９割以上を外来で実施しました。

当科は、初期治療はもちろん、進行例、転移再発乳癌を含めすべての症例をお断りするなく診療する方針です。治験・臨床試験への参加を重視しており、症例登録数は全国有数です。新規薬剤・治療の開発、エビデンスの創出に貢献したいと考えています。

形成外科との連携による乳房再建（同時・２期的）、内視鏡下乳腺手術、ラジオ波熱焼灼療法（臨床研究・先進医療）なども実施しています。遺伝子・先端医療外来を開設し、主に遺伝性乳がん卵巣がん症候群（HBOC）に関するカウンセリング・遺伝子検査に対応しています。またHBOCに対するリスク低減乳房切除を実施出来る体制とし開始しています。お困りの症例などございましたらいつでもご連絡ください。

（文責：渡邊健一）

北海道対がん協会

北海道対がん協会札幌検診センター外科（乳がん検診部門）の固定医師は１名、病床も手術もありませんので、簡単に乳がん検診の現況を報告させていただきます。

札幌検診センターでの検診数は年間約３万例、道内各地で行われるバス検診は約２万５千例です。センターは午前２診、午後１診で行っており、北大第一外科、乳腺外科、関連病院の先生方にご協力をいただいています。それに加え、バス検診においては札幌医大、旭川医大等の先生方にもお手伝いをしていただいています。

多忙な外科医の現状、北海道の地理的条件、視触診の効果等を考えますと乳がん検診に外科医の労力を割くことはためらわれます。何とか視触診を省いた検診を普及しようと試みておりますが、当協会は市町村から検診を受託している立場で、主体的に働きかけることは難しい状況です。それでも、今年度から僅かですがマンモグラフィのみのバス検診を導入しております。

そのような状況ですが、皆様のご協力でなんとか維持できております。この場をお借りしてお礼をさせていただきます。今後ともご協力をお願い申し上げます。

（文責：池田由加利）

森町国民健康保険病院

スタッフ数：２名（同年齢の嘱託医同志）
病床数：30床
年間手術件数：全身麻酔０、腰椎麻酔０、局所麻酔200件
病院の特色：森町は、高齢化率が31％です。受診者も高齢の方が中心です。整形外科疾患が主体です。胸椎・腰椎圧迫骨折、腰部脊柱管狭窄症、大腿骨頸部骨折、変形性膝関節症など、全分野に及んでいます。当科では、受け入れ、手術を行う病院への紹介、術後のリハビリを行っています。函館中央病院整形外科から週２回派遣していただいています。手術適応判断の後、優先的な転院体制をお願いしています。
特に力を入れている分野：血管疾患は、MRI、CTアンギオで、早期発見、早期手術を目指しています。また､腰部脊柱管狭窄症はMRIでの診断のもと、患者さんのADL改善を目指して、薬物治療に力を入れています。
近況：H26年３月末に定年（65歳）となり、４月１日から嘱託医で仕事をしています。管理職から離れたため、実に気楽に臨床に力を入れることができます。笑顔が売りです。

（文責：川崎和雄）

編集後記

2014年度の医局年報を無事発刊することが出来まして、安堵しております。初代編集長の大任を果たされた柴崎先生から編集委員を引き継ぎまして、非常にプレッシャーがかかり、胃に穴が開きそうでした。その様な中、各関連病院の先生方からの病院紹介を拝読していると、これまで自分が勤務した病院は懐かしく、勤務していない病院には親近感が湧く様な楽しみも味わえました。内容としては、皆様に楽しんで頂ける様、読み易さにも気を遣ったつもりです。是非、ご覧になって頂ければ幸いです。最後に、御寄稿頂いた先生方、編集に際し御尽力下さった秘書の小原さん、川口さん、中澤さん、塩田さんへ心より感謝を申し上げます。(T. Y.)

消化器外科学分野Ⅰ　教室年報2014

平成27年５月発行

発　行　北海道大学大学院医学研究科消化器外科学分野Ⅰ
TEL：011-706-5927
FAX：011-717-7515
ホームページ：http://surg1-hokudai.jp/

印　刷　北大生協　印刷・情報サービス部